所圖會 前編

七

ル 4
3376
7

門ル 呂3
號 238
巻 7

尾張名所圖會巻之七

目録（海東郡 海西郡）

海東郡解　法界門橋　萱津里　萱津古驛
阿波手森　藪香物　阿波手社　阿波手浦
反魂香塚　反魂香と焼図　權藥師　正法寺
妙勝寺　光明寺　大銀杏　實成寺
萱津古戰場　甚目寺　同初觀音柰　上条凧
吉田八幡宮　大吉寺　東勝寺　延命寺
義教公富士御覧の図　方領大根　石作村
石作神社　中杜天神　中森　新屋村
新屋天神　法性寺　小町塚　新居家川
高宮社　福嶋正則宅址　菊仙院　花正村
法藏寺　藤木田　木田重長宅址　貴船社

門ル 4
號 3376
巻 7

三位法印宅址
根髙地藏
八ツ屋孝女の碑
同後園林泉の圖
伊福部天神
神守驛
諸桑村古船堀圖
甘樂名神
水鷄塚
西光寺
源氏嶋
津嶋里
牛頭天王社
蓮華寺
根髙松岡
砂子川
圓長寺
河兼天神
憶感神社
日置村
由乃伎神社
佐屋川
蜷江川
善太川
津嶋渡
末社
蜂須賀正利宅址
万場渡
自性院
藤嶋神社
面足尊社
日光川
若宮八幡
佐屋驛
戸田米
須成天王
圓成寺
佐屋津嶋追分の圖
例祭
勝幡城址
万場驛
馬嶌明眼院
廣濟寺
義經弓掛松
諸鍬神社
光明院
相江天神
佐久間城址
龍照院
大井神社
春縣神事の圖
流鏑馬
社僧四ケ寺
社家町
妙延寺
興善寺
本蓮寺
市神社
姥ケ森
海西郡ノ解
西音寺
光耀寺
関通上人傳
蓮根
六月船祭の圖
天王橋跡
四家七黨
土御前社
八劔社
成信坊
名産あかだ店
馬津古驛
圓通寺
給父渡
一心寺
石田里
古川城址
神領
奴野城址
瑞泉寺
貞壽寺
蓮臺寺
名産白雪粔
大龍寺
宇太志神社
百合根
早尾渡
小杜天神
子消里
神主氷室氏
木下藤吉天王參詣圖
西福寺
教信坊
常樂寺
名産麩
十二城址
石塚
横井時永の傳
葛城古渡
連理菊
市腋嶋

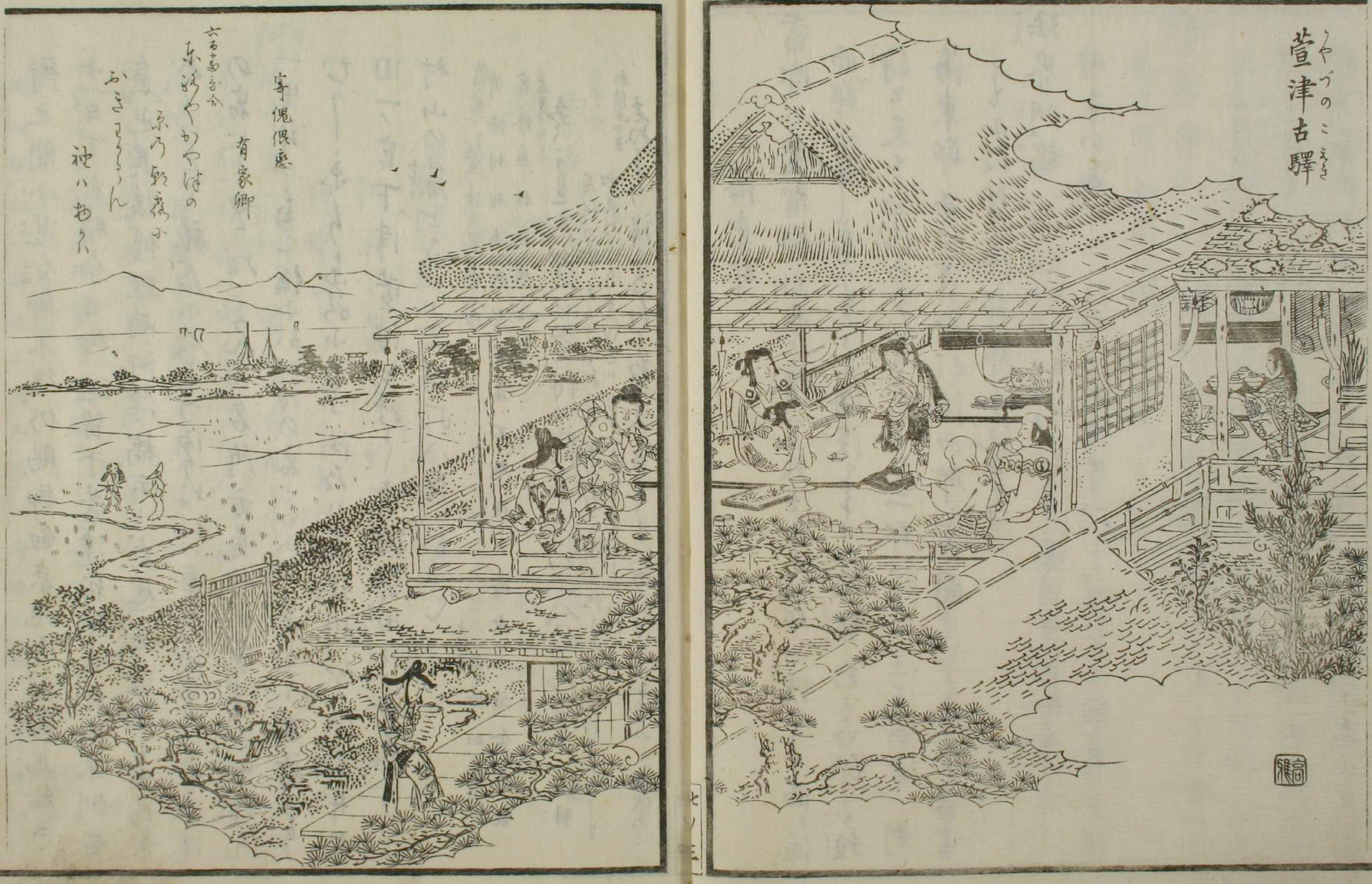
赤星名神　大楠　筏川　弥勒寺
宮筠圃の傳　筏川岸桃林の図　孝女そよの傳　忠女ちゑの傳
森津藤架　孝女とさの傳

海東郡

當郡は愛智郡の西に隣り北は中嶋郡と境ひ西は海西郡に接し南は遠く海濱にして海部郡といひしが頼朝公天下を治めたまひしころより二郡にわかち東の方は則海東郡西の方は今の海西郡也六國史をはじめ古書どもには皆海部郡と記せり

法界門橋（上萱津村の北なる五条川に架せる長橋なり）むかし甚目寺大伽藍なりし時東の惣門にありて法界門とよびしが頽廢して後其名のこり此橋に称ふるなり

萱津里（今上中下の三郷とわかりてこの地頗るひろし）東鑑に建久六年六月廿九日壬午着尾張國萱津宿給當國守護人野三刑部丞成綱進雑事嘉禎四年二月十日丙戌晴萱津御宿亥刻將軍家俄御不例御霍乱歟諸人驚騒醫師時長施醫



萱津古驛

かやづのこえき

寄傀儡恋　　有家卿

六百番哥合
東路やかやはの
ゐ乃軒露に
おきまよふらん
袖ハ物うく

術之間小選令御本復仍賜御劍京兆令引御馬給云々
十一日丁亥晴今日御逗留于萱津宿依去夜御不例餘
氣也其後修理兩河浮橋云々 貞應海道記に幽月景
あらはれて旅店に人しづまりぬれバ草の枕をしめて萱津
の宿にとまりぬとあれど名所方角抄に萱津は下津より
一里斗り南也 宿にかいばの宿といふとみえたり 古渡より
むかし京より東路に至る海道ハ墨俣川および玉井黒
田一ノ宮下津萱津を経て古渡熱田鳴海また二
村山の麓をとをく三河の八橋へかゝりし

尾張八景 萱津里夜雨　大徳寺 天倫和尚
蕭條村雨滴新愁 連屋不眠夜正脩 世上繍衾香帳
客 終無桂玉掛心頭

名寄 冬こえ乃都への萱津ハ蛇よりも行かふ人のつまやさしき　長明

新續古今集（尾張の国に京よりわたりける男のかよひつき侍るをいかにのかりあんとしけ／れば志ぬぞかり見けるハいへきんちせねしといひけれ）
志ぬぞかり強ようけく恋しきハ會えしまにのひかりをおもふ　傀儡わこ

藻塩草に萱津の東てふつの里も出るとあれハ此ふこハかや津の宿の名なるべし

萱津夜雨

尾張八景 雨の夜の旅の東のおとさく萱津の里ハいとゞさびしき　紹益

名所今歌集 ふるさとをおもふ人の津の宿をたのみさそふかかやつの東　猛彦

口 東路や萱津の東とかゝるにも先立つ人のむかしの面かげ　春蔭

枇杷園句集 五月雨や是ハ屋根ほるかやとう郷　士朗

泪かなし萱津の里乃むしり尾花　騏六

白露やいつ迄千年の松のこけ　徐英

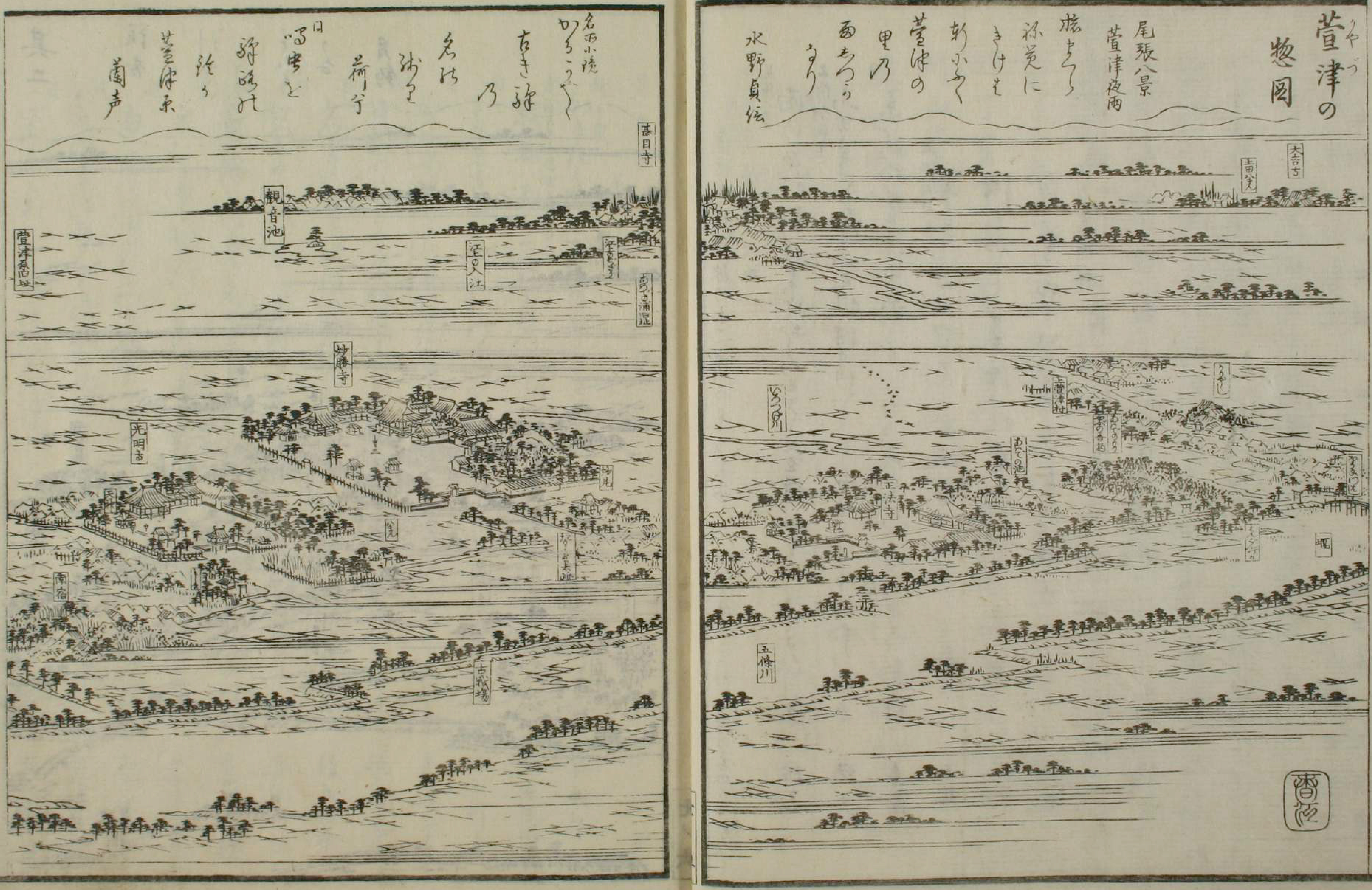
阿波手森（上萱津村にあり） 古人の秀詠多く蒼鬱たる古林日の影と
見えぬ木のかげハ昼も暗く人跡稀にして物すごく寂寞たる
勝地なり藻塩草に尾張なりと又名所方角抄に阿波手
の杜浦里有之下津ゟの里の南にあり遠保名所にも入れり
とあるし阿波堤栗手粟殿などゝも書りとぞ

尾張八景 栗手杜晴嵐　大徳寺覚印
楓樹飜紅如錦繍 海潮湛碧似瑠璃 翠嵐一帯添奇

萱津の惣図

尾張八景
萱津夜雨
旅ねして
袮覚にきけそ
新ふく
萱津の
里乃
雨そゝく
なり
水野貞伝

名所小謡
かちこつや
古き跡
乃
名にし
於ふ
稲荷
日
鳴虫を
評流れ
給ふ
萱津東
蘭声


甚目寺
觀音池
萱津香の物
江の入江
妙勝寺
光明寺
南宿
古戦場
上萱津村
正法寺
五條川

景粟手林齋樂者誰

歌しら波

新千載
かきたえて人も梢のなげきこそはゝその森となりけれ　紫式部

建保三年内裏名所百首
同 我恋ハはゝその森乃下葉の人こそしらね色にいでぬれ　順徳院御製

同 さりともと思ふにもいかゞ露の色もはゝその杜の名をたのむ（ぞおく）　僧正行意

同 かつ見れはけさの玉かづらよりけくはゝその杜の秋きえねや　参議定家

同 日数ふるはゝその杜の下紅葉そむる露の色ぞかはれり　従三位家衡

同 名にしおはゞはゝその杜の下葉るきハたのしれ秋もの一露　俊成女

同 いつとてもはゝその杜の夕露のみに秋風にたえ侘ちらん　兵衛内侍

同 色深き時雨も露も染わけてはゝその森の秋乃ならひ　宮内卿家隆

同 身にしむるおもひこれもしらせばやはゝその杜の秋の末の木ゝし　右近衛中将忠定

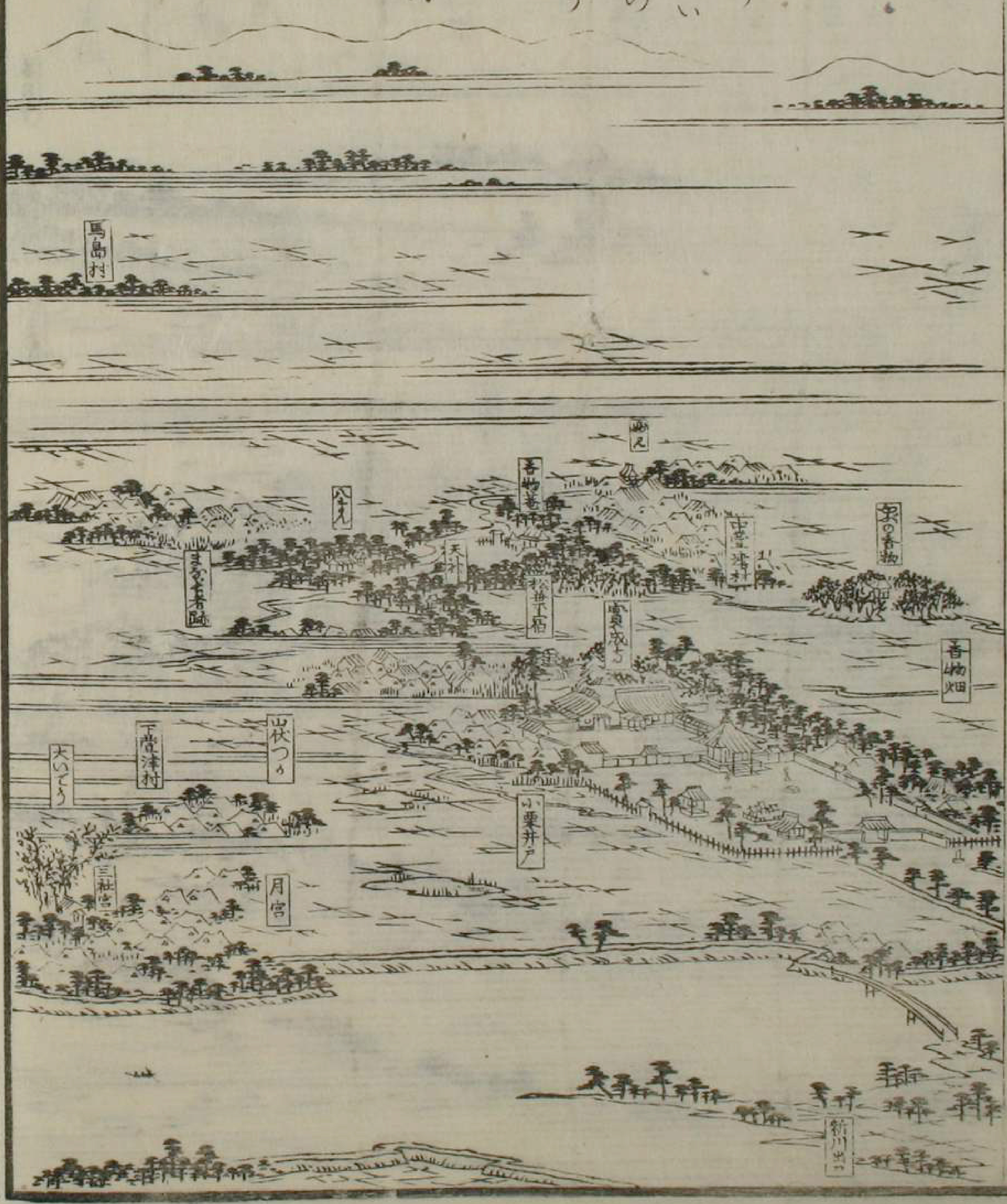
同 白露も染めかへてを梢よりまるもはゝその森の下草　前丹波守知家

同 そのまゝにはゝその杜の秋の色神なりほとにならぬるかな　前丹後守範宗

同 時しもあれはゝその杜の名もはらしうきそらしたる苦しさ　散位行能

其二

沼杏より
つゞいての
しほみち
る
月釣


馬島村
山尾
香物菴
八丈丸
天神
まさかど古跡
中豊津村
象の香物
松井下宿
寶泉寺
香物畑
山伏つか
下豊津村
大いてう
小栗井戸
三社宮
月宮
新川出口

同
絶はつる身をうつせみのからをだにはゝその杜にとゞめやらん　蔵人左衛門尉藤原康光

△色葉集
なげきのみ志げく成りけり我身かな君にはゝその杜もやあらん　相模
康平三年三月十九日ある人の一家にて雨〻の名とかね世路ひけるに相模
よみける歌也はゝその杜ハ尾張の国にあり昔妻夫と見むとて歌よみてはゝその
波表にゆきつきてはひ見返して死にけり是によりてはゝその表とハ名
けるなりあこを出をとゝりといふ歌を書てあると尾張とハ注するなり△

夫木
つかふなかはあをそてはゝそのほどを志のびをさる夢ぞつゝ　琳賢法師

同
我ためにはゝその杜の露ならはつまよぶ鹿の立ぬまて啼　土御門院宰相

雪玉
人心をけしく見つるなきよりさてやはゝその森の木のは　内大臣実隆

自歌合
今宵もしらはゝそのもりの秋風よ木の葉ふりしくちきるとは　豊原統秋

延享二年公宴
いつまてかかはらぬ神の名つらんかはそてのもりのかはぬなけきに　通枝

我うけき人のけしきに志きりあひてそてははゝその表となるらん　契沖

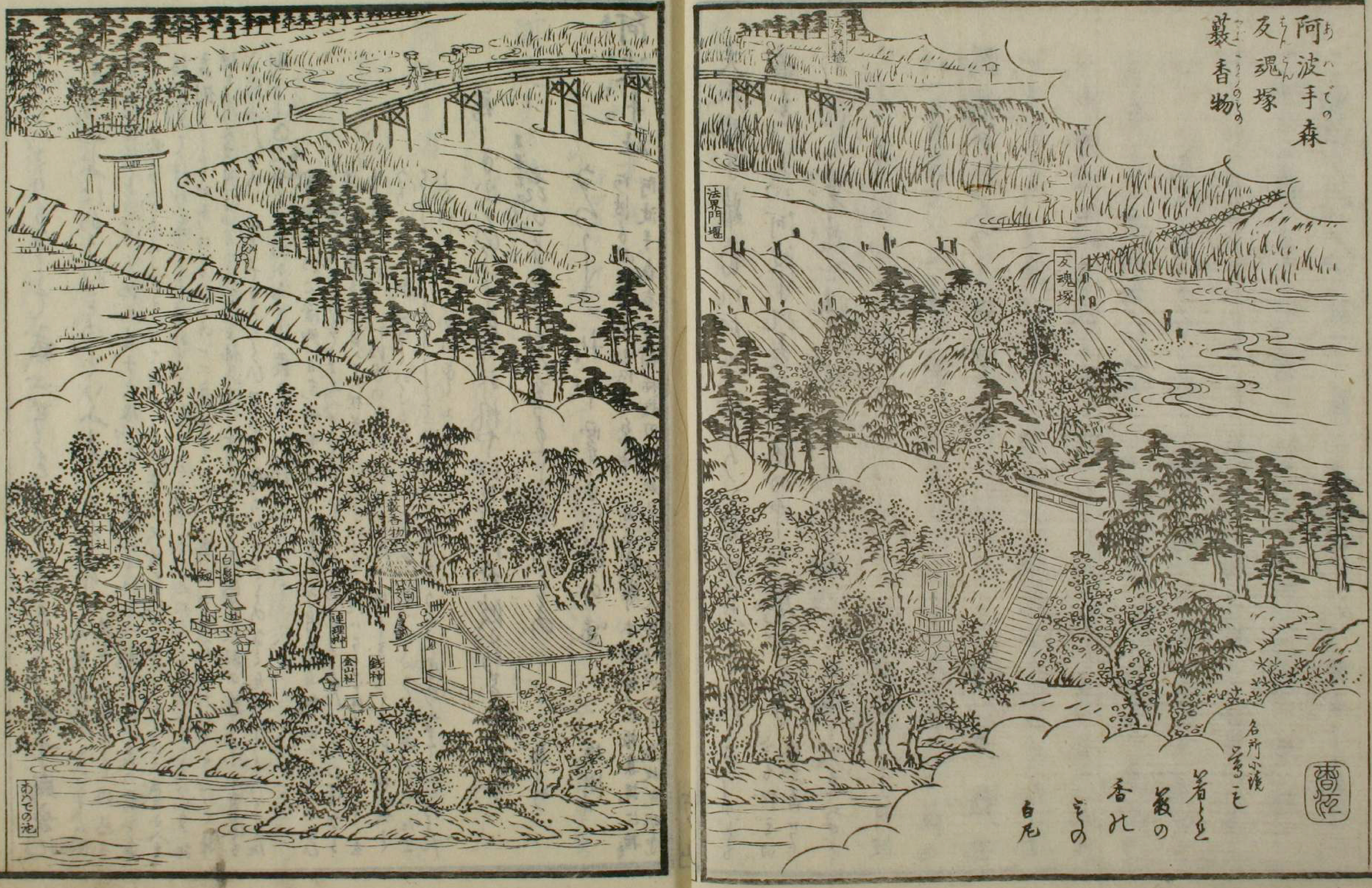
△冨士見道記
十三日にはゝその表つゞきの妙法寺兵行表の東に反魂香焼所又表下に社あり
萩の香の匂入し寵あり

神よりもやはゝその表の初栬　紹巴

曠野集
萱菜一把かりてとれるはゝそに　湍水△

藪香物（やぶのかうのもの）

△同村正法寺にて製す　むかし萱津の里に市ありし時近里の農夫瓜茄子蘿蔔の類の初なりを熱田宮へ奉らんとゆきしかども道遠けれバ阿波手の表の竹林の中に甕を埋き（今も此古旧姿を存せり）あらゆる菜蔬を諸人投入れ塩を思ひ〳〵に撮み入れなどせしが自ら混和して程よき塩漬となりしを二月十一月十二月彼社へ奉献せしに是を藪の香のものと名づけしと後世路傍の行人など神供のおとりも怖れどもとり喰ひ或ハ採摘ともかくつゞけしかバ終に正法寺の境内にうつして今に至ると熱田宮へ奉納するを例とすれ藪に香の物とハふるき言葉にて十訓抄に菅三品の家にて人ゝ月とてあそびしに或人月ハのぼる百丈楼と誦しけれバ老たる尼のやしげなるがたれときかで僻事を誦じおハします月ハうすじろハ楼にも登るべき月にハ登るとぞ故三位殿ハ誦じ給ひしといひければ人ゝ恥て藪に香の物といへる児女子がたとへ


法界門橋
法界門堰
友魂塚
本社
八剱
白鳥
藪香物
連理木
金山社
銭神
あはでの池

阿波手森
友魂塚
藪香物

名所小謡
嵩こと
着もと
藪の
香れ
ぞの
白尼

まぐつハざりけるとて感心せられけるよしに志るし　源平盛衰記

ひとやぶにかゝりぬとのといふ事なんなり　尾陽雑記に云　むかしハ正法寺大地にして住ハ東巌禅師といへりしころ此辺の茄子大根小角豆蕎麦やうのものを商ふ人此杜の前を通りけるが必一ツ二ツ此所にさゝげて通りけるを禅師只捨置べきにあらずとて餓鬼に施と定てほけ置しより初ハとりや大方日本香のあれとしあるべしといへり　扱吉例として此所の売れものと二月初午の日に熱田に其ゟ三十二をさゝげて祢供えし又十一月廿四日まで是を俤ふことを阿波手の杜の藪の中に有りけるがいつれその来りてよりてひ果にて探らしきもの出込しけるに制しけりて今ハ島内に来り藪の中に潰金すり云々

淹流

宰相中将公澄卿日光例幣使に下らせたまひし卯月廿六日熱田に宿らせ玉ひしかバまゐりてまみへまいらすれバ千鳥なまりし扇二尺の浦うる浅萩藤原季忠貝うて硯蓋にしてまいらせたれバことに興じましくて去年まいらせし阿波手の森の絵掛院に御しましくたれバ御慰とかりし　叡慮にもかなはせたまひしとのはつあるもまさうくと落せさせたまちんこうけたまはりて枚ならぬ身のほまれを雲の上まで及び侍らんとかけてもおもひ奉らざりし

ゑうるにかひくもかれ神風や伊勢の浜荻波に朽せて　信景

尾張名所和

袂のうちに匂ひあまるや香のこの　廬竹

なつかしき秋や粟手の浦の味　雄淵

阿波手社

（あはでの）

阿波手ノ森ニ有神祠称熱田神疑ハ是萱津天神社而以香物故光明寺（阿波手の森の中にあり今猶存）（日本武尊本國神名帳集説に拠る）

境内ニ亦祭ル之歟云々

末社

八剱大明神　白髭大明神　金山彦尊　銭神（此外数祠あり）

連理榊

社前にあり

詠阿波手神社倭謌

みしめなるうけもちふは森の名の粟手とてや神のうくるらん　賀茂季鷹

阿波手の里

むかし此辺にありし里にて萱は近きころまでありしが今廃して其跡定かならねど古歌によりてこゝに挙るのみ

（阿波手のさと尾張歟しらぬ）

夫木

日くるゝハあはでの里のなごりにて夕ぐれのかねのおときこえを　よみ人志らず

阿波手浦

藻塩草に尾張とあり　此浦むかしハ入海にて阿波手の森のあたりまで汐さし入海士の住家もありしが中世埋もれて熱田と隔て海遠くざかりて遠し古歌によりて俤ハ絶てなし纔に萱田蒼海変易れたりしまのわたりみえぬ地を

金葉

名にたてるあはでのうらの蜑なれもみるめハかつくものとこそきけ　源雅光

千載

しほたるゝ袖のひるまハありやともあはでの浦の海士にとはゞや　法印静賢

新勅撰

我恋ハあはでの浦のうつせ貝むなしくのみもぬるゝ袖かな　後法性寺入道前関白太政大臣

続古今

頼めどもかひなきものを名にたてるあはでの浦の海士のもしほ火　後鳥羽院御製

同

見やはわかあはでの浦にやくしほのけふり絶せぬ思ひなるらん　平親清女

続千載

恋わびてもえむ煙の末もうしさのあはでの浦乃もしほ火　為道朝臣女

同

いかにせんあはでのうらによる波のよるさへ人とみる夢もなき　荒木田秀宗

續後拾遺
いつまてハなるみのうらにやはらふうたゝせぬねかひすらん　達智門院

新千載
いつしかもなるみのうらによるへなき我身を今ハ海士の捨ふね　前大納言為世

新續古今
いつまてかちかやとをりひきうるなるみの浦の庵のいさり火　寂縁法師

夫木
うせをやなるみの浦乃うつを見うらしてなきそくきと　琳仁法師

同
なのうちを笠の見るめ小かりしてなるみのうらにてひとをなを　基行

同
波風よ夜ひるをす小夜ふかくさてもなるみのうらこそなけ　前大納言基良

家集
今宵なるみのうらの見なれ貝ふさ居ても絶えてねよや　藤原隆信朝臣

李花集
よるなみなるみのうらに吹かれて年ふるなみの袖ハいかなと　宗良親王

天授元年五百番歌合
いつまてをなるみの浦のあら波と袖よりけても見る月日ハ　権中納言実具

千首和歌
いつまてかなるみのうらにうきるの見るらはらふ袖ぬれさまし　為尹卿

嘉元仙洞御百首
いくたひもなるみのうらによる波やあらしつきに立ゐるらん　藤原基忠朝臣

閑田詠草
いつまてかなるみの浦の海士ころもかわくまなき波よ袖ぬらすらき　伴蒿蹊

いつまてんなるみのうらの見えしき恋にさまよふ身を　琛足

恋しなるかひやなかんいつまてかなるみの浦の海士となる身ハ　僧日潤

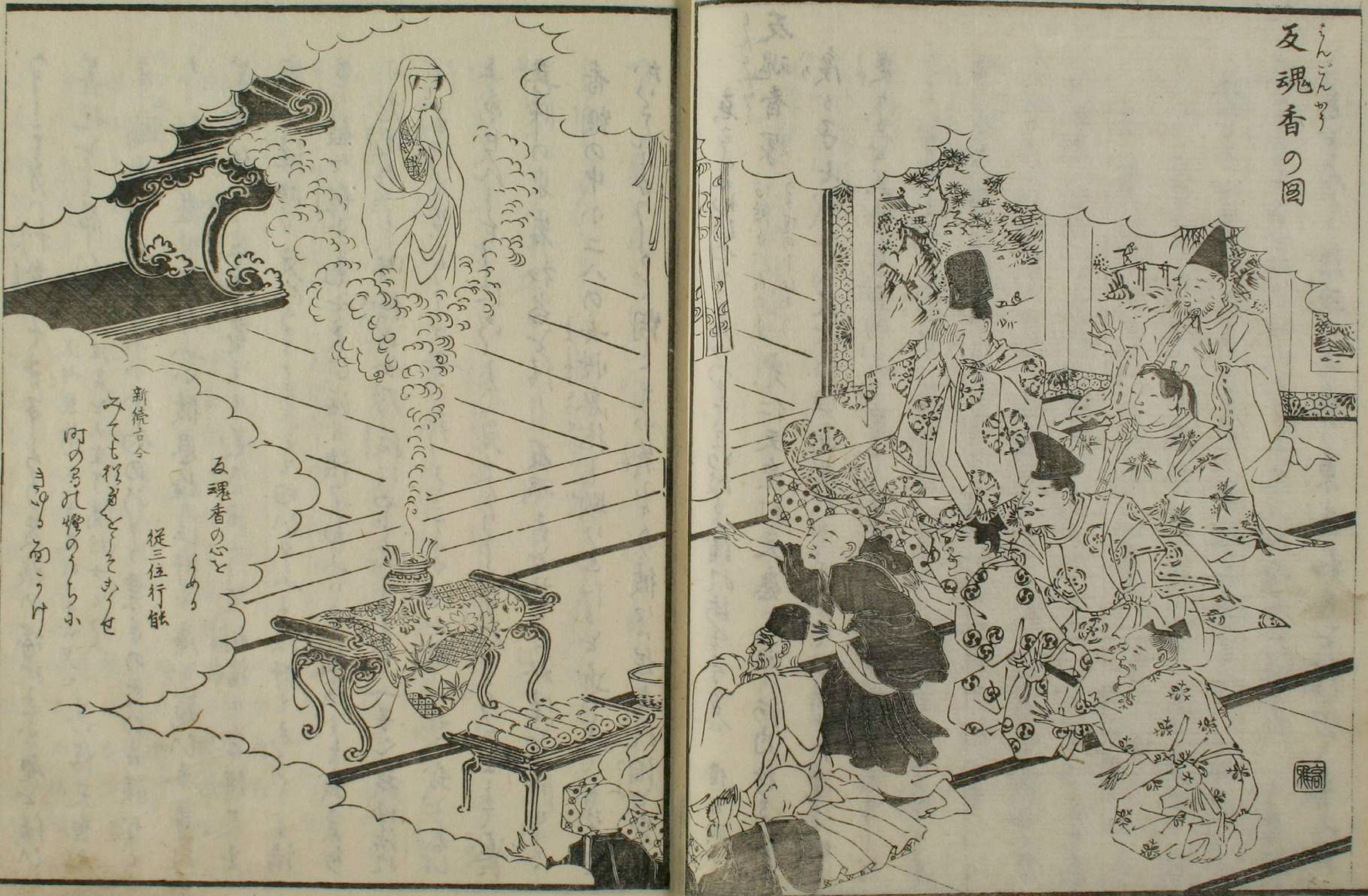
反魂香塚（なるみの浦の東　ろう堤の下にあり）

光仁天皇の天應元年河内権守紀是廣が子七歳にて父と別東国に下らんとて此所まで来り終ひ失ぬると父是廣出羽より登るとて此に来合せ我子の死せし残きゝ智光上人を招きて反魂香をたき志げしの冥會を遂し跡塚なり今も此塚あり委しくハ名古屋七ッ寺の條に志るしたれバこゝに略す又正法寺縁起に志るせるハ當寺開祖東岩和尚此浦に草菴を結びて有しが光仁天皇の寶亀十一年奥州信夫の里より若き夫婦（夫を恩雄妻を若姫といふ）上京せんとて爰まで来りしに若姫病にかゝりて遂に身まかりぬ病中に一首の和歌をよみて恩雄に示せり

忘るなよ我身きえなバ後の世のたゝき志るべに誰とたのまん　と恩雄

こたへなんく悲歎のあまり東岩和尚と語りて営み残

反魂香（はんごんかう）の図



新続古今
反魂香の心を
よめる　従三位行能
みても猶なくとゝきゝせ
何のうれ燈のうちに
まゆる面かけ

かしこき男ハ剃髪して弟子となり若姫の塚のほとりに庵を結び菩提をぞ弔ひける（此時恩雄ハ廿一才若姫ハ十六才也法名を大空了覚信女といふ）其後天明元年橋本中将関東に下向のおり栗手の森の古蹟などさくかしこ遊覧ましますに彼恩雄法師が庵を窺ひ本尊の業師佛いと尊く庵主も若き身にして殊勝に念佛せるを感じ法師が身のうへまでも問ひ給ふに法師もしか〴〵と語れバ彼は顔色を失ひ涙く語りたまふハこの若姫こそ我實妹に左遷ありし時賤の女の胎にやどせし一子こそ我なれ後音信もせざりしが母ハ死してこの子汝に嫁し共に我を慕ひ上京せんとせしに途にて身まかりし[illegible]遂に其師の東岩和尚を請じ反魂香を焚き秘法を修せしバ香烟の中に二八の女性忽然と顕はれけるを追つきて玄裳をかいさんとせしかど烟と共に失せけり彼にハ愁嘆の泪とそゝぎつ亀と友を見ひれわかちうら神にちかひねむりし然しきと詠じたまひけれバ法師もおもひきや花のときされましとて烟の中に見るまでとハしぞ詠じたる夫ゟ此塚を反魂塚とよびそめしも委しくハ縁起に出されども事長かれバ爰に略しぬさてかゝる傳説あれど七ツ寺の縁起にハ大小異同ありて一定しがたけれバ今二説ともに畧と挙て以て後考に俟つのミ

（按るに反魂香の事讀我邦にてハ當所にかぎらず彼土にてハ白氏文集東坡詩集等の注にのせ見えて其余の史籍にハかつて載せず又其法を知る人とても絶てなけれバ其名のミに知ざるハいよ〳〵惜し）

千村鼎臣

金釵埋没幾星霜　獨有荒墳倚路傍
千里追尋曾此到　一身難苦備能嘗
反魂香古音容絶　墮淚碑殘感慨長
時憶聊焚紙錢去　不逢林下弔藤姫

暢園詠物詩

岡田新川

馬鬣封猶在　荒涼古道邊
偶逢遊目日　追想反魂年
影冷三篙水　香銷一炷烟
豈無桒海感　悵望對枯蓮

青生元宣

栗手無人訪　郊原艸色平
反魂香火地　懷古不勝情

紫山東巒

正是春光欲盡時　落花芳艸弔藤姫
追思往事豈無

ㇾ涙祠畔猶餘連理枝

（堅孟集）粟の穂にとまりしと鳴虫もあれ　琴宇

落燈る草や粟まれ夜のつゆ　松兄

秋もこや萱るやかうり鳥れ声　天老

権薬師（上萱津村にありて正法寺の隠居所之）本尊（薬師如来聖徳太子の御作而して藤姫のちなそうり）藤姫位牌一基（大空了覚信女位うらに宝亀十一年八月十四日とあり上の方に三ツ巴の紋見えたり）

（仮葉沙ゆく）昨れ葉のかろつく是ろきめうぞ　白図

秋のゐむしろ四五枚たゝみたり　少汝

宋れ戸の花葉よたゝもし夕られ　岱青

日東山正法寺（同村にあり曹洞宗熱田法持寺末）本尊（正観音の木像）寺宝（藤姫の画）鉦（藤姫の所）阿波手森謡本（古写本一冊）縁起に云当寺ハ天平勝宝年中唐僧東岩和尚といふ肇創の師とし元和元卯年今の宗旨に改め法持寺の八世月峯慶呑和尚といふ中興の開山と

すなく（古讀古後のふあとて国君より香のこの田若干の除地と賜ぞ今も此寺に傳す）毎年当寺より熱田宮へ香ち御供米等を奉献し（二月初午　一黒米三斗弐升五合　一香ち糯三十二俎　鏡一ツ二瓜二ツ挙二ツ　一葉菟一俎　活栃菟と同じ　一柳箸十二本　但寸法三尺　一竹棒三本　但寸法三尺　捻月廿三日年刻　一黒米七升五合　一香ち菟十二　一葉菟一　一柳一本　右諸祇初午と同じ）

長生山妙勝寺（同村にあり日蓮宗京妙本寺末）開基ハ日蓮上人の弟子日妙よして尾張四ヶ寺の一之福島左衛門大夫正則寺領及び境地を寄附ありし坂東の惣本寺なり○本尊（法華三宝）寺宝日蓮上人木像（日法の作）其外数多あれど略しぬ

横笛山光明寺（中萱津村にあり時宗相模藤沢の清浄光寺末）弘安年中一遍上人の開基而して上人巡國行脚の時当寺へ来らせ給ひ当寺に逗留ありて諸人結縁のため六十万人決定往生の六字名号を授けられき旧例之その時　國君より厚く崇敬ありしと三國傳記に永和年中尾張の萱津の道場の住僧洛陽七條道場の寄ありて上洛として梅華無尽蔵にも尾陽萱津の道場

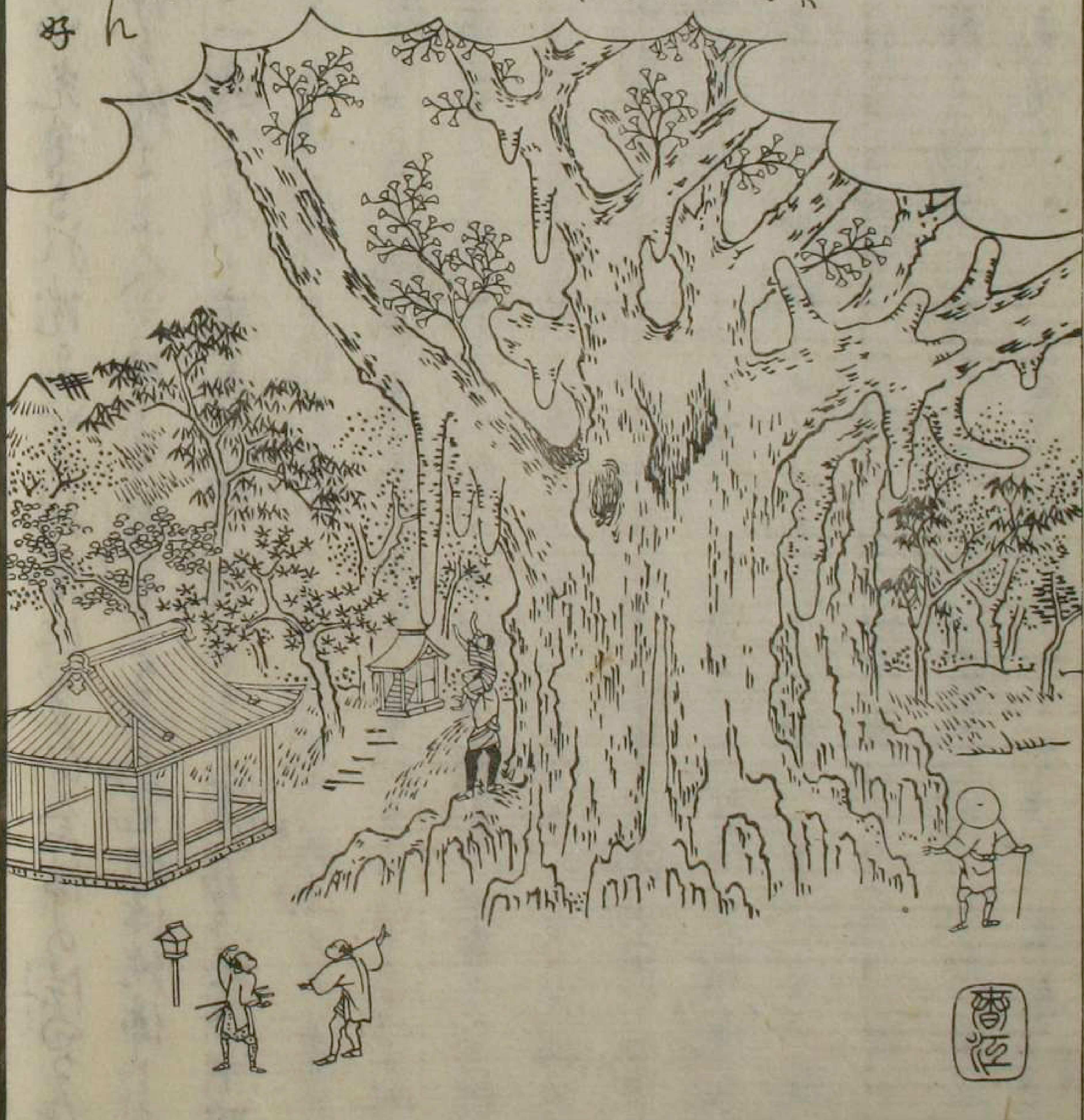
とかくしともに當ちれりまで昔ハ七十二の僧寮及び尊氏将軍の寄附ありし寺領も多く繁栄の古梵刹なりしが秀吉公の時没取せられ且寛永十二年焼失の後廢頽に及べり　小瀬甫菴が太閤記に云　後陽成院の御宇に當つて太政大臣豊臣の秀吉公といふ人あり微なりより起り古今に秀てまさに離倫絶類の大器なり（中略）八歳の比同國光明寺にありけるに沙門の作法に疎く世俗の所作にはさと智世に唯しかりき勇道の物語をば好きたまひて出家ハ乞丐の徒となりさがるものぞとおぼし万我意に振まひ僧どもにいとはれざりけれバ桑のごとくいやしく此児の氣もちハ中々沙門にハなりがたし却て佛法のさはりとなるべしと尾張一変し文の方へぞ送りけるとぞ　濃尾に云萱津の里の光明寺ハ昔西山宗の僧住せりき他阿一遍上人回国の次に甚目寺にて六時礼讃を修せしより光明寺なる號をいふ　住持にあひ念佛の法問ありしかど聞えける終に上人に帰して時宗となり梵阿弥陀佛と号す即一遍上人を中興の祖と仰ぎ今に至りて三十四世なりとぞ　三待明神の祠の傍にそのかみ古き板木あり豊臣秀吉公おさなかりし時當寺に入て手習しおはしけるがいとまある時はかの板木の下に村童と遊戯しおはしたり壮年に至りて程昔のなつかしさを思ひ出自ら木下と名のりたまひしと當僧の口碑に傳へ侍りし　又天文の初光明寺派下に福阿弥といへる僧あり眼疾を療しけるに妙を得たり　後奈良院にて御疾ある時召されて療しまひけるが御快くなりせたまひけれバ時に召されけるに後ありて官女をたまひけれバ携へて国に帰り還俗して愛知郡中村に居を移し弥助と称せしが彼官女の生る子即秀吉公也故に光明寺へまいらし手習をなさしめしとぞ　○本尊（阿弥陀如来）

下萱津
大銀杏

俗に此杖銀杏といへるハそのかミ一遍上人当国行脚の時携へられし杖を此地にさしおかるゝにやがて芽をふき根を生じて今かゝる大木となりしとぞ上人の口碑とも伝へはべる

しね

かしこくも
芽さす杖ハ
世の人に
教へそのまゝの
ちかひなるらん
玉好



寺寶　青磁大花瓶一對（世に天神の手と称す）　鎮守天満宮社（縁起に云当社画像の飛梅天神ハ往古春日井郡飯田村松林の内にまし／＼けるが飯田萱津両村の民人霊夢を蒙り正和二年当寺境内へ遷し奉るを寛永十二年九月当寺焼失せし時当社も焼亡せしが不思議なる哉神影ハ庭前の松樹にかゝりて御恙なかりければ是を松と今に天神松といへども御身ハ貞享元年　国君の御再営なり）

五輪二基（一基ハ永享八年十二月十三日千阿弥陀仏とあり　一基ハ同九年五月十二日久阿弥陀仏とあり）

熱田太神宮へ毎年十一月寅卯の祭事に当寺よりの献供左のごとし　一香物三十二籠　一黒豆三升　一白米二升　一御箸八膳長一尺五寸　一棒四本（大和竹にて製す長六尺）　一大根一把　一御酒料百文　右献に掛とつけ献じ七日の夜明に奉納す　右当寺より貢献の香の物ハ正法寺よりの貢献とハ別にして此当寺の末寺林光院是を掌りて毎年製造す故に林光院を香物庵と申す　又同上に香の物畑とあるハ此当寺の除地なりしかも今もかく当寺より貢献すれバ法世いつとなく本末ならしめや更に考ふべし

久長山實成寺（同村にあり日蓮宗京都本圀寺末）　日蓮上人の弟子日妙の開基にて当国四ヶ寺の一也明應年中織田大和守敏定再興して後福満正則ち寺と寄附ありしより今に然りす○寺宝　日蓮上人真筆の大曼陀羅一幅　日親上人の大曼陀羅一幅　唐画十六羅漢十六幅

塔頭　圓行房　龍泉院　正善坊

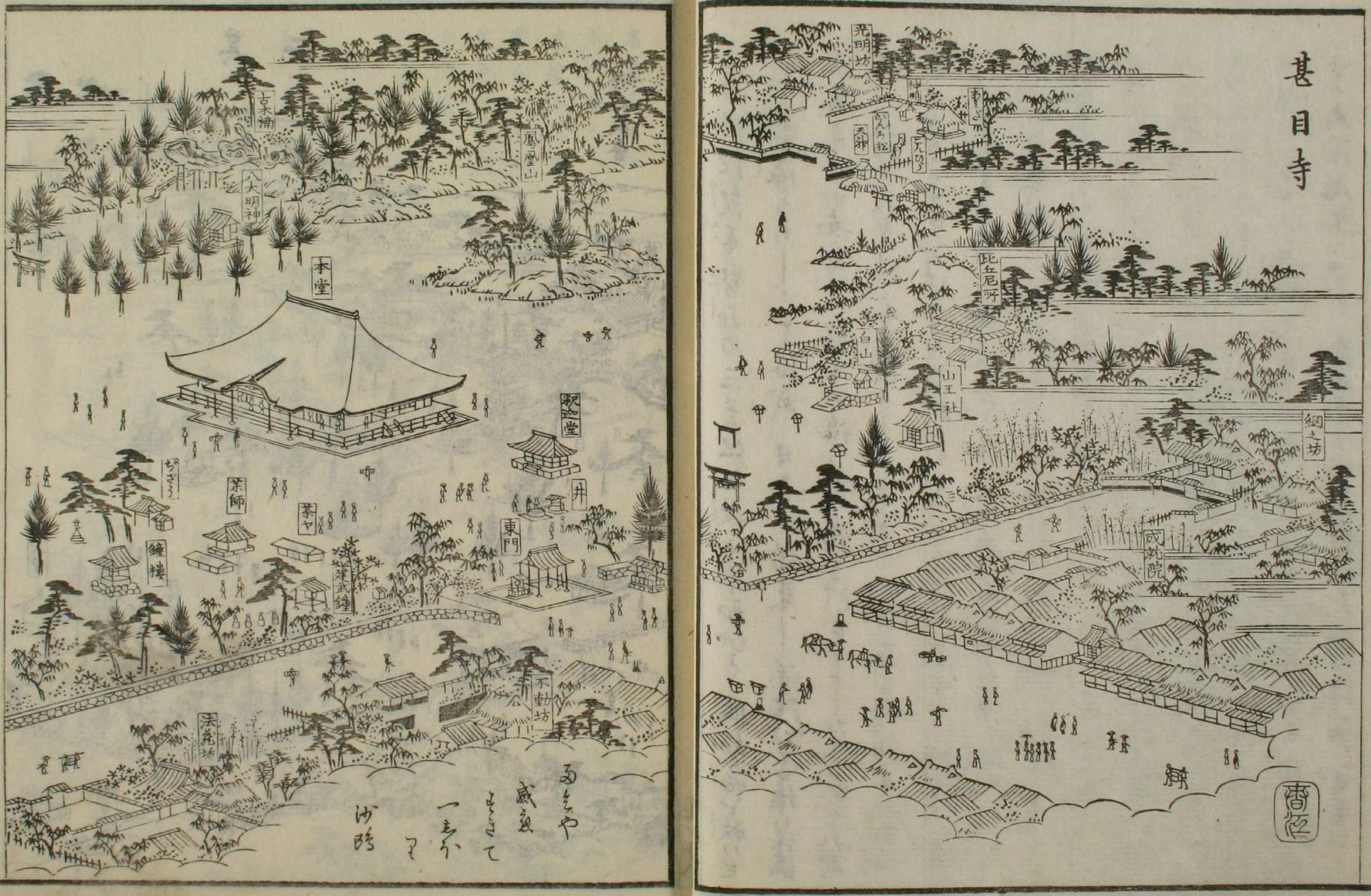
萱津古戦場（同村にあり岩倉の城主織田兵五郎信友主君武衛義統を弑し清須の城を奪ひけり移行せしかバ信長公彦五郎と謀伐せんとし軍）

兵を催し先づ清洲の民屋に放火せしめて天文廿年八月十六日那古野を進発せし稲葉地川の辺まで寄ておゐひしかバ清洲よりも萱津村を寄て辰刻より申刻まで双方互ひに入り乱れ火花をちらして戦ひしが織田孫三郎信光の小姓赤瀬清六真先かけて討死せしにつゞひて下方九左衛門中條小一郎柴田権六一陣に寄ておゐて清須方の坂井甚助を討取りまた坂井大膳の黒部源助老村与一左衛門赤林孫七郎其余源助か歴々の勇士五十余騎或ハ討れ或ハ擒められ清須勢大に敗北せしかバ信長公悦びかちどきをあげて御帰陣ありしよし信長記に見えたる古戦場也

鳳凰山甚目寺

（甚目寺村にあり真言宗　府下大須真福寺末）

寺伝に云当寺ハ甚目龍麿の創建にして龍麿常に漁猟を業とせしが一日網を携へ海浜に出んとし漂へる入江に網をおろしけるにたちまち網の裏に物あるを見とめれバ力をおとし網をあけしに金仏の一躰をえたり見るに聖観音の霊像なれバ且驚き且悦び合掌礼拝し自ら己が罪業を後悔し不業を捨て道心を発し江の側に一宇を造立し彼霊像を安置し吉貴四年丁巳（推古天皇の六年也）其姓氏を以て寺号とせし往昔釈尊出世の時南天竺毘舎離国の月蓋長者の息女如是女五種の悪病をうれへたる時釈尊より弥陀観音勢至の三尊仏を授ケ玉ひ彼劫病を救ハせ玉ひし霊像なりしが後に日本に伝来し弥陀の尊像ハ信濃の善光寺に安置し観音の像ハ即当寺の本尊となりたまふ或時　天智天皇御不豫にましましけるが　帝当寺の観音霊験あらたなるを聞召れ祈りありけるに御悩忽ち御平癒ありせられしかバ　勅使左小弁兼盛をして八葉の宝蓮（今に伝す）と仏殿に懸け賜ひ　勅額をも下し賜ひぬ白鳳八年己卯又勅宣ありて堂舎を建立し鳳凰山の勅額を下し賜ふ仁寿三年癸酉更に一宇を造営して龍麿の像を安置（後回禄せり）す康和五年癸未散位藤原連長僧智能共に私力を尽し再営す寺僧及び下司大江重房等も亦合力して堂舎修復古せり天治元年甲辰二月朔日の地震に又堂宇破毀す大治元年丙午春当座下司散位大江為通及び其子部長



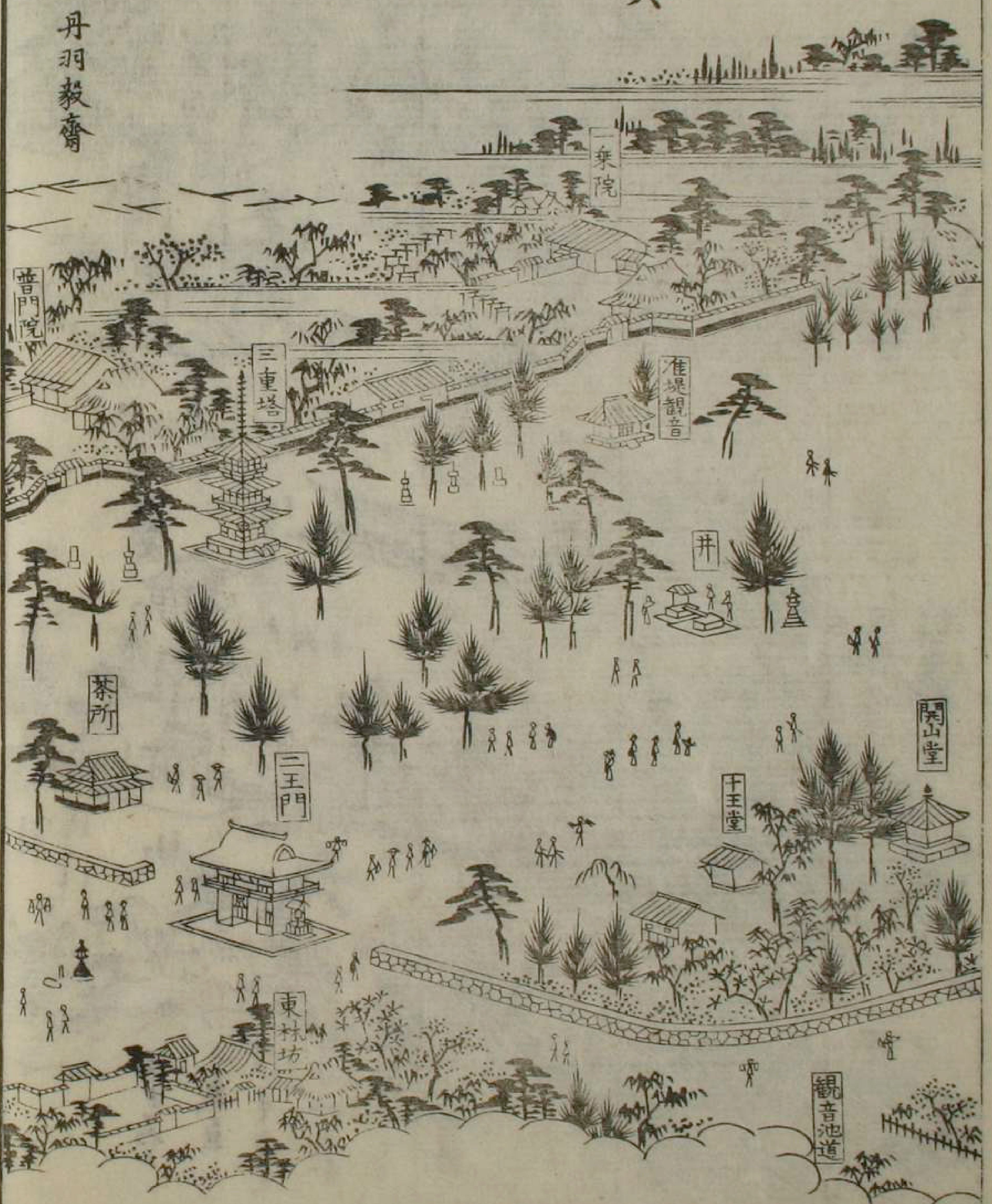
甚目寺

ゐとや
感夏
まきて
一まい
了
沙鴎

古木楠
鳳凰山
八大明神
本堂
釈迦堂
井
東門
茶ヤ
薬師
ちざう
鐘楼
建武鐘
不動坊
法蔵坊
光明坊
神明
かんゐ松
天神
えびす
比丘尼所
白山
山王社
網之坊
成就院
香江

其二

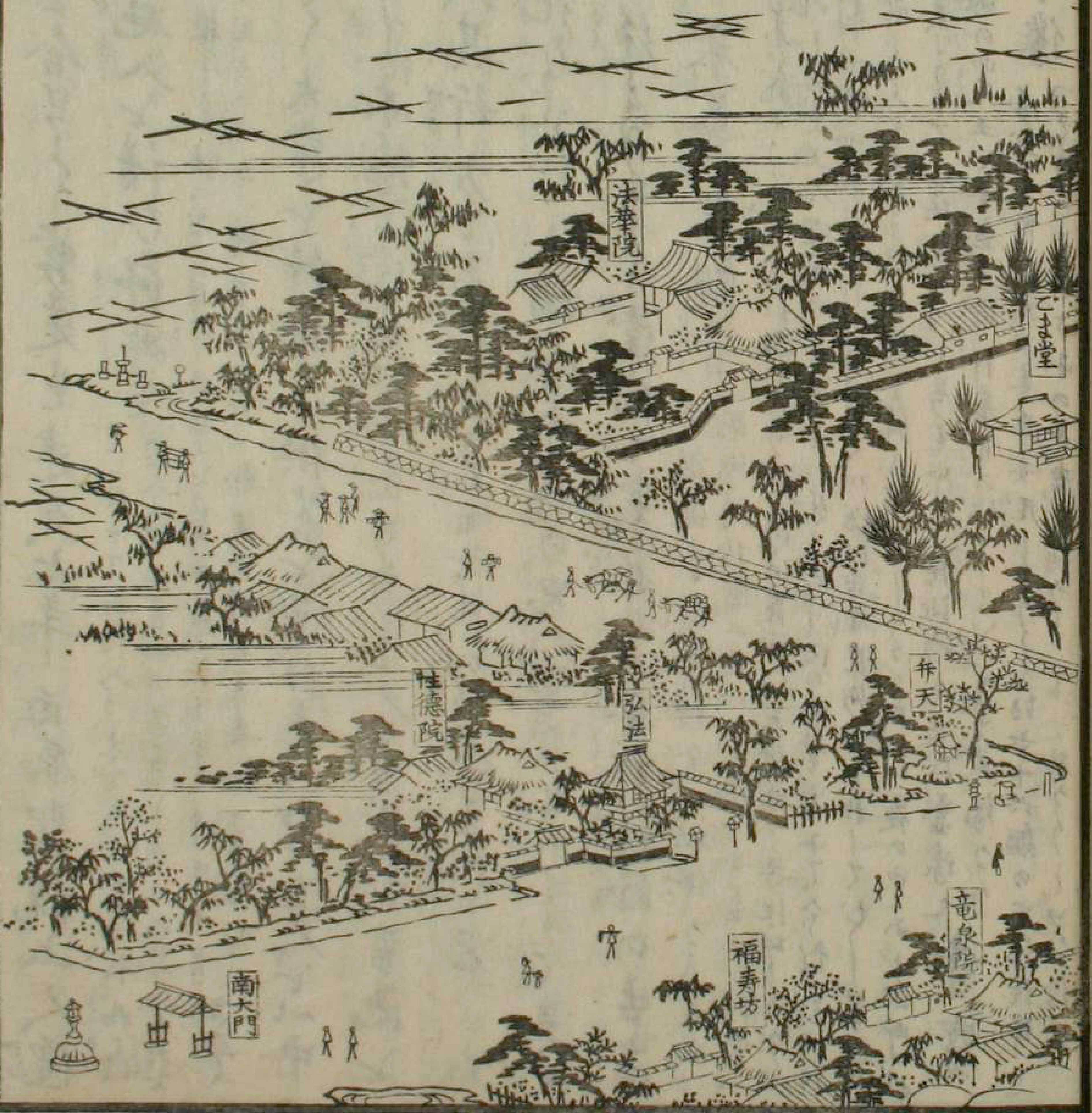
丹羽教齋


一乗院
普門院
三重塔
准堤観音
井
茶所
開山堂
三王門
十王堂
東林坊
観音池道

名藍高出鳳
凰山香火人
来境不聞靈
像自知沈海
苦更将慈綱
向塵寰

士朗

（枇杷園句集後編）
あわれや
一月もわとり
峯の君


法華院
ごま堂
弁天
性徳院
弘法
竜泉院
福寿坊
南大門

の女又力を合せて營建を建久七年丙辰聖観上人檀越に勧め施入を請ひ經始を（二月十日山に入り木を伐る是を釿始といふ同八年四月四日石基を築く五月八日柱を立七月十一日上棟す正治二年庚申堂宇を葺き建仁元年辛酉十一月三日落成し同十八日午時堂供養 勅使大膳大夫安倍資元之）さて上人一力にて大宇を修造し供養を遂けれバ即上人とハ中興の開祖とし本像を堂内に安置せり上人曾て観音地を巡礼して後其行方をしらず又来日とも知る人なければ恐くハ観音の權化ならんかと諸人奇異の思ひをなせりとぞ夫よりして法燈絶る事なく堂塔も巍然たる無垢清浄の古名刹なり○本尊聖観音（三國傳来閻浮檀金の秘佛なり左右に毘沙門持國二天の尊像を安置す往昔一遍上人當寺へ來詣ありて踊念仏執行ありし時此毘沙門天緒信し共に踊りたまふ所に躍り毘沙門と称し上人廻國の序當所に来りし時ハ必當寺にて念仏修行なされり是當年の修法なりし又持國天ハ俗に田植毘沙門と称してむかし萱津の里に千木下長者といふ者ありし此尊像を深く信仰しけるが或時一夜の中に十余町の田を植たりしかバ夫よりして田植毘沙門と號をかり毘沙門と共に靈像也又堂内に一木巨像の四天王を安置す即行基菩薩の作にしていづれも靈像なり）

寺寶

阿弥陀の木像（曽我十郎祐成が妻虎女尼となりて六十六軀の阿弥陀佛とつくり六十六ヶ國の寺院に納めし其一軀なりといひ傳ふ）

八葉宝鏡一面（天智天皇御寄附）宝劔一振（同）紺紙金泥法華経一部（同）

弘法大師真影一幅（真如法親王筆）涅槃像一幅（兆殿司筆にして萱津の千木下長者が母尼と成て當寺に寄附せんとて己が姿を書入たる図にて五十二類の中に此老尼を添へたるハいと珍らし）甚目寺縁起一巻（文永元年の写なり）

當寺古圖一幅（比丘尼所に蔵す）寺産證状（織田信雄公豊臣秀吉公の朱章及び國祖君御寄附の證状まで數多あり）

鰐口（本堂東の方に掲ぐ銘に尾州甚目寺御宝前鳴願雅則追善也聖泉圓大檀那飯野左近蔵人定道明應八己未年八月吉日大工藤原宗次とあり又同本堂の西の方に掲ぐ銘に奉寄進尾張國甚目寺観音大工西金屋刑部大夫文明十一年七月十八日願主妙椿道榮とあり又本堂修天井に下津正眼寺三世天先和尚の筆にて天神の二字を大書せし是火伏也といひ傳ふ）

堀川夜討の繪馬（本堂に掲ぐ奉掛繪馬長尾三位法印吉房公御願所施主湯本甚左衛門藤次敬白文禄貳季癸巳正月吉祥日右筆田邊圖書宗次とあり塗尻に法部れ中の庄に志る人ありて七月廿日此修造すれバ甚目ちに拙ひし古より掛ける古絵なるよし筆も元和の比なる事し長尾法印吉房海部といふハ前関白秀次公の先考一位法印之いかにしてきまんやしぬ名ハ知でんことも法次のふ人もうさき世にしらんえより）

角力の圖（慶長廿年同十一年に二枚あり）橋辨慶の圖（同十年）鬼の首引の圖（同十一年）馬の圖（元和六年已上いづれも古画の大絵馬にして頗る古色あり此外にも數多あれども畧す）

釋迦堂（堂内に聖僧の木像を安置す白き帽子を被りける由を諸人女神と心得白粉をほどこしすなはちそて尼僧に化へバ白粉をぬりふ俗におしろいさまといふ此外樂提堂薬師堂十王堂地蔵堂阿弥陀堂開山堂護摩堂等の數字いづれも皆境内にあり）

三重塔（本尊大日如來弘法大師の作擬宝珠銘に尾州甚目寺三重

塔寛永四年丁卯九月吉辰施主名護野両替町吉田半十郎政次となり

鐘楼 鐘銘に云 江州西念寺鐘 晨鐘響遠振十方界夕梵聲廣度三有際三宝久住四海倶利天下泰平海内安全建武二年三月廿日大工藤原国安大檀那道誉住持比丘澄俊 濃州大野郡揖斐庄南方保今坂之御社御宝前鐘 天下泰平故也 文明三年辛卯閏八月日 願主（善通 徳宝）御代官左衛門尉橋永久とあり 按ずるに此鐘は佐々木佐渡判官入道道誉寄附して西念寺に懸しを文明三年美濃にうつして今坂の社の鐘とせしが後又信長公岐阜にうつりの時此甚目寺の大鐘として城下鼓時の用とし其の代りに小き鐘を賜ひしとなり甚目寺の鐘も古鐘ありしが今に陣井昔日な楼ある にありしを

鐘楼 因所にあり 宝暦年中より仮の鐘を懸てありしが近年大鐘を新たに鋳て懸かへしとなり

二王門 本堂の南にあり建久七年再建のまゝにて今も猶存す 棟札に梶原景時奉行とありしといひ伝へなり

東門 門前南側に立場茶店数多あり

鎮守 八大明神 山王権現の二社並に白山社 天満宮社 金毘羅社 小牧祠あり 大師堂弁財天社は二王門の外にあり

観音池 寺の東南の畑中に江上と云所にありてうける池即ち是へ飲ますの上つまおふ雨乞今もせりと正月三日には一山の衆徒集りて本堂の後なる鳳凰山と巡り行列して此池を出て大般若を轉読す

塔頭 法華院 東林坊 竜泉院 成就院 性徳院 光明坊 普門院 宝蔵坊 不動坊 福寿坊 一条院（以上十一）（天台宗也）

網之衆三家 甚目龍麿の裔にして妻帯の僧徒也 按に甚目連は尾張海部郡に住ける漁人なれど氏姓にて三代実録に貞観六年八月八日壬戌尾張国海部郡人治部少録従六位上甚目連公宗氏尾張醫師従六位上甚目連公冬雄等同族十六人に賜姓高尾張宿祢天火明命之後也としるせり 今それ印行本に甚目連と其日連とあやまれり

比丘尼所 釈迦堂とある 智養といへる尼僧の開基にて創建年記詳ならず 塩尻に云 福島正則清洲より国の内せ弱沢井村の先方れ士にられと告げ且日我微賤少年の時工匠のために飢饉とそこびし毎度甚目寺の釈迦堂の老尼が許に休らひしに老尼厚く待して食を与へ茶を飲しむ我今こゝろざしをとげまたば食糧を施して其恩を報もと我伝物をらば老尼伴ひおきみん郷に頗く老尼とかへり見れば我も是なりしもあらに諸家も諾せりこゝより毎年彼地に米を賜はりしと沢井桐村老人まに語り侍し正則ありけるき武士なりしが彼れ昔をわすれず人の恩を報じ微賤の時を恥ずして法家に語り遺れる事あるらしはなに奇特といふべし

蕭寺倚二墟落一蔓草遍二空庭一不レ見来儀瑞修竹繞二聰欞一
山門皆痕紫碧殿燈火青接輿有二餘歎一吾道付二林坰一

松平君山

搖落高樓返照斜雙林寂寞接二煙霞一寺前画馬嘶二秋
草一細裏白毫歴二年華一流水門空傳二法界一長虹橋掛望二
琵琶一登臨賦得塵途外極レ目諸天有レ雨レ花

屈方致

中原紫氣繞二香臺一萬里蒼茫法象開憑レ檻長江秋色
動捲レ簾遥嶺白雲来華鯨聲響老僧下鳴鳳影飛羽
客迴猶自豪遊心地浄風流多レ暇興悠哉

賀利重

金城西去向二紺園一露浄風香桂樹繁北岳秋高連二積
雪一南天雲盡接二平原一千年古佛掩レ扉寂幾處遊人繞二
寺一喧出入路塵曾不レ隔馬蹄鳥迹大悲門

谷直矩

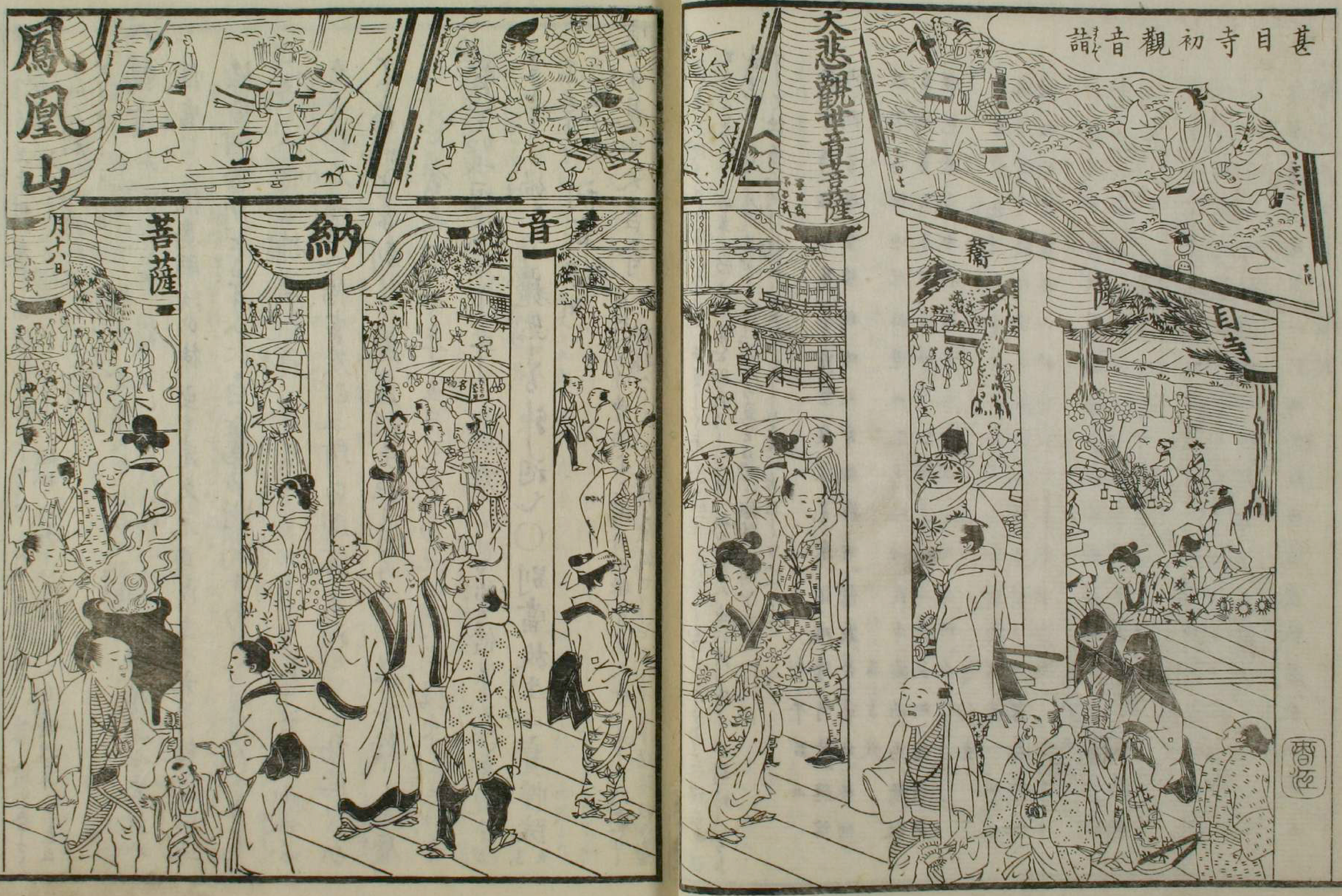
大悲高閣欝崔嵬遥望二東門一大路開顕レ展鳳山翠微
近攀レ梯雁墻白雲迴中天風雨過レ欄去下界水煙入レ
座来方丈梵歌心地浄登臨詞客幾銜レ杯

田孝治

煙霞深鎖鳳凰山碧樹陰森僧院閑晩磬秋風天外
響曼花揺落五雲間

八美部

甚目寺初観音詣（まうで）


大悲観世音菩薩
鳳凰山
月十八日
菩薩
納
音
目寺

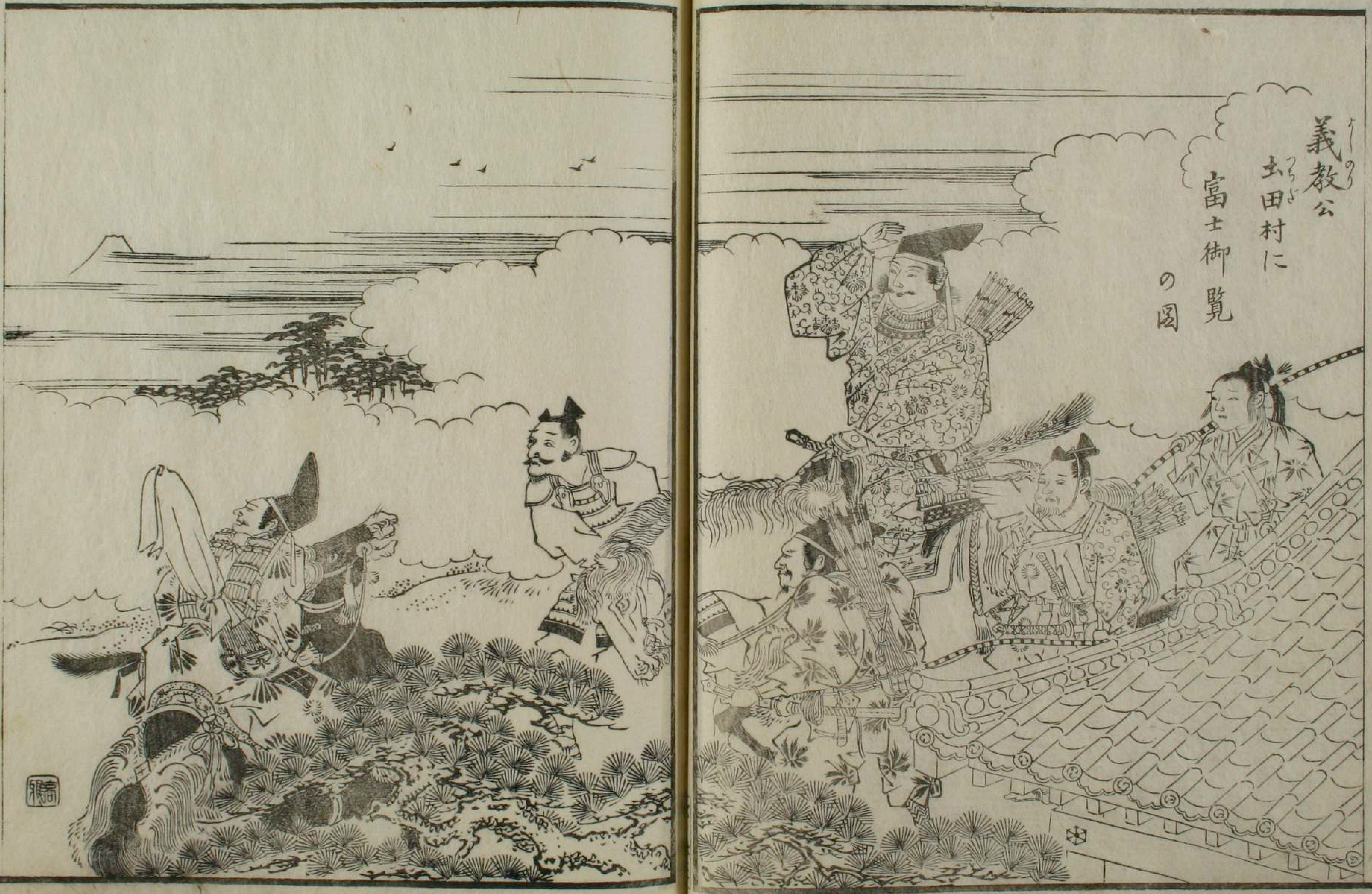
上条瓜 上条村に産す当国の名産にして今も毎歳 國君より 幕府に奉る 至てその風味すぐれて他邦の産ハ更に及ぶ事なし 貴賤共に上条瓜とよび甜瓜 河越瓜 細瓜等の上に列せしめても最上品なるものとすべし

八幡宮（太田村にあり祭神 應神天皇 左右に玉依姫 神功皇后を配し奉る 世に太田の八幡と称す） 社傳に云当社八幡宮ハ 後鳥羽院の御宇建久元庚戌年九月頼朝公上洛の時当所を過ぎ給ふに白鷹の樹間にあるを見給ひて是全く八幡宮擁護の祥瑞なりとてのち是を純に就きて山城国久世郡石清水八幡宮及び三所の別宮末社にも勧請しおはして当社を草創し厳粛の大社なりしが年を経て荒廃せしを慶長四己亥年五月三日当社の別当法印聖盛再営を加へ同十一丙午年 國君よりも重修し給ひ制札などを下し給ひて巍然たる神祠となる○別当放生山寶幢院と云（真言宗 長峯村万徳寺末） 祠官 廣瀬氏

富士見山大吉寺（同村にあり曹洞宗三関村正眼寺末久寿二年の創建なりし 巨刹なりしが中ごろ廃絶せしを天正十年僧傳悦再興すと 或ハ傳悦を以中興の開山とも傳ふ云 永享四年九月足利将軍義教公富士御覧の時当寺に憩ひ給ひしに此寺より彼山を望見ありしより則当寺の山号を今のごとく号けられしとぞ寄附ありし由其宝及び院状にも多くありしが天文十五年三月焼失の時尽く灰燼せりとぞ 國君より寺産を賜ひて今に連綿たり） **本尊**（大日如来 春日の作）

剣留山東勝寺（廻間村にあり曹洞宗三関村正眼寺末往昔の堂宇衰廃せしを天正十八年直首座中興して舊觀に復す むかし新羅國の妖僧道行熱田の神宮に忍び入り草薙のみつるぎを盗み去て此所まで来りしに当所の辺にて薬師如来現じてとゞめ給ひしにより神剣ハ手を離れて験座ありければ山号もかく名づけしとぞ 按るに本朝が神及和歌百首が小野及び此剣をにげがり彼宮に奉納日久しからべき便宜とのこく御殿を破り堂に盗をとらんげ行よなり八宮中を一夜のかどめぐるごとくに夜のあけたれば空けずして剣を返し捧げてにげぬるによりとけんかんちやういふ又ハ剣返しとも云ふとぞ） **本尊**（薬師如来坐像 太子の御作）

青林山延命寺（坂牧村にあり曹洞宗熱田法持寺末なり 当寺ハ玄宗にして創建の年記詳ならずといへども往昔清林寺といひて十二坊ありし大伽藍なり） 類聚国史に貞観十四年三月廿八日戊戌尾張国海部郡清林寺列之定額とみえし古刹なりしが物換り星移りて十一坊ハ廃絶し僅に此延命ものこり存せるを天正乙巳の年法持寺第四世仙英和尚中興し清林の寺号を青林の字に改め終に当院の山号とし今の宗に改めしよし傳にみえたり 当寺久寿年中源三位頼政東下の日当寺に来りて病に罹り寮舎に在りしに清林寺の本尊薬師仏に祈誓し一夜に廻復を遂げければ報謝のため坂牧本郷の二邑を寄附ありしがその本堂ハ破壊して薬師仏のみ僅に残りしを当院の方丈の小堂に安置しけるが霊應殊著く諸人の崇敬大なるが故に延命仏と称して今当院よりこれを供養し又東の方に天満宮山王権現の二社ありて同じく当院よりこれを守る **本尊**（延命地蔵尊 本仏の座像にして 惟康親王の御作 日本三躰の一なり）



義教（よしのり）公 土田（つちだ）村に富士御覧の図

方領大根（はうれうだいこん） 方領村に產す。宮重大根に比すれバ品格やゝ劣るといへども、こと大なるものハ一本の目方三貫目ばかりなるも有り。他國に運送すること夥し。まことに世人其の大なるものをとりて宮重の產とおもへるハひがことなり。寛永に刻せる毛吹草の名物の條に大根門出尾張大根ハ八幡牛房などゝ見えたる尾張大根ハ則此方領の產にして世に名ある事知るべし。又松平君山翁の種蘿蔔說にも尾張蘿蔔冠天下其大者數斤色如珂雪味甘如飴四方之人爭而買之以充方物焉などゝあるも全く此方領の產とのみいへど、宮重の產ハ必宮重の文字の黒印を押たり。形少し細きものなり。黒印のなき大なるものハこの方領村の產とおもふべし。今も稱別して呼ぶ他境の人にしらしめん

石作村（いしつくり） 和名抄に中嶋郡石作（以之久利）とある地名なり。今ハ此村中嶋郡にあらずして却て南郡にあり。村名の所まるハ全く中嶋郡に近き村なれバ後世此南郡に屬せしとおもはるゝを係のうせたるなるべし

石作神社 石作村にあり。延喜神名式に石作神社。本國帳に從三位石作天神。同集說云。按海東郡松葉庄石作村天神社疑此祠乎。姓氏錄云。石作連火明命六世孫建眞利根命之後也云々。是尾張氏同祖神也とあり

中杜天神社（なかのもりの） 森村にあり。本國帳に從三位中杜天神といふ是なり

中森 同村にあり。上の森ハ中嶋郡にありて今ハ森上村と唱ふ。中の森ハ此にて、下の森ハ南郡の伊麦（ひぎ）村の所にある森則是なり。むかし國衙より熱田の社へ參詣せしときの森はじめなりと傳へしといへり

家集

尾張の國まかりける道中の森といへる所にて 赤染衛門

玉まつる熱田の宮へ參るとて 道にはてなきものとしは
すぎハ中の森とよんまうすとふに

ひろく中の森の說紛くとして定かならず。按に既に熱田の森下にも是を論ぜしかども一定しがたければ志ばらく舊考に從ひす

新屋村（にひや） 今新居家と書す。日本書紀宣化紀に蘇我大臣稻目宿祢宜遣尾張連運尾張國屯倉之穀。物部大連麁鹿火宜遣新家連運新家屯倉之穀とみえたる新家みやけハ此村にありし也。又和名抄に海部郡新屋とかき、民部省圖帳の殘缺に海部郡新屋郷公穀一千伍佰八十三束假粟六百二十五丸貢海料驛馬以半税充國庸ともあるもこの地なり

新屋天神社 同村にあり。本國帳に從三位新屋天神とあり。同集說に按舊事紀物部印葉（いんば）連公五男物部竺志連公新屋連等祖云々。祭神天穗日命

藥王山法性寺 同村にあり。もと云宗寺村万德寺といふ。孝德天皇の大化年中此里に一人の信士あり。藥師如來の病痛惡除のちかひの偈を常に信じ平生志ざしく、藥師如來の尊像を彫刻せんとねがひきと雖も、ひとりの老翁來りて尊像を彫刻せんといふ。信士これをよろこびて藥師の尊号を唱へ、信士其心の我にひとしきを感じつゝ、さて年比の志を語るに、翁の言やう、幸なるかな我ハ是佛工也。いまだ誰が彫刻をもなし得ず。主人の心ざしに感じて、たすけて宿願の誓果にさせん。されバ主人大に悦びさらバ國志を遂させよといふに、翁のいふやう、我に一室をかし給へ。一七日に刻みて參らせん。功なるまでハ來りて見るべからずとて、かくして廿八の暁主人に約せし如く成就せしに、翁ハ我ハ是藥王井也。汝が淨信を感じてこれをあたへしと、かき消して見えず。主人且驚き且悅びて信心を增し、遂に一宇の精舍を營して尊像を安置し有信の人々も結緣とならしめ法人を行ひしとかや。此所を靈應ある着けれバ天智天皇の御宇に至りて右八勅願所として玉ひ伽藍堂塔を建つらね、僧坊多くつらなり、衆大年を經て後多福院の所に南方の住僧運營として再び日光月光及び十二神將二天の像をも彫刻せしめられ、巨刹となりしが、あるひハ寬延寺跡も大方ハ廢絶せしが、尊像及び神將二天の靈像ハ今も此殘せり

本尊 藥師如來

寺寶 如意輪觀音（にょいりん） 小野小町持念仏

藥師如

来画像（宅磨筆）豊國大明神の神号（秀頼公八歳の筆にあそばし あれどもこれを畧す）

小町塚（同村にあり）寛永八年二月齢ひ八旬ばかりの老僧此里に来り茅菴をむすびて其家に入て小町が坐臥をくりかへしや問ひ尋ねバ其所を教さしけるに邑の地ハ赤林なる住なりし残をし彼僧を請じ小町の由来を語りければ彼僧の云く其はむかしむかし小しく三巻の書を記し一生の事実を語りきかせ且両年ハ小町が八百八十年忌に当り小町が終身持し如意輪観音ハ縁塚の中に有べし出現あらバ前生の結縁小町が菩提ともなるべしと語りければ与及び法性寺の住僧性範も小九郎左衛門が家に象図せさせ彼塚を堀りなりとして洞縁の観音を得たり法性寺に納めて今ハ什物とす異僧ハ其塲にて消ゆるがごとくうせけるとぞ（同村に安倍晴明塚あり是ハ晴明此地に来りし時農民田中に蝗虫の生ずるを患へけれバ則幻術をもて蝗害を除きけるとぞそれが為に塚を築きて弔ひしといひつたへたり按ずるに小町塚晴明塚共にきはめてさだかならねど里人の口碑とさまざまにいふのミ）

新居家川（同村にあり水源ハ中島郡桃源寺川にして魚鼈甚多く秋の比ハ遠近より投網の漁人を聚めし新居家橋ハ此川に架せる津島道の橋なり又此川に淵瀬ありていつの比にや兵乱の時賊徒銅鐘を掠奪し行けるが甚重くして持去がたく鐘を此川に沈めしままに淵となる所を小川堀と名づけしと土人の口碑に存せり甲斐名勝志に都留郡新屋村に鐘ヶ淵ありて天正の比武田北條合戦の時陣鐘を此淵に沈めしとあるを此所にいふいや村彼ハあらや村と唱へし文字も同じ新屋にして又同じ鐘ヶ淵のあるもいと珍らし彼唐土の松江ハ鱸魚の名所なるに我出雲の国の松江も彼魚を産して甚佳味の名物なりとおもひ合する奇遇といふべし）

髙宮社（二ツ寺村にあり 祭神大日孁貴尊）例祭八月十八日當社に古き棟札あり其文に云

右為當郷神社幷拝殿等奉作造立供養意趣者現世安全武運長久悪敵退散國家豊樂之善願如件

尾州海東郡二寺髙宮於御遷宮被成候者也山田助作御護持大施主安藝國之羽柴少将藤原正則慶長十五年庚戌九月五日大工清須勝左エ門修復横橋仁右エ門とありまた同村に風ノ宮社あり昔に正則の修復なり 祠官 氏

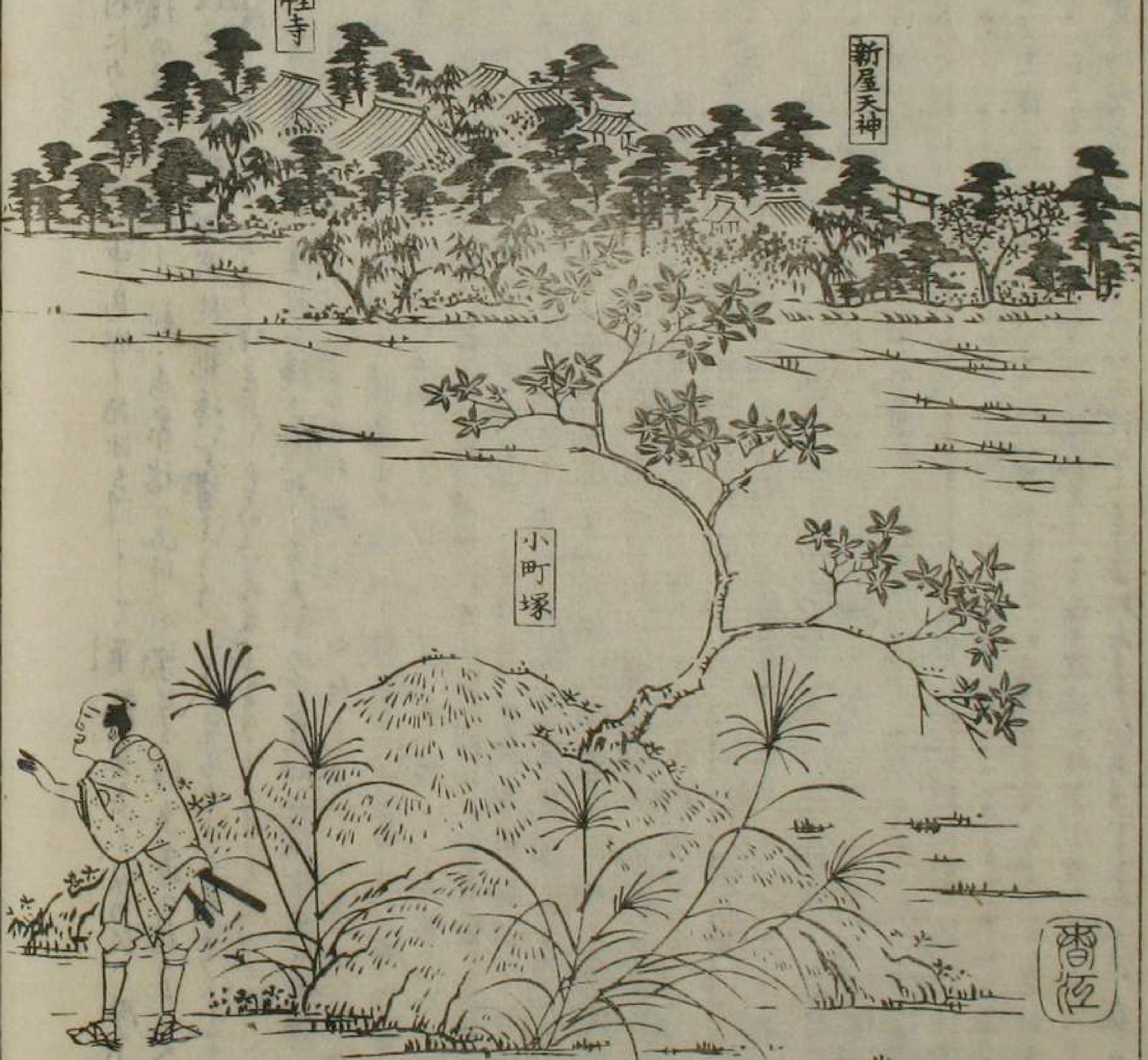
福嶋参議正則宅址 同村にあり正則幼名市松といふ當村の大工与左衛門が長男にして幼少の時人を殺し甚目寺に隠れゐたりしが新居家村の赤林氏と称して小田原へ落行き小濱左衛門の許にありしが秀吉公に縁あるゆゑ彼公勤仕のもとめ正則を召抱しかバ公に随従し天正十一年四月江州志津ヶ嶽の先登に功名を顕してより武名日に盛なり其功はげしく數へがたし同十月左衛門大夫に叙任し小牧の役にも戦功あり後當國清須の城に居住せり元和三年六月参議従三位に叙任し安藝備後両國にて四十九万八千石の太守となりしが故ありて至らずして元和五年六月二日所領を没収せられ越後信濃の内にて纔四万五千石を賜りしが寛永元年七月十三日六十四歳にて卒す實に希世の猛将にして勇烈比すべきものなしといへども慶長五年の役に東照宮へ味方せし其功に誇りてよろしからぬありしやその家名は

小町塚

九月なかれ日影
たとい小里なるは
行の西なわりて里
人のむしろ小せ
小町かとて田の中
小さゝやかなる塚の
あるゝに塚の木
の下の紅ぶしあ
く落るもの
れさるいとあ
ふんえけれハ

高門

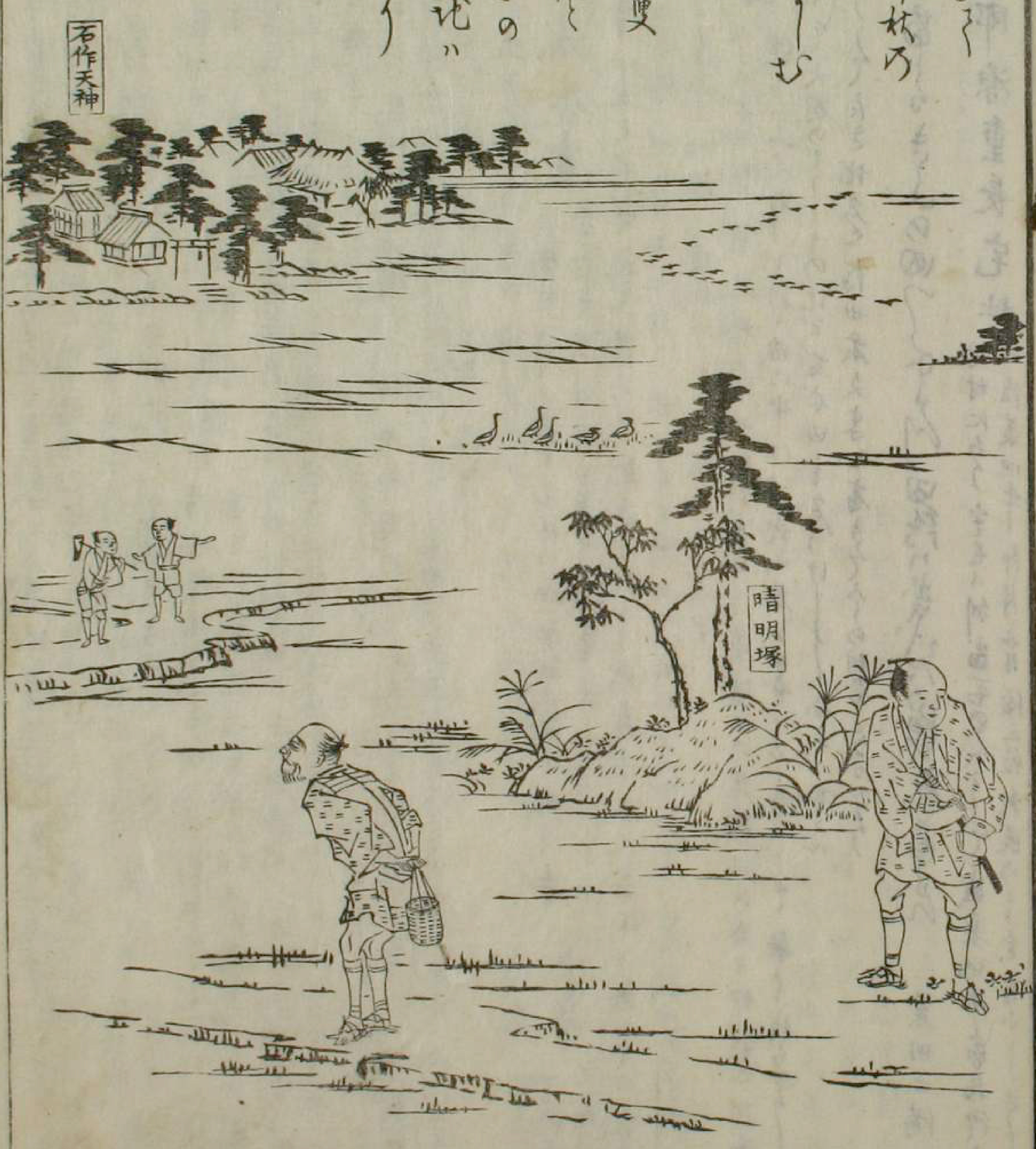
いにしへみ
みやひ
とゝえ
の


法性寺
新屋天神
小町塚

塚ふむゝ
ふけゆく秋の
風そ
身にしむ

雀叟

かくされと
すゝきの
末花ハ
おかなり



蹈絡せしハいとおそるべきに似たれど年比不仁の暴逆と天の罰しらるなるべし正則の弟掃部介正利及び正則の臣下福島丹波守等の勇士も皆此村の産なり

瑞祥山菊仙院（ずいしやう）同村にあり曹洞宗三ツ渕村正眼寺末文禄元壬辰年の創建にして明叟禅師の開基也 **本尊**（阿弥陀の木像）**寺宝** 不動明王ハ福島正則守本尊なり **正則位牌** 海福寺殿前三品相公月翁正印大居士と記す 当寺ハ正則清須在城の時菩提所なりし由 正則の没後其家臣大地平内といふものこれを納む又正則画像一幅ハ新居家村の地士赤林氏の蔵附裏書に正則の小伝を記す其文前に挙るに大同小異なれどこゝに畧す

花正村（はなまさき）神風抄に尾張國花正御厨御封戸三十七町とみえて頗る廣く伊勢大神宮の御封戸なりし旧村なり当郡の内花正花常花長などいへる郷名の称するハさして彼神宮へ供花を捧げしよりおこりたる名なるべし

瑞應山法藏寺 中嶋村にあり浄土宗西山流京都粟生光明寺永観堂禅林寺の両末也開基年月詳ならず **本尊**（地蔵菩薩 弘法作）にして昔弘法大師蜂須賀蓮花寺創建の折から地蔵菩薩女人泰庵の教をこふ請たまふ所の霊像也世に子安地蔵と称へなし蜂須賀村の東の方にありしを後世今の所よりうつせり其傍に松樹一株ありこれを然松とよべり

藤木田（ふぢきだ）今の木田村也 塵添壒嚢鈔（ぢんてんあいのう）に引用せし菅清公の尾州記に春日部郡ハ小川臨連といふ人ありきれが田の中に一夜に藤を生ぜしが奇として敢て伐らざりしまゝやがて大樹のごとしその地を藤木田と名づけしよし見えたるハこれよりて此地名を後世文字を省きて今の村名となれるなり

早苗とるきミの田つゞき小川 田鶴ハ幾代たつ藤の杖とやなるらん　粟田土満

木田三郎源重長宅址 同村にあり重長ハ則当国の人にして盛衰記平家物語等に治承四年卯月九日源三位頼政の高倉宮に申せし謀叛の源氏揃のうちに美濃尾張に木田三郎重長とありし尊卑分脈系図にも一族の人々の名をのせたりされバ此地の武士なり

貴船社 乙子村にあり祭神罔象女（みつはのめ）ノ神也天正年中長尾三位法印造立の棟札ありて社地頗る広大なり 古棟札に云 奉造立貴船大明神社頭者依為當関白様秀次公御氏神御父三位法印為御願御神躰併兒同金殿玉楼之社頭悉皆御造營成就畢仍撰嘉辰貴開眼供養法儀給誠如依信力甚深神德嚴重而守護御武運長久當其運還宮之導師者長沼萬德寺良秀法印于時三位法印之代奉行沼半三郎殿盛勝 于時天正廿年壬辰九月廿八日と見えたり

三位法印宅址 同村にあり 法印ハ長尾武蔵守吉房（よしふさ）といふ秀吉公の姉（あね）聟（むこ）秀次公の実父なりはじめ当村の人にて弥助といひしが登庸（とうよう）して武蔵守に任じ繁栄を極む又曰く信長公美濃の堂洞（どうほら）を責（せめ）玉ひし時藤吉郎はじめて騎馬にて随従（ずいじう）せしが乗馬なかりければ乙子村に来りて此弥助が飼置し雑役馬（ざうやくうま）をかりて鐙（あぶみ）片しなく沓（くつ）片しなく乗出し弥助を口取にしてゆきしといへるハ此人なり（尾張人物志畧に大なれど詳ならざれど当村に今も郷士屋敷（きうし）と称する地のありて当村に因（ちなみ）ある事を除けれバ志るしおく小牧にて参考に備ふ）

池鈴山（ちれい）**蓮華寺**（れんげ） 蜂須賀村にあり 縁起に云 弘仁九年弘法大師の

蓮華寺

十時梅厓

大道遺靈是大師
竺蘭萬劫此開基
自為塑像趣
庭闕別伏蜂王傳
口碑寶樹璨々憑
恠石芙蓉的々出
清池難因羈絆尋
名勝聊寫所聞寄
小詩

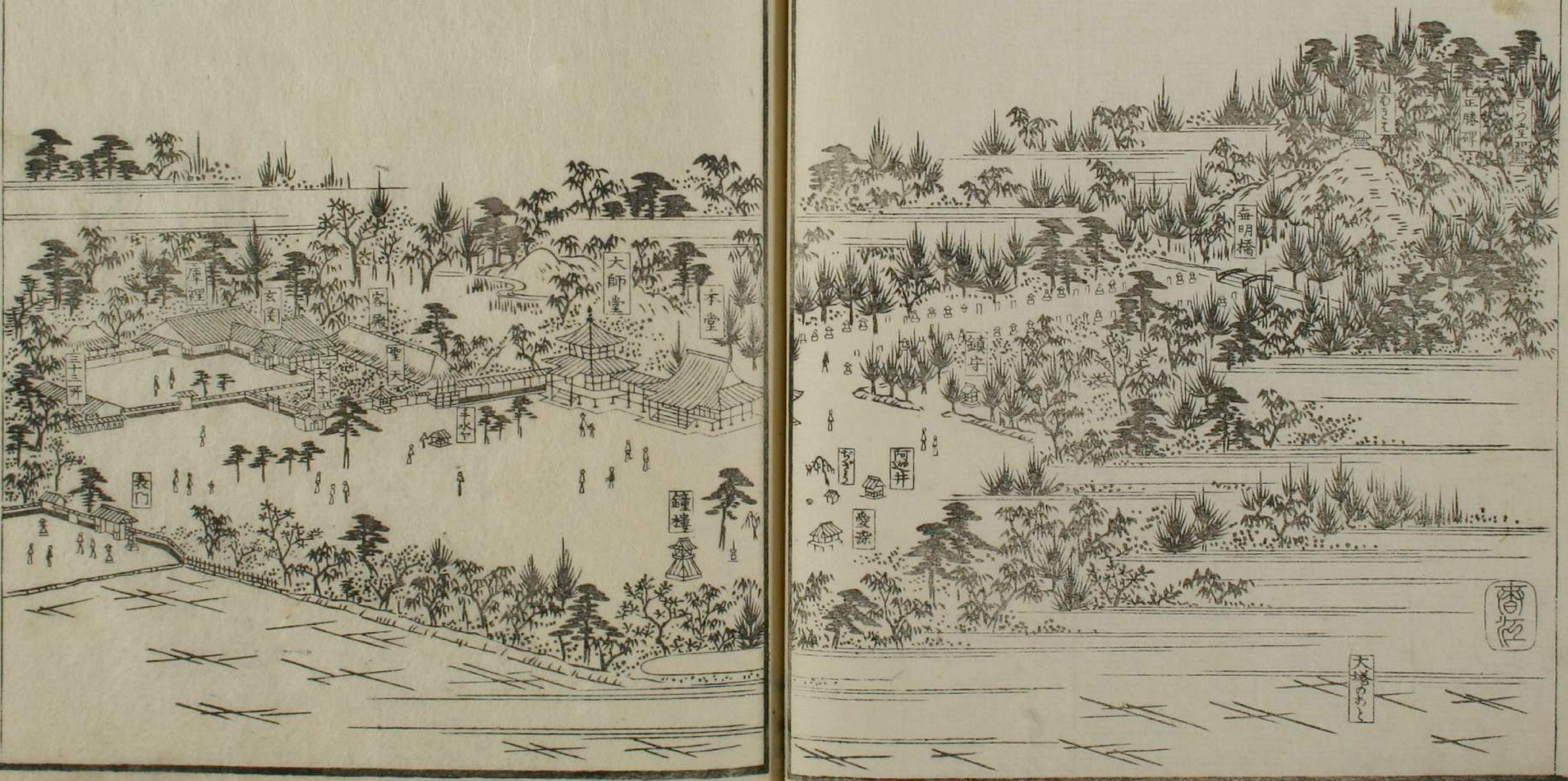
阿部松園

塚上玄蜂腹若壺
村人不敢涉郊墟
當時如少大師咒
何術驅斯毒螫除

寂清浄の蘭若ふ
のほり年防一勝清
冥よ入

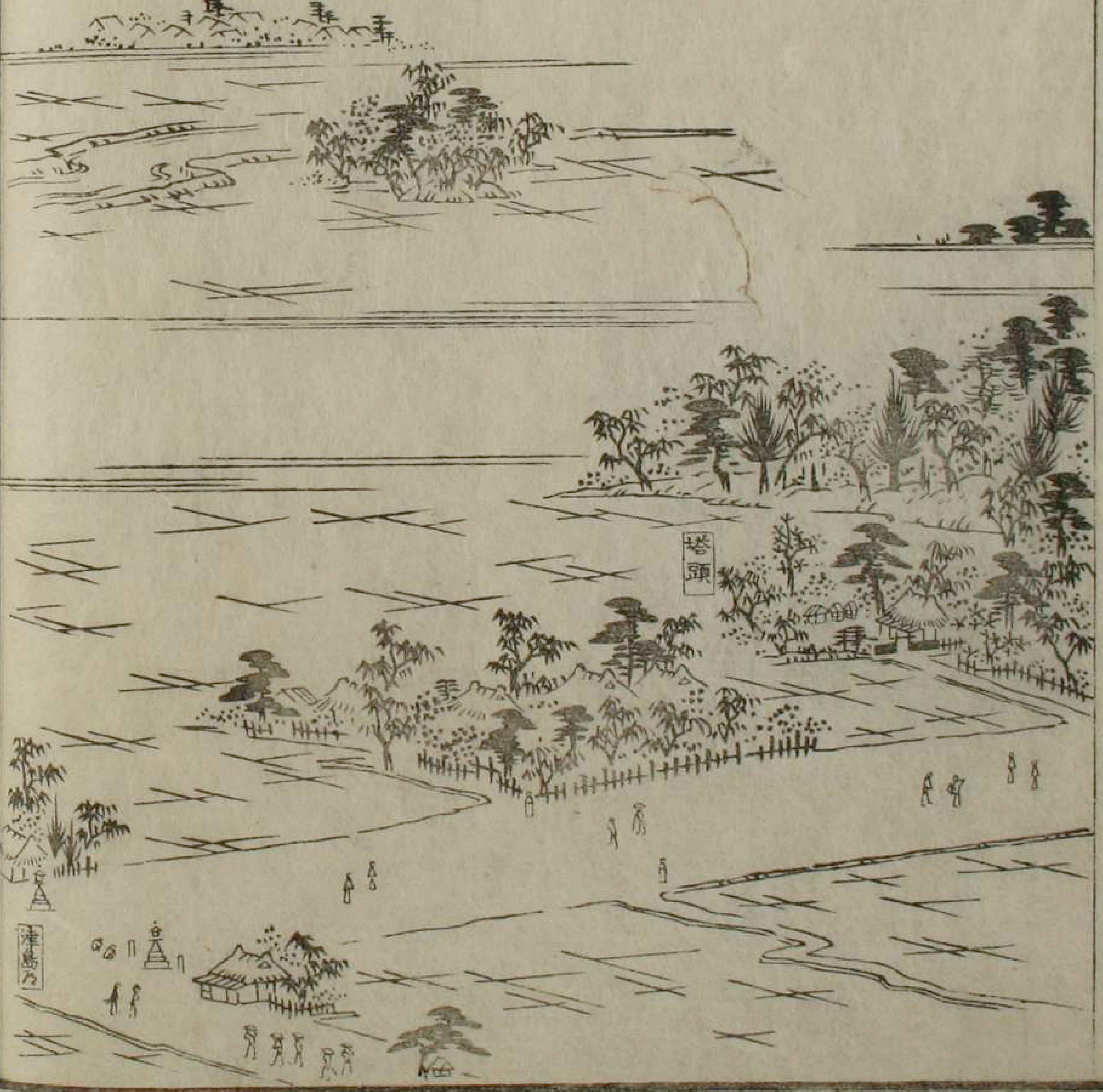
暁臺

萩しろく
浮世ふ遠し
秋の蟬


庫裡
玄関
客殿
大師堂
本堂
三十三所
太子
聖天
手水や
表門
鐘楼
八むさゝ
正勝碑
こつ堂
無明橋
鎮守
阿伽井
愛染
大塔のあと
香江

其二

足もとに
居すまひ
かえす
蛙かな
其峯



開基にして文永元年良敏上人中興せし真言宗無本寺の巨刹也（上人は山城国岩倉の良因上人の弟子なれば当寺を岩倉流と号す今は岩倉法脈断絶せし由来よりして無本寺とはなりぬ）△はじめ大師熱田大神宮へ参籠して千日の護摩を修せんと誓願ありし折ふし洛中疫癘流行し衆庶なやミを苦しみけるが禁裏にても嵯峨天皇聞しめしたまひ叡慮安からず大智識として除疫の祈祷なさしめんとて勅使右中弁藤原忠能を当山に下し宣旨をさづくと大師に告のへば勅命黙止がたく又千日の誓願も懈怠あるべからずとて一夜の内に因れ玉ともいふ自像を造りこれを大神宮にとゞめて自身は都に帰り参内ありて又護摩を修行ありしが頓て洛中洛外までも邪気消散しければ御感斜ならず大師の威徳上下に輝き法力四方に著るく仰がぬものもなかりけりかくて再び熱田に来り千日の行願を結ひけるが満ちの中をいはゞ

土縁の大師代々修法ありけれバ牙懇れ大師と稱しき
𦾔靈像と　埜田の奥の院に安置しけるに　大神大師ニ告
玉ふハ是より西北に靈場あり彼地へ此像を移さは衆生の結
縁廣大ならんと大師則西北を望むに五色の光明ありて光
を尓縋て尋ぬるに須賀の森也此邊昔より數多の毒蜂お
く諸人を惱し侍れバ大師加持力を以て彼毒蜂を符縛し
一隊の塚となし給ひしかバ毒蜂の人を螫ことも絶にけり
夫よりして此地を蜂塚とよびならいつしか訛りて蜂須賀
といひならハしぬ去るに其年道場開基の閼伽の
井を穿ちけるに井中より光を放ちて五鈷鈴を堀り出
せり又井中より湧出る清水溢れて池となり一夜の
内に白蓮花咲乱て異香四方に薫ず由て此池を蓮山
蓮華寺の称あるよし委しき事ハ印行の縁起にあり

つゝくに今も毎年三月廿一日より廿四日まで開扉
ありて音樂法會を修行す此四日の間遠近の群參
むぢ繁昌するもこれ大師の威徳千歳の下に輝けるい
と尊くぞ覺ゆる○本尊（大日如來の座像）寺寶不動明王像（大師の手光）
明曼荼羅（同）十一面觀音（同作木仏）剃髮名号（同作にして則母堂のき髮をもて延喜のころに六）
字と繡玉へり五鈷鈴（井中涌出するところ）松虫鈴（大師の所持）五筆心經（同手）菩提念
珠（同所持）泥塔（同作）兩會曼荼羅（同筆）黄金舍利塔（一基）嵯峨天
皇宸筆（一葉）陣太鼓（銘に元亨元年辛酉九月十八日藤原經住勧進寺僧等沙弥乘蓮とあり此外あまたあれども畧す）
寺產（むかしハ千石なりしが兵乱の後亡失せしといへども今も猶若干を領す）

磯貝滄洲

海師遺迹徧㆓天涯㆒此地殊看瑞氣加金杵有㆑靈曾出
氷丹蜂無㆑毒尚衝㆑花三春集會傾㆓緇素㆒五夜薰修護㆓
國家㆒一自㆑從㆑官少㆓餘暇㆒登臨何日命㆓中車㆒

無所得

蓮花精舍勝㆓祇園㆒樹色蒼々雨露繁靈地千年餘㆓土
像㆒來風累㆓世事㆒真言㆒林間蜂塚無㆓人識㆒堂外鈴池尚
自存我昔山房寓居久登臨偏想祖師恩

蜂須賀藏人正利宅址

（同村にあり）高名記に云、中比尾張國蜂須賀の里に蜂須賀藏人源正利といふ人あり。元来斯波武衛の末葉なりしが、武衛家衰微に及んで此里に蟄居し、所の名を以て苗字とし、僅に百貫の地を領して年月を送り、民家に軒を並べ、其名かくれて知る人なかりけり。大永六年一子をまうく。これを名を蜂須賀小六郎と名づく。長ずるに随て智仁勇の三徳を備へ、智謀勇猛の良士なり。初犬山の城主織田十郎左衛門信清が旗下に属せり。一日信清他に出行ゆるの間、敵窺ひ来りて犬山の城を囲む。小六郎防ぎ戦ひ、敵を追拂ひ、棟梁の敵を陣下に討れることを武功世にすぐれて感議せり。又岩倉の城主織田兵庫尉が旗下にありける時に、家臣謀叛して城を囲む。則小六郎突てかの敵を追拂ひ、陣を合せ首をとりて高名す。夫より信長公に仕へ、濃州齋藤龍興と合戦の時、切名比類なく、信長公の感喜斜ならず。領地五百貫を賜りける。蜂須賀彦右衛門尉正勝と改名す。則信長公の命によりて木下藤吉郎秀吉の後見にせらる。其功數度の高名あげて計ふべからずとぞ。

勝幡城址

（勝幡村と塩西村の間にありて南北百二十間東西百十四間なり。信長記に織田弾正忠は勝幡と云所に在城をかまへられける。これは信長公の父也と。按ずるに永正）年中弾正忠信定初めてここに城を築きて居住せり。また信秀も此城にて誕生ありしが、古渡の城へ移りて後は廢城となれり。精しくは首巻那古屋合戦の条に照し見るべし。又按ずるに往古此所の彼岸も此所なりしや。尾張國司歴任畧に、二條院の應保年中尾張守大中臣安長朝臣勝幡に在住とあるも此地の事なるべし。

根高地藏堂

根高村にあり。當国六地藏の一にして靈仏なり。又此堂の前の側に古松樹一株ありて頗る奇観なり。

万場渡

万場村にあり。佐屋街道の船渡しにして、両岸の白砂絹を布けるがごとく、清流其中を流る。此渡し枇杷島川の下流にして、是より一色村を経て遂に海に入る。瀬大河の此渡場より五六町川上に沿ひて南の方に榎井山とて数百株の古松生茂りたるが、白砂に映ぜる風景、播州舞子が濱に似たりて、眺望おもしろき一勝區なり。

驛樓西接萬場津　兩岸春風棹唱頻　落日舟中臺笠
白無非關左賽神人
森有齋

津頭樹如薺　落日遠沙明　水淺舟膠着　行人為助撐
服部牧山

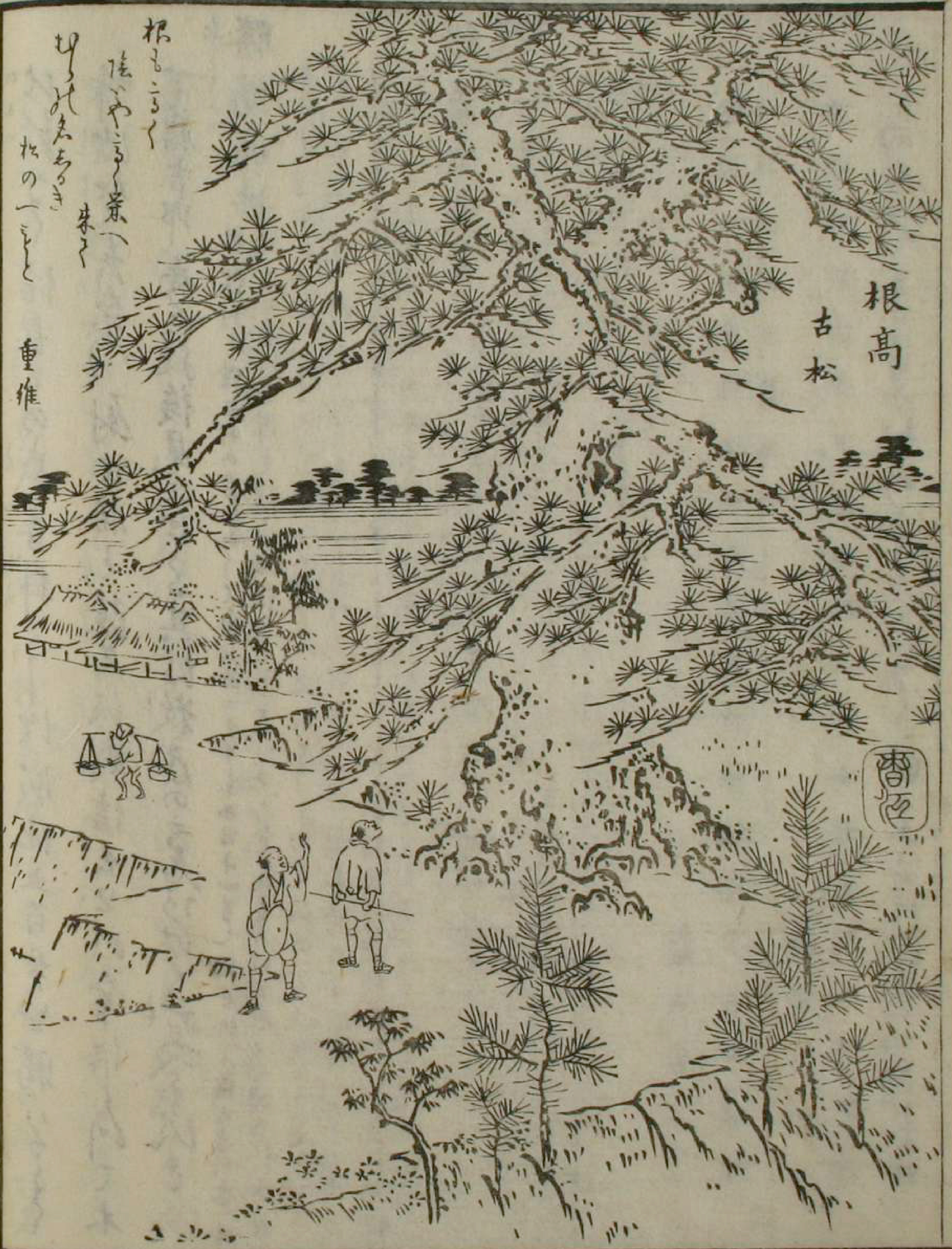
川なみや舟もちかくにおろしまく一人かさ渡る冬の川ばた
十三童　吉田冬朗

万場驛（田村の川の西にある客舎旅店是当驛と云依佐街道也 訳けてこゝより神部驛を経て依佐驛に至る）

孝女姉妹碑（八ツ屋村にあり 当年当村に修験善立といへるあり 家貧しくして妻は 三時の食ずら心のまゝならざりしが二人の娘あり 姉を久米といひ妹を）そよといふ二人とも性質孝行にして父善立へ孝養怠らざりしが或時善立病の床に臥しければ二人力をつくして孝養をつくせども薬餌の資乏しければ二人かたらひて富家に身を委ね奴婢となり其身の代をもて供給せしかど侍者にかゝれぬ父を一人は帷をはひ絡は二人は乞食のごとく村中を巡りて食を乞ひ或は府下にゆく銭を貰ひそれして病父につかへしが或時府下中下の覚風寺前にて妹そよ銭に大黒像を拾ひ得いと悦びしけるが姉は七月五日の祭りにはちくせ也小西氏のありければ姉はこれを求めくれんと嚢中を索りしに纔二文の銭あればかればせんと思惟せしと病婦はその二文をも惜しと思ひたゞ我には水かく足りぬれば粥は父に参らせてよといひもわくれ窮しくありにかゝる此時姉は十九妹は十六なりしとぞかゝる二人が孝苦の美を嘉賞は邑主人これ見えるく遂に邑主より其孝行を碑に刻して村中にこれを建らる是は天明年中の事にして碑文は須賀安貞が撰ぶ所也 委しくは碑文に譲りてこゝには其の餘香をとゞむるのみ

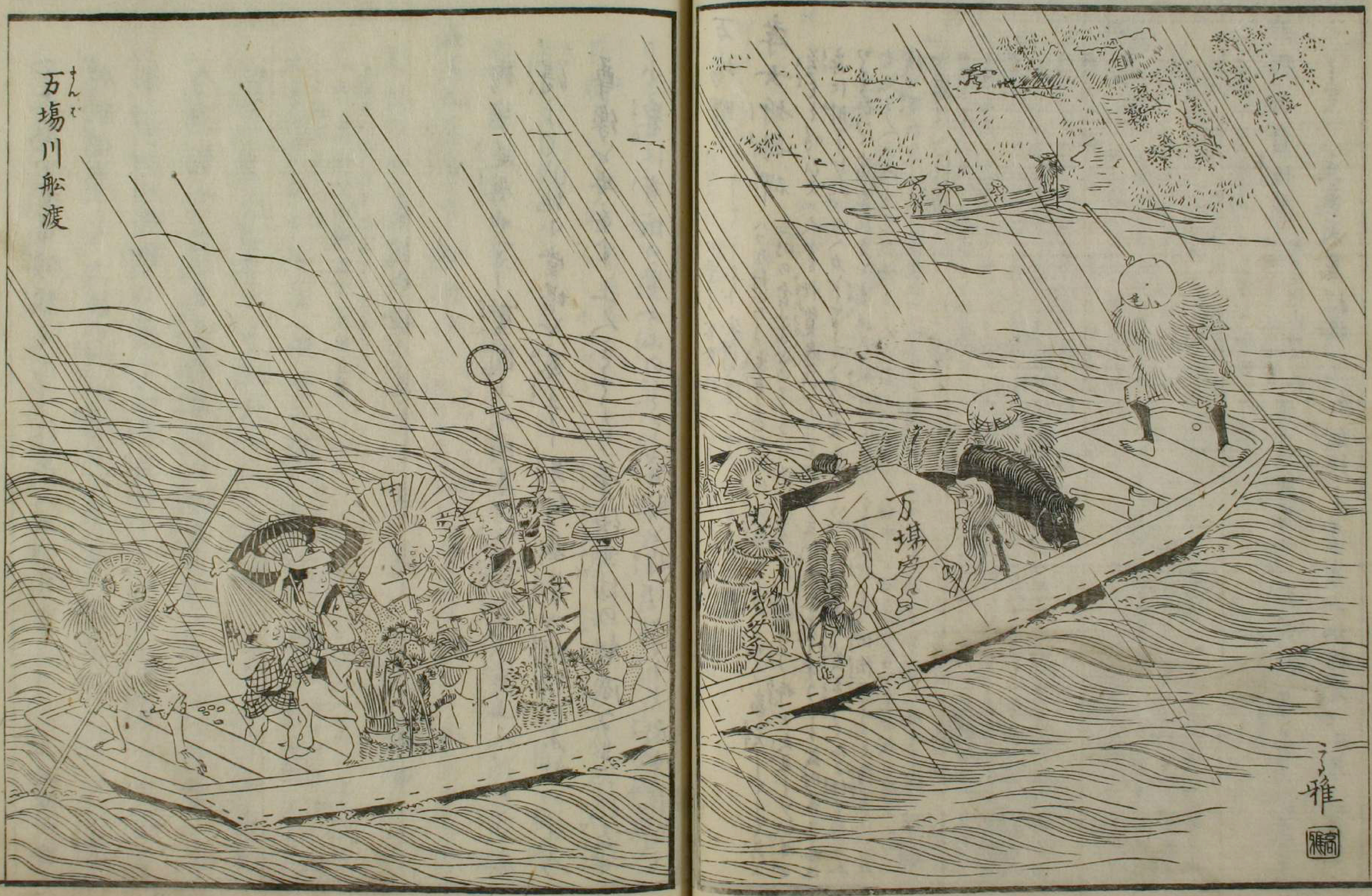
砂子川（砂子村にありて其名を新川といふ 水源は庄内川にして下流は枝津福田を経て海に入）天明年中水野某治水のために官命を蒙り初て地を決り新に分流せし頗る大川なれば魚鼈多く商船も往来し此川数里の間左右の千村万戸水難をのがれ五穀登熟の安きを得る利民第一の新川なり 委しきことは日井郡比良村の堤上に建し治水碑にゆづりてこゝに略す又此川に架せるを橋を砂子橋と称して是佐屋街道の往来也△

北野山自性院（田村にあり真言宗 府下大須真福寺末）当寺は大宝二壬寅年行基𦬇の創建にして文武天皇の御宇勅願所となりて永祚元己丑年八月八日



根もたかく
陰やこもる葉へ
来て
むかしみあるき
松の一もと
重雄

万場（まんば）川船渡



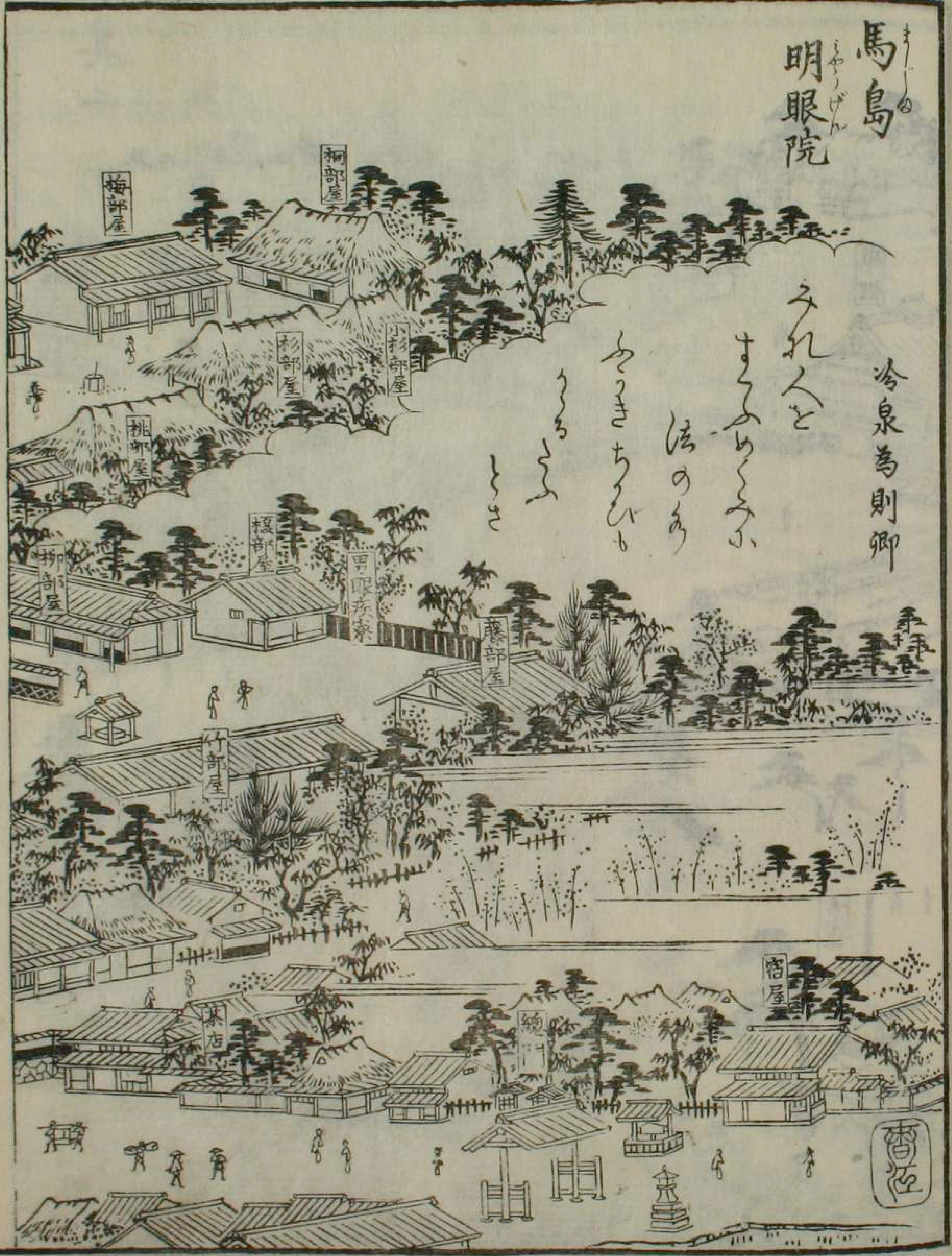
の大風に堂塔傾頽せしるに建久五（甲寅）年四月上旬北條四郎時政關東より上洛の刻に當られ本尊へ種々の祈願をかけ翌年下向の時暫く當寺に逗留ありて一ッにハ右幕下頼朝公の御為二ッにハ我宿願成就の謝恩のため堂塔を再営し寺領をも寄進ありし事證状に今も猶数通存せり ○本尊（薬師如来及び十二神將も行基菩薩の作） 寺宝 縁起二巻（延慶二年に書写する所也） 鰐口（銘に尾州海東郡富田庄成願寺鰐口也　大檀那川崎右京亮通貞妻　文明十八年丙午十一月十三日とあり）

春風やむら乾たる寺構　西白

五大山安養寺明眼院（馬嶋村にあり天台宗 [illegible]院末） 當寺草創ハ桓武天皇の御宇延暦廿一年聖圓上人開基の霊場也そもそも上人瑞夢を感得して此地に堂塔を基立し先行基菩薩の刻める薬師如来の尊像を安置す上人ことより学德兼備の智識なりしかバ化益日に盛に有信の男女山のごとく資財を捧げけるにぞ殿宇楼閣も日ならずして功を遂げ終に十八の坊舎なども左右に列し大伽藍の巨刹といはれしが（今枝院一坊のみ残りてその余ハ廃絶せり）夫よりして法燈絶る事なく儼然たる巨刹なりしが元弘建武の乱に兵火にかゝりて悉く灰燼せりしかるに本尊薬師如来及び慈恵大師の木像のみ僅に此災を脱せり 茲に清眼僧都深く此事を悲み當寺再建の志願をおこされしに佛力の加被も空しからずして延文二年に至りて又堂宇の結構頗る古に復して壮麗をつくせり故に清眼僧都をもつて中興の開山とす 扨て當寺眼科の一流天下に冠たる事のは僧都常に薬師仏を信仰する事大方ならざりしに或夜夢中に如来告ていはく汝我を奉ずる事年有り今汝が為に希世の術をあたへん是をもて普く衆生を済度し末世を利すべしと夢覚て一巻の書を壇上に得たり感歎肝に銘じ急ぎ是をみるに眼科の奇術をのせたり是より此術を試るに悉く應験あり

のごとく一人として愈ざるハなし其眞助ハ寺方にして代々當
寺を継ぐるにハ妙術の折當るゆゑハ蔵南坊といひしを
明眼院と更めしハ寛永九年（明正院の御字）上皇（後水尾院）の女三ノ宮
御眼御不豫ありしに京師の寓官衛と共に寺剤を進
らしむれども更にその験なかりしところに當院眼科の名
天聴に達しければ　詔をくだして召のぼさる住僧圓慈恭しく
命を蒙り勅を奉じ　玉座に近づき則御眼に針をさし薬を
献りしに日ならずして平愈ましましければ　叡感の餘り明眼
院の美名を賜はり且御會の短冊及び茶器など黄金数十
枚とを賜ふ是より醫王善誓洪慈のうちを示して家に
人力の及ばざるにわたれ又廿一世圓海法印明和三年戌十月
廿二日　桃園院第二ノ宮御眼病を治し奉る效験圓慈法印
の時の如くなりしかバ是亦　叡感の余り権僧正に推任し玉ふ是

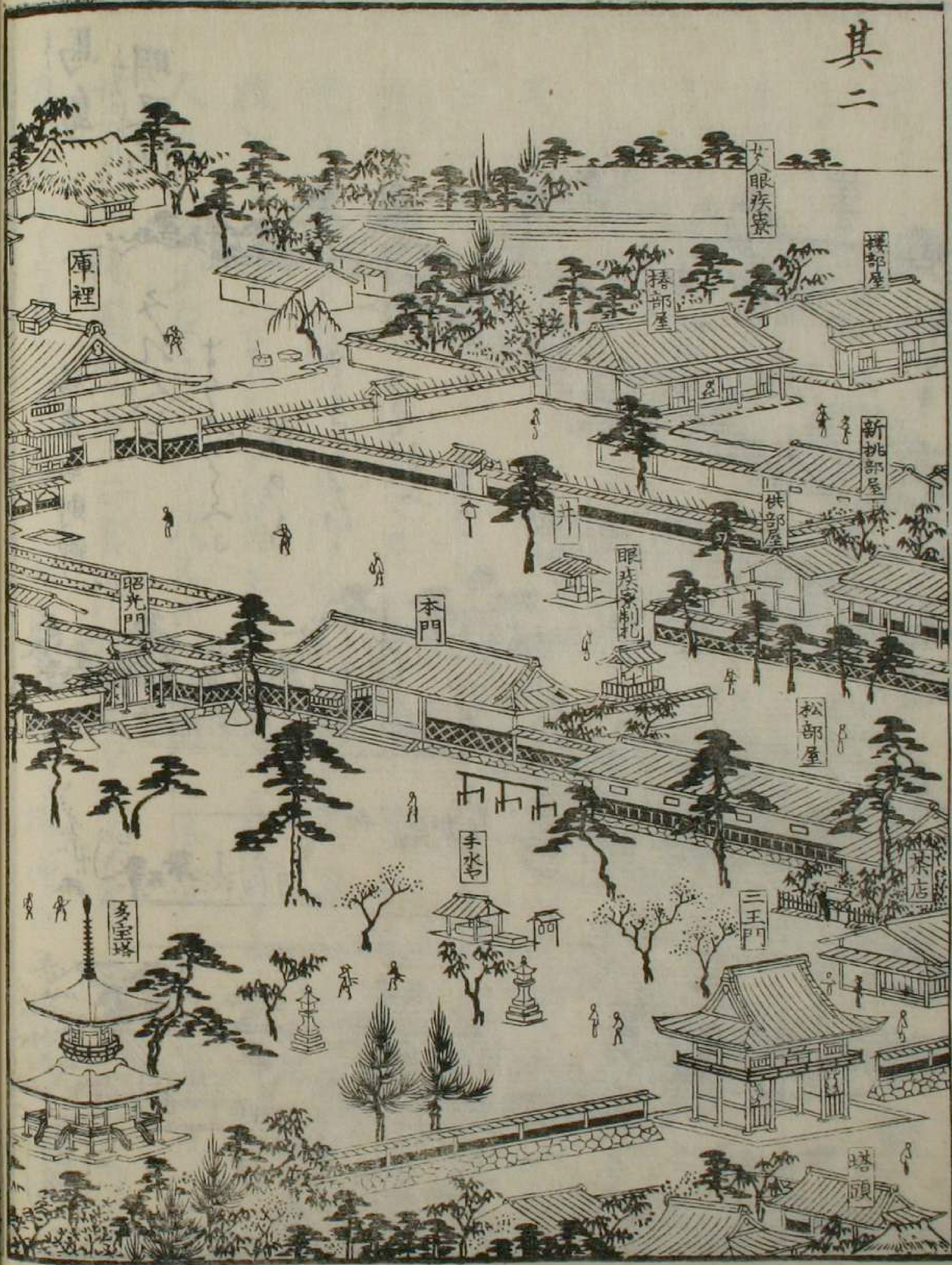
再補

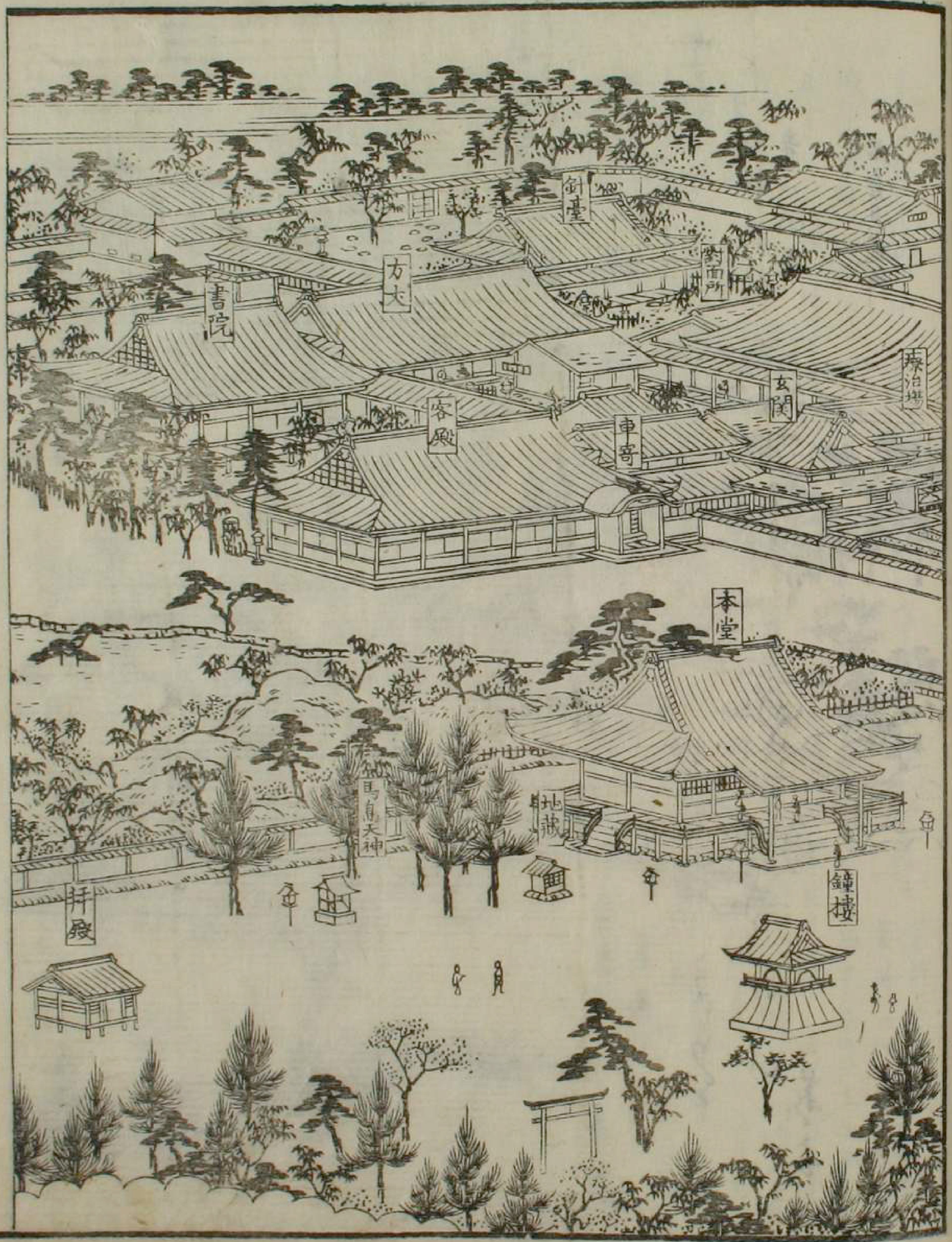


馬島
明眼院

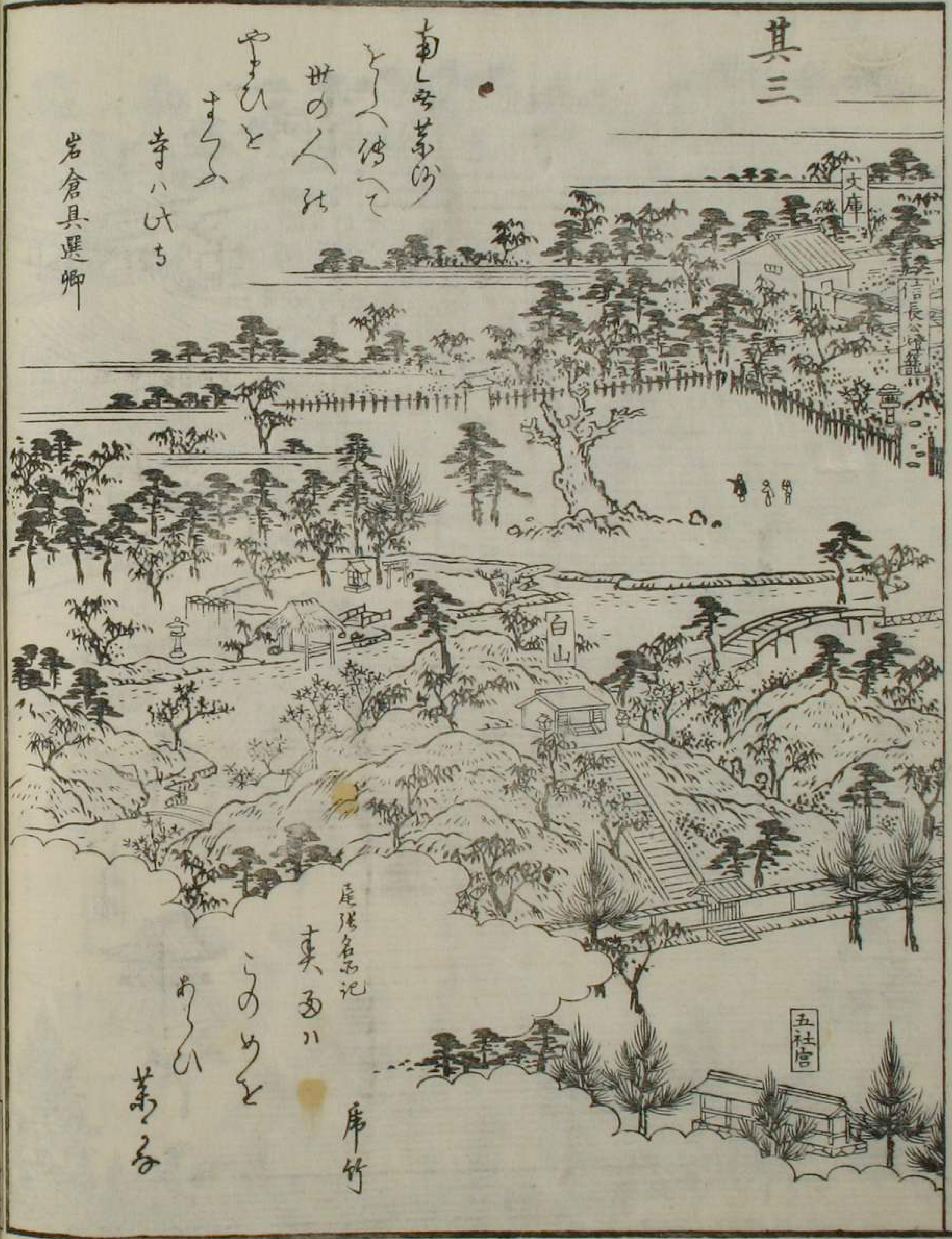
冷泉為則卿

みな人を
すくふめぐみに
法の名の
あきらけきちかひも
うつるふ
とき


其二
女人眼疾寮
櫻部屋
椿部屋
庫裡
新桃部屋
供部屋
井
眼疾守札
本門
昭光門
松部屋
手水や
茶店
二王門
多宝塔
塔頭


劔臺
對面所
方丈
書院
療治場
玄関
中寄
客殿
本堂
馬頭天神
地蔵
鐘樓
拝殿

其三



東しる茶湯
とく人傳へて
世の人は
やまひとまさる
寺ハ此ち
岩倉具選卿

尾張名所記
実ハ
このめと
あらひ
茶哉
席竹

よりて終に　勅額所とハなりぬ○本尊（薬師如来行基菩薩の作）宝塔（源信僧都の刻める大日如来を安置す今の塔ハ慶安二年の再建也）楼門（佛工運慶自ら彫附する所の二王を安置す今の楼門ハ寛文三年國君の御再建也）白山権現社（聖円上人若て壇を築き祠を建て當邑及び十二陣村の産神とす今に毎年三月廿一日村民不易れ祭礼を営ミ此日東語の男女老少を傾けて大ひに群集せり）辨財天祠（境内の池上にあり）馬島天神祠（境内にあり本國帳に従三位馬島天神とあり見えたり）寺寶　御會短冊（五十枚）勅賜茶器（七種）茶杓（小堀遠州侯の作）同（同作筒に明眼院と號す）茶碗（同筆にて銘ハ明眼院と號す）同（同花畜坊とあり）竹花入（同明眼院と號す）瀬戸文林　茶入（名書同筆袋安楽庵切）呂宋茶壺（同筆にて銘ハ明眼院と號す）景清甲曽弁唐櫃（此甲曽唐櫃の圖集古十種に載せて世に名高し）花鳥二幅對（呂紀）同一幅（周之冕）同一幅（林良）王達王世貞両筆の詩（一幅）夢想國師書（一幅）十六善神一幅（張思恭）薬師如来一幅（探幽）川渡布袋一幅（同画賛遠州侯）菊慈童二幅對（山楽）瀧見観音一幅（雪舟）維摩一幅（元信）神農一幅（國君御賛同御画）山水一幅（周文）枯木寒鴉一幅（雪村）後水尾帝宸翰の御懐紙（一幅）陽光院同（一幅）妙法院尭然法親王和歌三首（一幅）山水屏風一双（雪舟）古画屏風（岩佐）

又えはしと いひ伝ふ

書院壁張付并襖類

已上のこらず丸山應挙の墨画并希代の名器書画夥しけれども繁ければ略す又も六十ヶ一二と筆す

後園の假山

淺し當年奉行の庚眼病療治のうち當寺に逗留ありしが積よく快けまぢ望を引せんがため此假山を築かれしが今もそのかたくと供へく沐石是字を施られば風致當時に十倍して樹木の茂り石の苔蒸せる池水の藍と湛へ枯魚れ天然を楽しめる上に虫も書杖の庭會好和鳴来去するまでさながら深山幽谷の趣とうすして雅韵あめりふ計りし又當寺に來遊庭の手跡多くなる逗留中の遺跡なり又當寺へ昔より眼病療治に来り逗留するもの常に数百人に及べりいかさも宿坊と借り又治療をうくる又廊下ぞる通所ありて三八の日並に療治しその外旨いさんかたあり雅とえんて患備すべし

寺產

國君より御寄附に若干石を餘す

明眼院八景

醫王殿　　滕守禮

烟霞今古辯泉石入膏肓身在杏林裏青囊世々香

多宝塔　　石作貞

祇園宝塔舊天工疊々珠輪拂碧空不恠半天人語

響法門元自有神通

白山祠　　僧月儒

松杉擁翠壁中有托神靈蕭々數千歳庶民祈泰寧

天女祠　　南宮岳

行到妙音宮々前凜華表自似彈琵琶春風生樹標

楗雅樓　　東亀年

高閣撞華鐘曉風遠相送豈唯為報時應覺人間夢

翠霞峯　　峩眉

茲山何屹立莫道代天工相似赤城外更過神闕中

春霞凝紫夕日映花紅借問栖身者仙来不老翁

嘯月亭　　朧草廬

寂莫禪關外有亭百尺程何人明月夜長嘯作鸞聲

觀魚橋　　僧六如

投餌敲欄慣不驚架梁影裡駢頭迎悠然心樂思莊叟々々爭如宝勝名

一森山圓長寺

西條村にあり本寺宗東派もと天台宗の古刹にて一心山月照院と号し塔頭十六坊ありし大地なりしが應仁の兵火に堂宇殿廡も悉く灰燼せしかるに文明年中傳榮某今の宗に改めて号を一森山とあらためしく後め殿堂とも再營せしが今に到りて十四世なるが逸營し又新に堂修造を加へて頗る壯麗の梵匠となりぬ當寺は諸堂の鴟甍に聳えて江濃加越の山々一間顧の中に在りて風景よし

本尊 阿弥陀如来木像 慈覺大師の作

藤島神社

秋竹村にあり今彦浦明神と称す延喜神名式に藤島神社本國帳に従三位藤島天神とあるも是なり

天桂山廣濟寺

桂村にあり曹洞宗津島興禅寺末嘉吉九年八月の建立にて開山は天むね和尚なり織田大和守敏定自筆の額を揭ぐ又寺領とも寄附ありしがこれは代々の證文にも今にこれを傳ふ

本尊 釈迦の 立像　塔頭 東陽軒 境内にあり

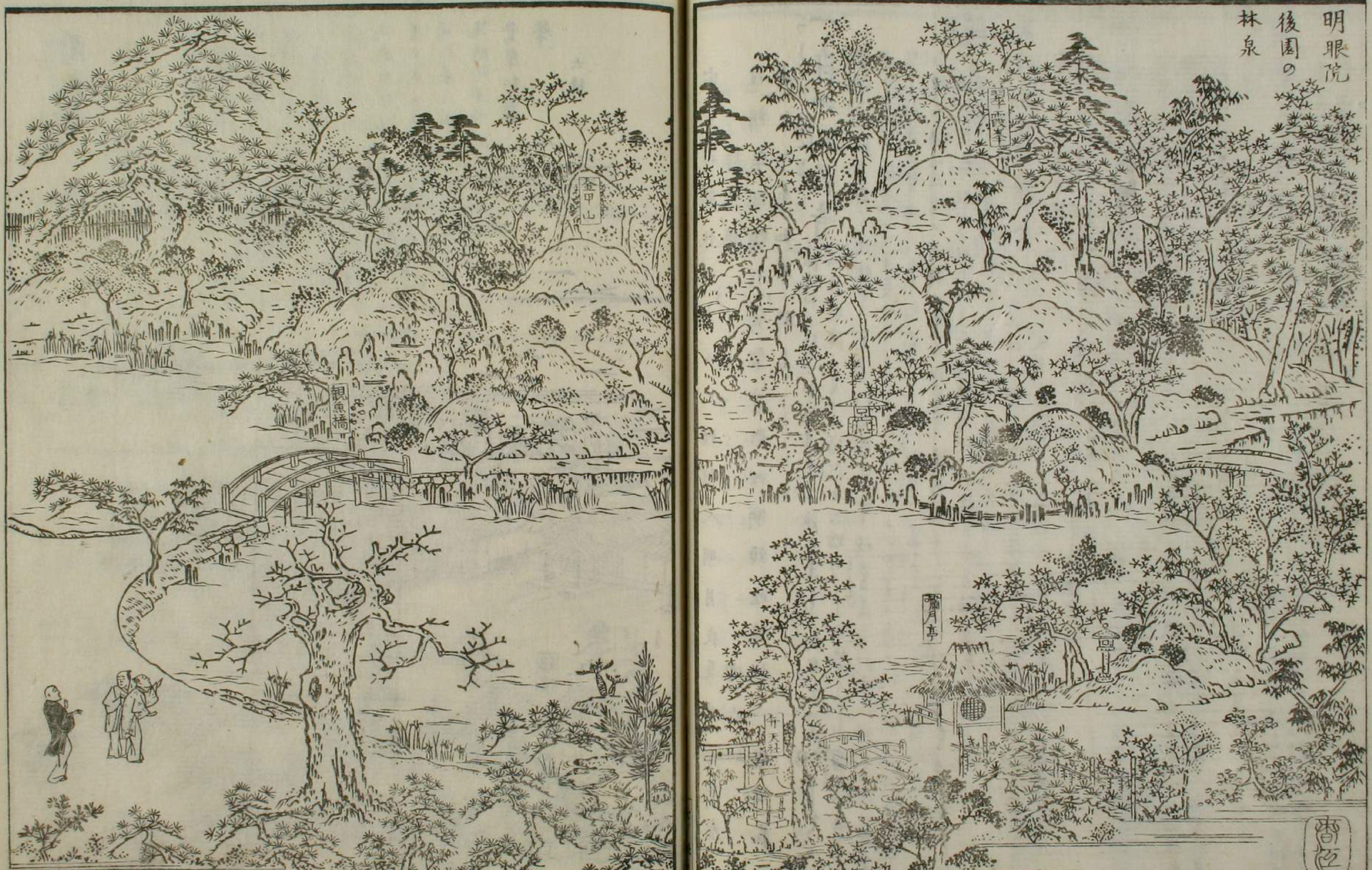
伊福部天神社

伊麦村にあり今七社明神と称す本國帳に正四位下伊福部天神とあるは同集説に伊福部の氏神をまつるといへり戸田庄伊麦村七社明神とまうし同書に諸本不載此一社但埜田如法院藏本録之とあり又國府宮本には従四位上伊福部天神とありて今の社の名をあげたるに境地も廣く古本も古社として古社なる事疑ひなければ集説誤まれりてまづかく當社を伊福部となせるなり

河葉天神社

川島村にあり今春日大明神と称す本國帳に正四位下河葉天神 元亀二年の書写國府宮本に従四位上河氣天神とある是なり天正二甲戌年の再建なり

例祭 正月十七日 奉射

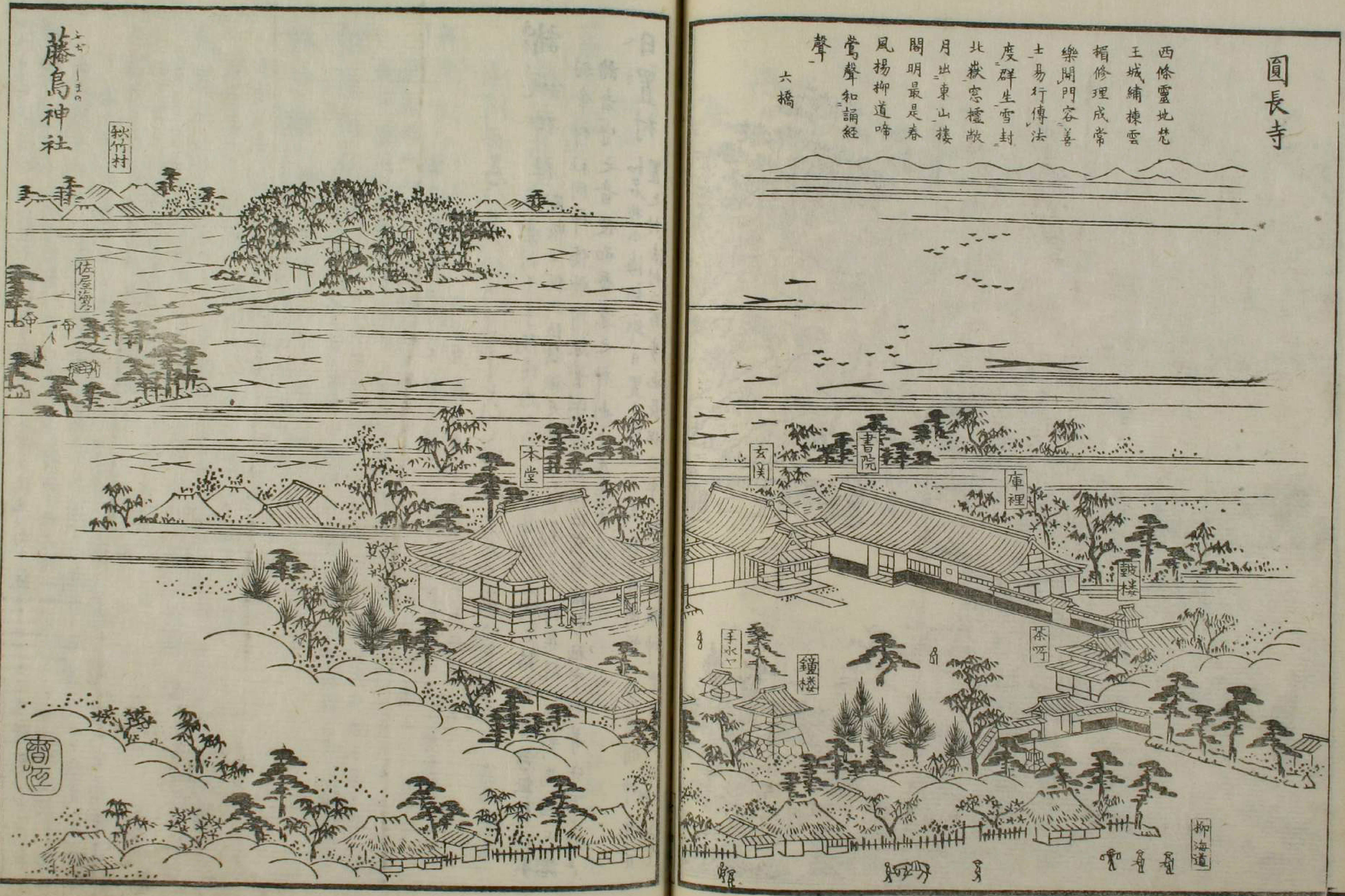

明眼院後園の林泉

翠霞峯
嘯月亭
弁天社
金甲山
観魚橋

圓長寺

西條靈地梵
王城緒棟雲
楣修理成常
樂開門容善
士易行傳法
度群生雪封
北嶽窓檻敞
月出東山樓
閣明最是春
風揚柳道啼
鶯聲和誦經
聲

六橋



藤島（ふぢしまの）神社
秋竹村
佐屋海
本堂
玄関
書院
庫裡
鼓楼
茶所
手水や
鐘楼
柳海道

葉

面足尊社（おもたるのみことのやしろ） 高座村にあり 俗にこれを甚ちれ御面と称す 古老の云尾張志とある 織田元亀二年勢州多度神社兵火にかゝらんとせし時祠官小串氏次内信光神宝の古面及び太刀一振をもちて立退しに忽然と老翁あらはれ信光を導きて当所に至り此所に安置すべきよしをしへていづくともなく消うせぬ 其後終に社を建てこれを祭るに日々に霊験著く今に至るまで其子孫の奉仕するなり

義経弓掛松（よしつねゆみかけまつ） 下田村にあり 九郎判官東くだりの時弦弓を放て試みられけるに百町を射越しけれバ百町村と名づけしとぞ 矢落の社とも是より此似へし古跡にして今も其古松一株あり 是を弓掛松とうけられし松とて里人かくいひ伝へしなり

神守驛（かもりのえき） 佐屋街道の馬次也 旅舎旅籠も頗る壯麗にしていと繁へり

憶感神社（おくたかのかみのやしろ） 同所にあり 延喜神名式に海部郡憶感神社 本國帳に正一位憶感名神とあるは是也 文徳實録に仁壽三年六月丁卯以尾張國大國霊神大御霊神憶感神等列於官社と又三代實録に貞觀七年十一月十七日甲午授尾張國從五位下憶感神從五位上とみえたり ○別當憶感山吉祥寺

日光川（につくわうがは） 諸桑村と宇治村の間にあり 頗る大河にて佐屋街道にハ大橋を架す 下流ハ百町 鹿伏兎 観音寺 大海用等は舩渡しあり

川の名の日はひかりさしそひてゆくへたえある岸のとまり家　高橋廣道

諸鍬神社（もろくはのかみのやしろ） 諸桑村千手院境内にあり 延喜神名式に海部郡諸鍬神社 本國帳に従三位諸鍬天神とあるは是なり 同集説に按對馬國天諸羽命神社同神 倭歌所詠藥守神也 弘仁式河海抄袖中抄等守万木神云諸者守之音便而蚕桑之神也とみえたり

日置村（へき） 和名抄に海部郡日置とあり 又民部省圖帳に富岡明神有日置之村去村二百歩也 長保三年初奉宮殿神靈豐岡比咩也とみえたり 古き地名也

若宮八幡社 同村にあり 祭神 仁徳天皇 別當光明院これを掌 又社殿に十一面観音を請じ古鏡を掲ぐ これいにしへの本地佛なりとぞ 当社往昔ハ大社なりしと 今も大門鳥居先より本社まで三町餘もありし社也 又ハ古松繙々として雲を拂ひ数百株の相を標し 瑞垣屋敷神子屋敷などいへる字も残り 神殿いと古雅なる造りまでも古代なる意縁せる 社傳に親公建立なりといへり 俗に日置の八幡と称して名高き古社なり

○**例祭** 正月十五日管粥（くだがゆ）とて五穀を入る筒を小豆粥の中へいれて其入加減（にうげん）にて年の豊凶をとふる 是を日置の管粥といふ 又八月十九日当所の十人組とよべる者馬の塔をおこし 此人々ハむかし社事に預かりたりとぞ 同十六日神宝虫拂ひありて古き弓矢獅子頭及び経巻などを諸人におがましむ 又社地にも社あり 九月九日湯立をなす

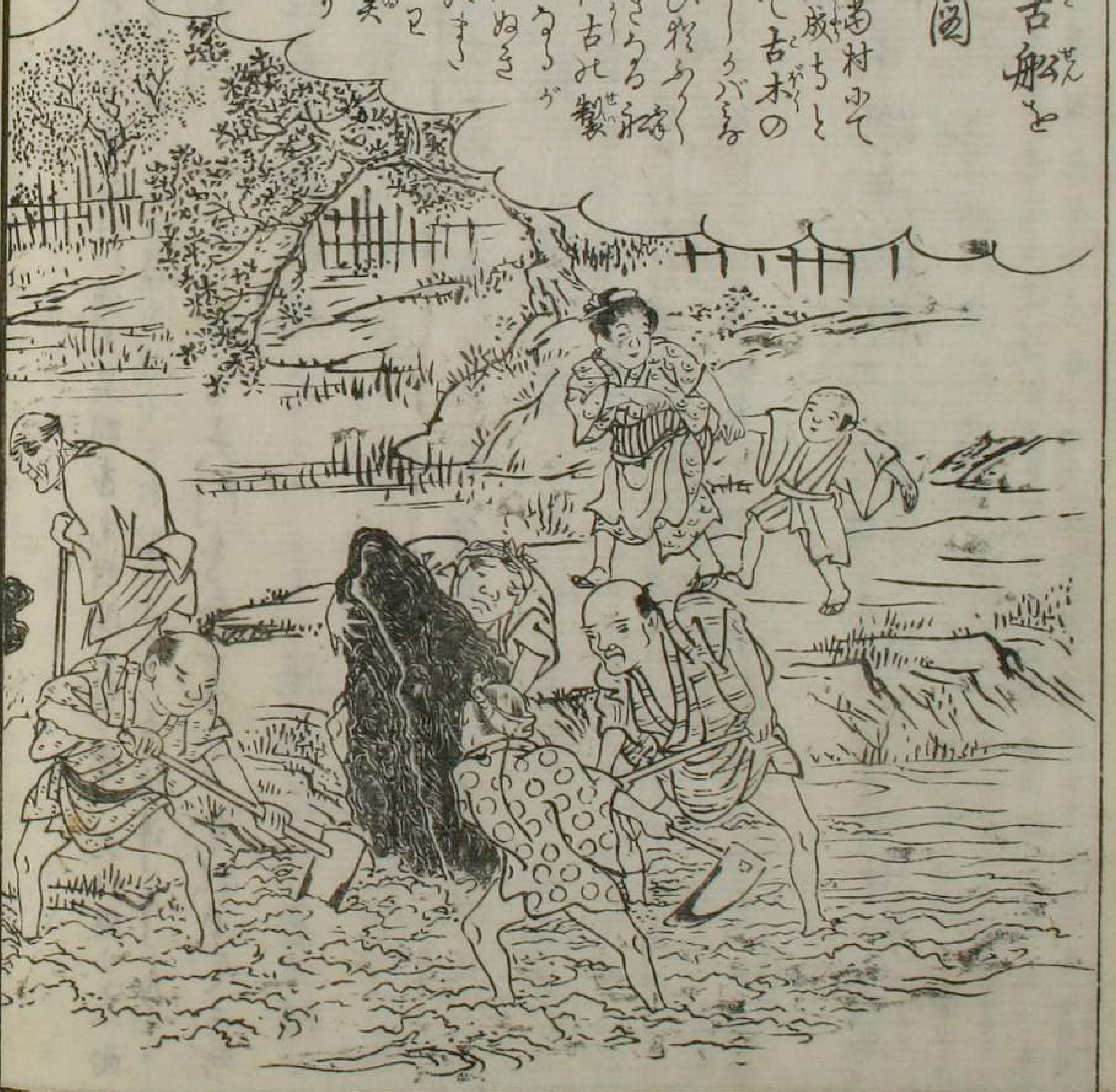
八幡山光明院常樂寺 同所にあり 則八幡の宮寺にて真言宗大須寶生院末 右大將源頼朝公の創建なりと寺傳にいへり

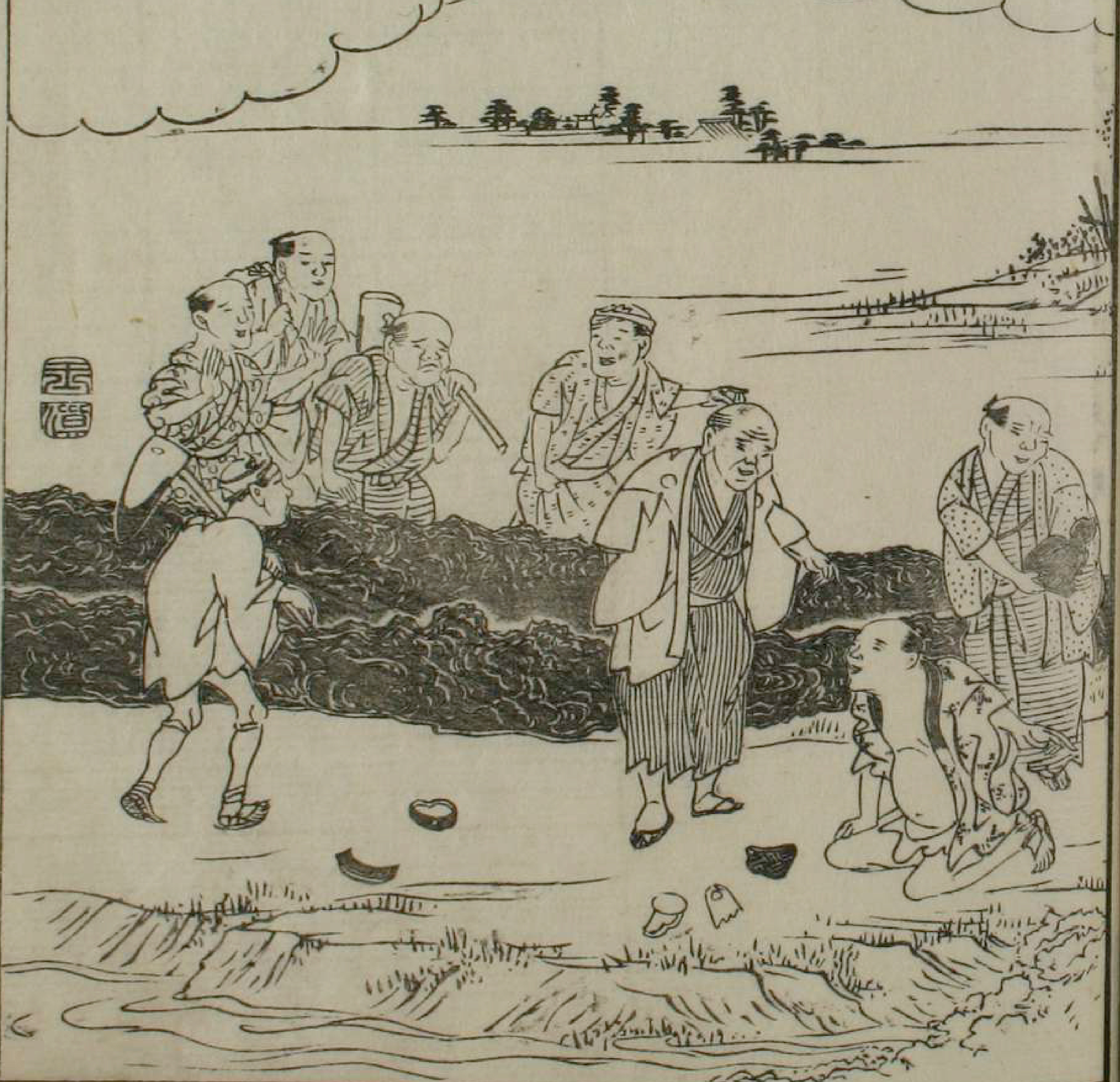
本尊 薬師如来 行基菩薩の作

寺寶 **大般若経** 百餘巻あり 其紙つねにかはり 浚軸ごとに古き年号を書せり まこと九十巻の奥書に建武五年戊寅七月十一日於尾州海西郡日置庄一色常福寺州養右筆安養佛子覺忍と書しまた餘の巻々にも皆年号をのせ

諸桑村にて古船を掘出せし図

天保九年戌四月當村にて川浚へをせしに満成寺といへる寺の裏にて古木の如き物に掘當りしかバ怪しく思ひ猶ふかく掘りしにいと大きなる船を掘出せり此船往古の製にて樟の丸木船なるが三ヶ所つぎてかんぬきをもつて是をとぢたり船中より大綱のいかり古瓦古錢并に余具形の碗器多く出す夫より又其邉りをとかくてかへし尺をバ木佛像の半躯を掘出せりさて當村ハ式内法繁の神社をはりて千年に及ぶ旧地なれどさる昔ハいまだ此地の海にてありし時より志づミし船ならんか又ハ隣村古川村ハもと川筋なりしを埋めて今の村とせしよしなれバ此地までも彼川筋なりしこともありし川船のいつしか埋れありしかもやあらん





されど今は（もと略す）舎利講式残編一巻（梅尾明恵上人自筆なる文書とふに甚古雅なり奥書に建保二年正月廿七日沙門高弁草之と志るせる原本なく希代の珍書なり）

甘楽名神社（甘村井村にあり本國帳に正一位甘楽名神とあるは是なり　玉府宮本に正一位上甘楽名神とあり今は八幡と称れ）

由乃伎神社（柚木村にあり）延喜神名式に由乃伎神社本國帳に従三位由乃伎天神（一作夜譽）とあり同集説に私曰天孫本紀所謂湯支命者三見宿祢（漆部氏之祖也）出自之人也蓋此命歟とみえ又く風土記残編にのせる湯貴首人等が祖神なるべし今俗に神明と称せり

佐屋驛 東海道五十三驛の外にして此より伊勢の桑名驛に渡る舟路と佐屋路といふ当驛ハ頗る繁昌の地にして旅亭客舎軒を並べ行人つねに絶ることなし

相江天神社（内佐屋村にあり本國帳に海部郡正四位下相江天神とあり　同集説に戸田庄佐屋村三社明神歟とみえて今三社明神と称れ）

水鶏塚（同所驛中の南にあり入口に標石を建つ碑面に芭蕉の句及び門人寿川が文を彫る）

水鶏啼と人のいへばや佐屋泊　芭蕉

芭蕉翁ハ伊賀の國の産にして氏ハ松尾と呼く風雅を季吟老人に傳はり一生不住の杖を曳し東南西北の風に移て遁遥する事三十餘年元禄八の年皐月の初つ師の行脚と此佐屋の宿に遊り山田行来の亭に五日ばかりとゞめく水鶏の一章を残したまふ縁にひかれて此里の俳師竹の葉の麻の袖に似より夫が中に寄潮字林麿とよびし等亀志宜助力を加へ吟山施主となりて墳を築き碑を建て銘を乞

銘曰

師や涌出たりれぬと　情に称し姿にうつしては
師やわきまへる桃青ともと　今も味噌の香を慕ふ所に
師や膳勝部智に貫しを　教へ正風自在となしは
師や実に店く塵に指さし　歎しく世に風雅の香をとは

享保二十乙卯年五月十二日建焉　月空居士寿川

佐世集が蔵せる翁の真蹟のものは嵐雪が元禄仲夏佐屋に一宿し侍りてあたりの霊によろとのしとみえ泊船集にハ寿川が等佐屋まで送り申してともに加り乗次と志るせり

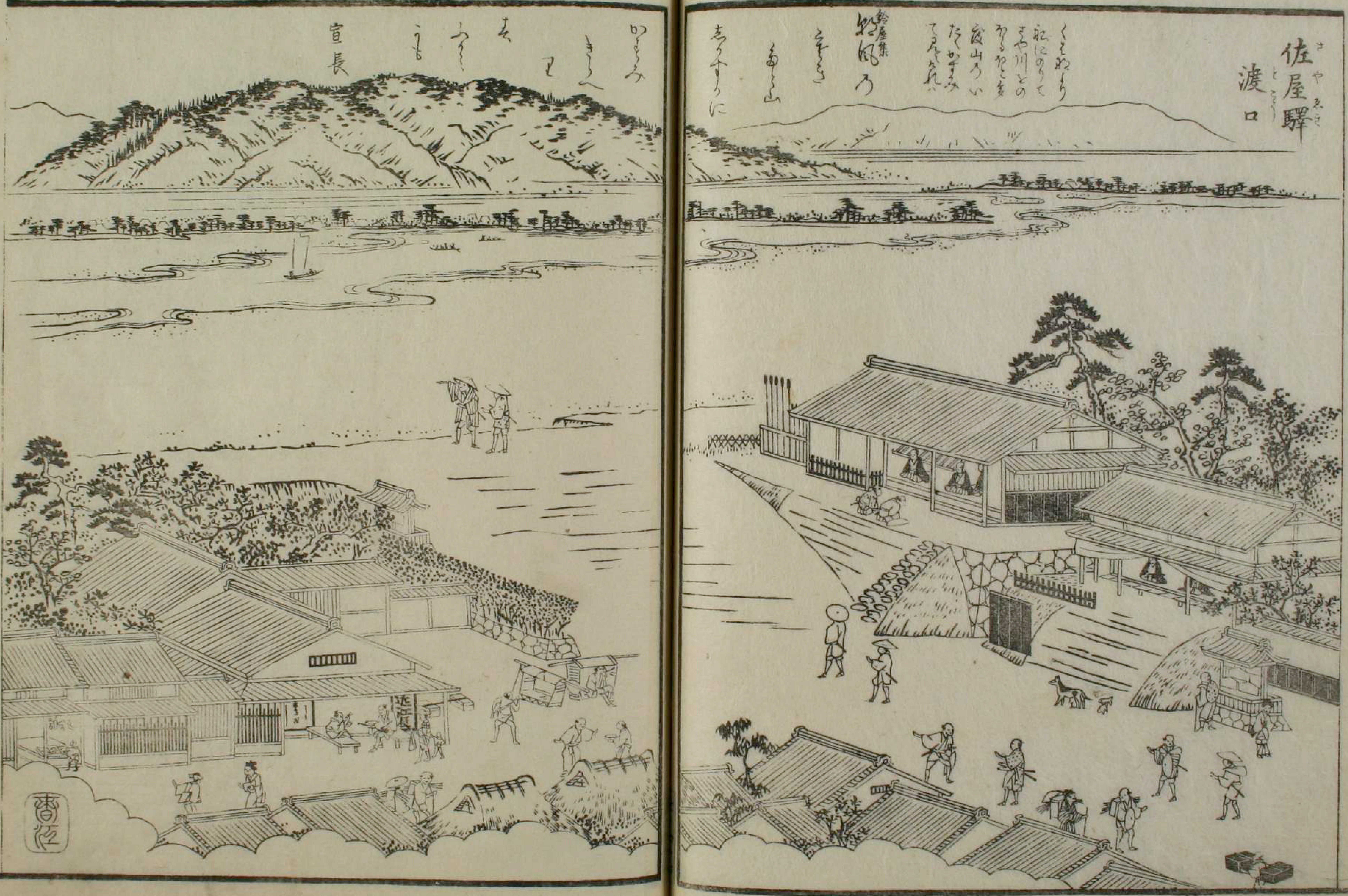
草枕
月も見や水鶏なく秋れ稲の上　素檗

佐屋川（同所の西なり　大河なり）是木曽川の下流にして水源ハ信州の筑广郡奈良井驛の鳥居嶺の奥より出て飛驒美濃両国の川々のこらず落合或ハ分流し伊勢の桑名の城下に至て海に入る凡そ六十里の長流にして川巾甚廣く水のあびたく

佐屋驛渡口

くはなより
舟にのりて
さや川との
わたりとき
多度山のい
たくかすみ
て見えけれハ

鈴屋集
船風乃
さむき
多と山
しのすゝに
かすみ
きるへ
見
衣
かへ
らる
宣長



しきりに測（はか）りがたく川中に棹浮油浮の類あり ちゝより桑名への船路三里余常に大小の船往来絶る事なく縉紳（しんしん）の高貴及び西国の諸侯方も皆此川を通行ありて宮の七里の渡しに准ずる船渡しなり

自適園遺稿　佐屋船中　伯就
水波縹渺夕陽紅　多少帰帆掛碧空　河上長雲飛欲盡　纖々初月有無中

紀行
くるゝ日の波と競ひて漕船は波静なる佐屋の川船　為村

附きてさし出せる舟とみゆるは佐屋の河辺の雲のむらきえ　隆真大尼

戸田米

戸田村より出る所にして其上品を九月上旬立毛と　國君へ奉献と為す　當国の内此村の産をもて種米の第一品とす又此村より産する所の菜風味附に勝れたれバ世に戸田菜と称して名産とする是も十一月上旬當村の山田氏より　國君へたてまつる

佐久間駿河守城址

蟹江（かにえ）にあり町の丑寅の方にありて東西五十四間南北五十五間大手の南に三重堀のあとのこれり今田畝となれり土俗字（あざ）して城の内といふ又南大手のあとを御門の口と称す

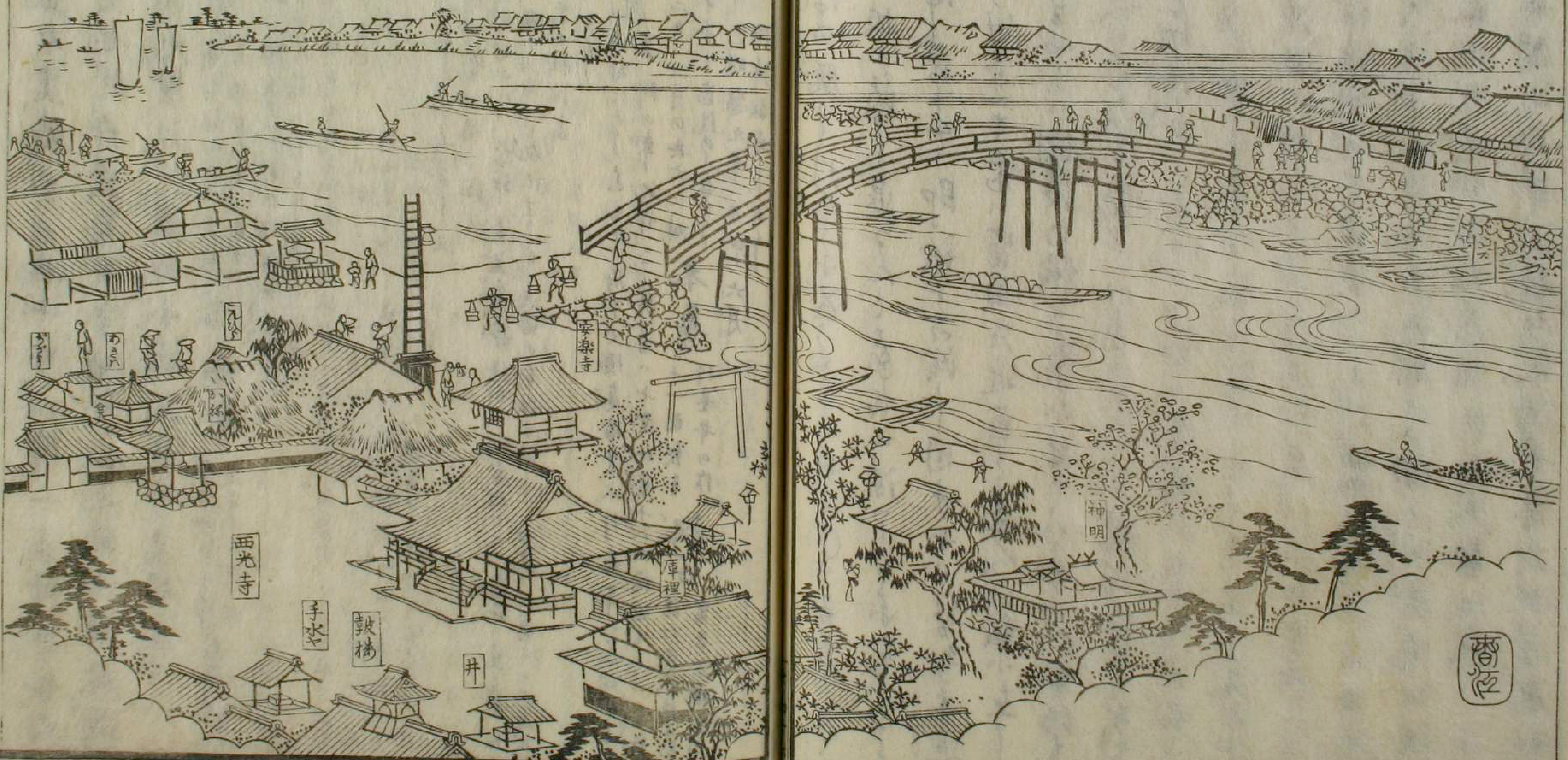
佐久間駿河守ハ（初め甚九郎と称す）尾張本貫の武士にして當城に居住せしが菅生（すがふ）へ在番におもむける附若（?）由与十郎（駿河守母方の伯父なり）として當城を守らしむ然るに与十郎逆意（ぎやくい）を起し秀吉公へ内通せしより終に斯る合戦には及びぬ小瀬甫庵が太閤記に滝川左近将監一益ハ去年まで北伊勢五郡を領し長嶋の城主として有しが家国滅亡（めつぼう）の後は極窘の身となりて江州甲賀において纔に五千石を領し居たりしがとかく長嶋の城をば信雄卿より奪ひ取んと思ひ居たりし折ふし信雄卿と秀吉公既に矛楯（むじゆん）に及びしかバ勢州木造（こつくり）の城に滝川と冨田平右衛門（近江と号す）両人在番して入置かれぬ滝川扨こそ蟹江の城を調略（てうりやく）し尾州に取りて中入とし家康公などをおびやかさんと謀りて前田与十郎方へ此度秀吉公へ忠義をいたされなば以て一廉（ひとかど）恩賜（おんし）の地を与ふべしとひそかに諫（いさ）めけれバ即ち同じたりしぞ来ル六月十六日の夜渡海

城に入べしと約しける然るに九鬼右馬允に此旨告知せあ人の勢都合三千大船に乗連ねけるが滝川勢半ば蟹江の城へ運か〻入かゝり即一益を入城して柵をのゆひやくやせんとせし處にいかなる者れ志わざにやありけん酒家に入て放火せしかば思ハずも三十宇ばかり焼けるより其紛に家康にハ清洲の城におはしけるが此旨注進を聞ひとしく勢をおし捨鞭をあて急ぎつゝ蟹江の城に押よせ先海の方を固め城中へ滝川勢を入ざりければ半ハ又大船に取のりて鉄炮軍におよびて城を二重三重に取まき荻に柵を付廻し十九日にハ棲楼を上げ城中を見おろし鉄炮を打入射すくめ城に入ければ火矢を四方より射入れ鯨波の声をあげ鉄炮を子の方より打けるが初め亥の方より打納めければ城よりも又はげしく返しく終夜のすさまじさに城の者ハ燥の脱がらの中に城をまもり矢だねも玉薬も尽しかば滝川扱ひに及し退かんと家康に謀けるに其志あるびてゆるしゆるされて即城を引渡し同十七日勢州木造の城へ退けるがこの城ハ冨田左近亟といふ人此城に在しかども冨田云やうハ蟹江の城を退しに付ていかれ堅く守も有らん此城へハいれまじけれと申けり滝川天にも身を地にもおかれぬ境界となりければ越前の井に一度下りて遁まりしと豊臣秀吉譜に瀧川左近將監一益者柴田滅亡之後潛居于越前秀吉惜其武名使居伊勢神戸一益聞秀吉信雄締兵乃遣使于尾州蟹江城主前田與十郎曰汝可盡忠于秀吉若然則恩禄不少矣前田聽之於是一益與九鬼右馬允嘉隆乘舟入蟹江城大權現信雄共聞之即率兵往攻之酒井忠次榊原康政

蠏江川

川のなかれ則蠏江村にして農商千戸の小都会也橋上の往来を絡繹として常に絶ることなく漁商の船こゝに湊ひ米穀野菜も朝夕に交易して豪農富商も家多し中にも往来系が家ハことに重宗当所の城を後河ち信江の住人なるなりより其子重安城南に宅地とれてありしが天正の合戦に闘死し第宅も廃墟せり其後福島後盤神社を建く西有に来りし重安の子主治へ其本墓千を繕ひて復古し終に二百余年の今に到りて相連続せる素封の巨家也

芦間ゆく
蠏江の舟も
見治せて
ことゝもせぬや
あさき水鳥
黄中



勵軍功一益力盡斬前田與十郎以降一益歸伊勢而恥之上京又逃於丹波爲秀吉聞蟹江之戰而欲援瀧川發自大垣赴蟹江一益既去城故秀吉直歸京云々

城南山西光寺 （蟹江村にあり本願寺宗東派京都本山末寺） 本尊 （阿弥陀の木像慈覚大師作） 寺寶 （聖徳太子十六歳木像慈覚大師の作 紺地金泥十字名号親鸞聖人筆 六字名号蓮如上人筆）

蟹江川 蟹江村本町新町の前を流る 大河なり 水源ハ新居家川にして末ハ海に入る 此辺海合ひにして大河なれバすべて魚鼈貝鱗の類多く産する中にも当村ハ漁人数百家ありて常に是を捕て産業とし殊に鰻鱺蛤及び青海苔を名産として府下ハさらなり諸国へも日々に夥しく運送す中にもうなぎを京師に送るもの其数挙てかぞへがたし 又此川に架せる長橋を蟹江橋と称す

牛頭天王社 須成村にあり祭神素盞烏尊 傍に八剱宮社あり祭神草薙剱 相殿に五神を祀れり 熱田の本社にならひし毎年六月十七日夜試楽祭 翌日祭禮ハ粗津島のまつりをうつせり

蟹江山龍照院 同村にあり真言宗府下大須真福寺末 行基井をもて開山とす 草創の年紀詳ならず 昔ハ七堂伽藍十八の僧坊もありて巨刹なりしが天正十二年六月の兵火に焼失して今ハ只本堂と当院のミ存せり 本尊 （十一面観音 行基井の作） 鰐口 （傍に尾州海東郡富吉庄蟹江山常樂寺常什也明應九年庚申六月十八日施主一阿弥敬白とあり）

源氏島 西喜村にあり里老傳へて平治の乱に左馬頭義朝美濃の青墓より知多郡野間の内海へ赴きて渡海ありし時こゝに舟をとゞめて休息ありしのち此地を築きて田畠とすれどもかく名付しとぞ

善太川 一に善光川ともいふ 水源ハ同郡諸桑村よりいでて犬井村吉太村の西を流る 大川にして海東海西の界川也 此川魚鼈多きが中に鯉鮒とりわけ白魚大蜆鰻など殊に多くして年中魚猟たゆる事なし 元来当国に産する白魚ハ他邦に勝れて形大く美味なり 事跡合考に云 両国の川筋に産する所の白魚ハ尾張名古屋の浦よりうつせしもの也とぞ 難波丸がかくところも紀州にも浦山しかくいへり 伊勢尾張のあひの海にいづる白魚などもありて其名産なる由 此川下流ハ大海用といへる所に八ツ枝として大なる水をすべて此川末を諸蓋新田へ落したり 又是を新田のうちに引て新家といへるあり 此家ハ新田開発の人にてより当所に住して今に栄え其宅地ハ四至樹木繁茂して常に鳥獣の棲とし もしれぬ 大なる家なり

夕されハ雲に入日のかげ消えて さつきからすの夢を書けし　倣 英泉

慈興山圓成律寺 （中島郡一色村にあり浄土宗関通派京都知恩院末） 当寺ハもと西臺山西方寺とて浄土鎮西派の甲刹なり 開基の年紀詳ならずといへども寂安永和年の古碑あれバ其古きこと知るべし 慶安年中に品誉上人再び法燈を挑げて殿宇資具に至るまで頗る完かりしに後法嗣照誉上人また精力を

おしき先典を修め又こゝに寛通上人とて浄業専
修持戒堅固化他度衆の碩徳なりしが末法の濁世道
俗ともに名利に走りて佛願祖意に背んことを深く
患ひ終に寺改を華めて律院となせしより四苑の信仰篤
ありし持律の浄行今に儼然たり関通和尚の行業記
に云師一日衆に告て曰予西方寺を改めて如法の律場と
なし有識の大僧を請じて主席とせんと欲せば自ら
機縁をとりてこれを撰んと思はん者は奉律随侍し浄法
修行すべしとありければ一僧師に問て曰此寺今規則厳
にして浄業衆祖道を輝すに足れりとするを改めて律
院と志したまはんはいかなる御意とかするとありしが又義
門意は自分を出離無縁とおもひなして仰ぐ佛祀
とさのむを要とするにあるやまたと持律となくしく
けるが意楽もまた律と宗意にたがひやせんとおもひしかど
なやし師答て曰それ毘尼住すれば法住し毘尼廃すれば
則法廃となりて小照誉上人像末に当ると予が浄業
し浄法をして永く絶ざらしめ益を無窮にかがやかせんとぞ
小遺属したまひし言なりされば予毘尼を当寺に起して佛
法の寿命をとこしなへにせしめんと欲するなり又明律比
丘僧を請じて住持せしめばこれに親近して其の風をしたひ
せんもの自ら身口の止作のことを志り慚愧を生じて正
見實行の門に入の因縁となるべきなりしかば弊風を
一轉し宗化さらに輝をまさんべし又持律をもて浄とかへば
意楽も深く宗意に背んとおもふをそれは各の意に依る
処なり其の戒律に従事せん人なしはなはだ口惜しき事なり善
導大師のごときは護戒を謹密にして南山讃じて律

圓成律寺（ゑんじやうりつじ）

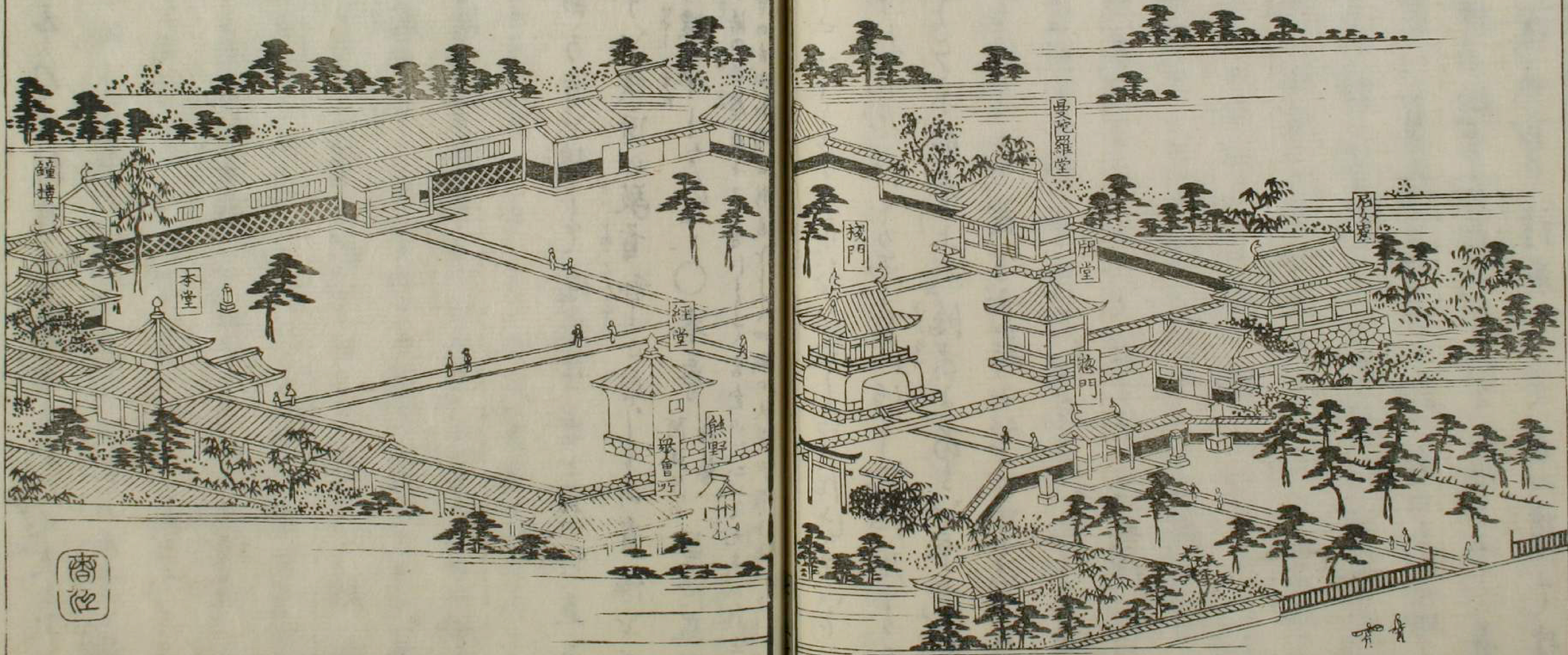
實通上人三十
三回忌に
法意に

前権中納言持豊

吉水の清き
ながれを
むすびけ
ふるひ
とゞむす
法の水そ
あるし

其峯

高嶺まれ
寮して
おもり
みをく
ね


曼陀羅堂
牌堂
楼門
惣門
鐘樓
本堂
經堂
熊野
衆會所

制に越えりとすなれども性自身と罪悪生死の凡夫として下し
く儞に佛説と仰信しまた我にいふぞとかつ稱名正業と嫡
てぐんやしかく意を用ひて志も戒律を堅持しつゝ徒にたゞその
自己の意楽らく家意に安逸して稱名勇進に便なるのみに
あらば僧宝軌範ありて法久しく住し正化も久しく絶ゆるすなら
らむ事が徴志ちゝにありと答られたりかくて師ゆゑく律院
開創のことを國廳に達し且本山にも力請せられぬ凡そ國廳
にゆ申せらるゝ事七十二ヶ度本山に往返せらるゝ事三十六廻享
保十八年にいたり元文元年に至るまで諸れ労苦を經らるやう
やく宿望をとげ西方寺を轉じて圓成律寺と名づけ兼與
山と改めらる師すと武府の敬首和上に啓しその肖像を迎
へて律院開祖の標準とせられしとぞ○本尊 阿弥陀の座像 曼陀羅堂
（○大曼陀羅ハ往昔華洛の無塵居士灵夢によりて岩倉山において九色の彩土と感得ありし小洛北報恩寺の古澗和尚甚妙具として四幅の大曼陀羅と爲せしが）

尾津島

（今此堂図ハ其を随一なり当院に係き因縁ありて勢州山田の清雲院より讓りとゞけられて当院に安置す此委しきことは行業記及び義山人の述作記等に出たりこゝに省きぬ此上人の事跡ハ海西郡大成村の部に委しく出せり）

大井神社

（大井村にあり本國帳に正四位下大井天神とあり國集説に穂保庄有大井村明神祠蓋大与天文字誤者歟とあり）

津嶋里

古名を嶌浪里といふよし諸書に見えたり今ハ津嶋村といふ尾西第一の大邑にして繁榮の町並五十餘街商家農工軒を並べ萬わ一として足らざる事なくことに此所ハ佐屋路伊勢路への毎行日毎に絶ることなければ諸國の旅客多くこゝにつどひて殷昌大なる所謂実に一都會ともいふべし東鑑文治四年二月二日の條に修理大夫家尾張國津島社板垣冠者不辨所當之由事とあり甚外この地名とのせるもの頗る多かれど筆繁ければ爰に略せり

津嶋渡

いまハ伊勢より当所に渡る船路にて藤浪等に尾張とあり名所方角抄に伊勢より尾張へ行ハ桑名より水上津島の渡りといふ所あり名所之中津島より下津の宮へ上りて熱田へ行也東海道なり津島より下津の宮へ四里之下津より熱田へ五里也またはじ甚目寺附網か津島より萱津の事と續く長太村に上り伊勢の洲原甲波河泉也と號し號之長太村ハ桑名と四日市の間にありといふ此の津の湊より比長太に至るの航路と津島のこなたといふより京より東へ下るには長太村よりわたし又此市驛島にかり萱津に着し號見とも津島の渡りとして伊勢名所拾遺集に泉也とハ尾張の津島より京へのぼるその舟にのり長太村へわたりそれより甲斐川とて号引泉也とて津島これ本道へ出ることんとあり

夫木抄

冬の日ハいりまへまさる舟人の津島の渡り風もさむけし　中務卿親王

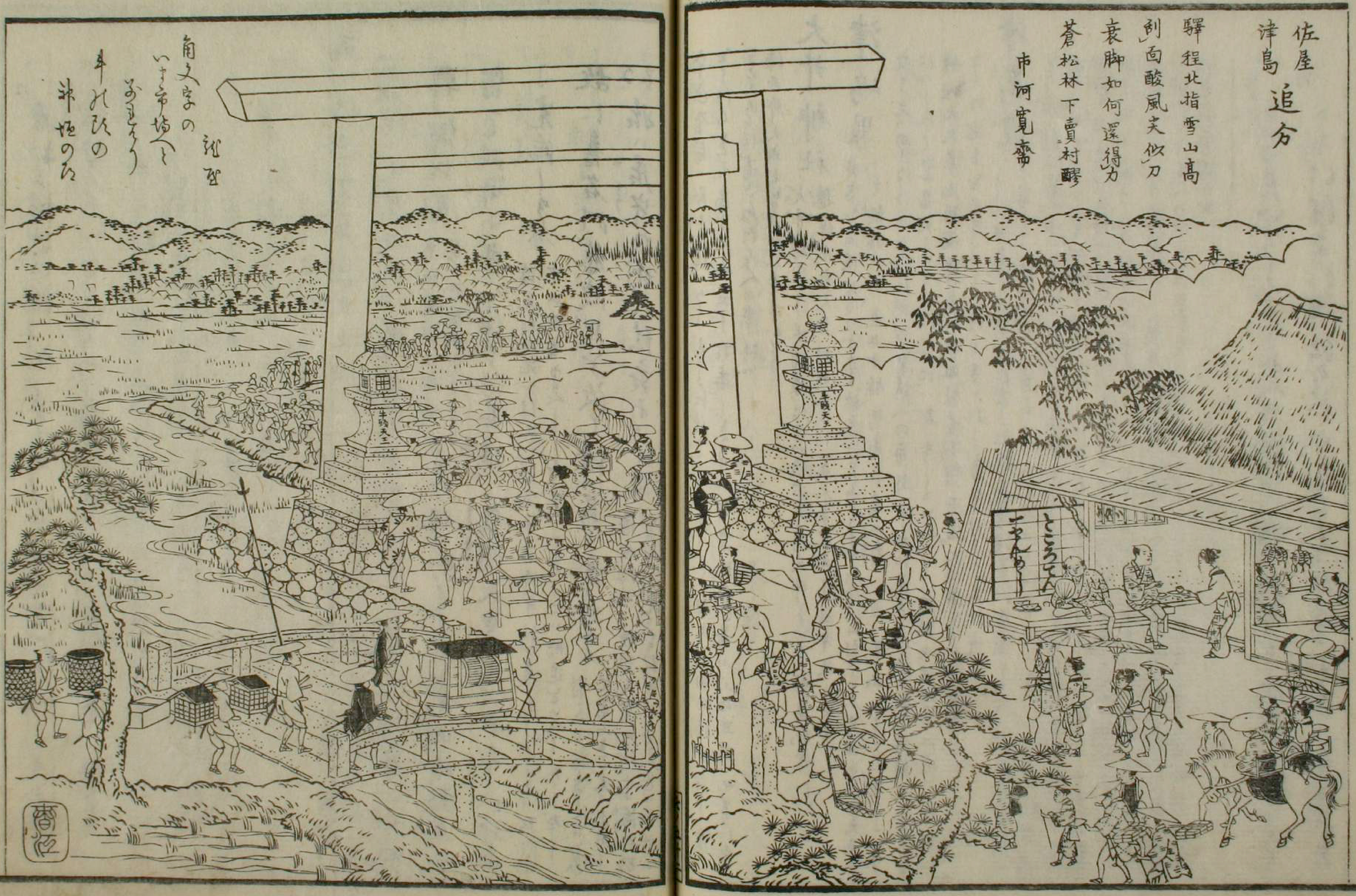
同

こゝをけ津島の渡り浴わしいくまちるらん舟ゆるまゝ　従二位行家卿

佐屋
津島 追分

驛程北指雪山高
剣面酸風尖似刀
衰脚如何還得力
蒼松林下賣村醪

市河寛斎


牛頭天王
牛頭天王
ところてん
一ぜんめし

角文字の
いまや境へと
おもひより
牛れ卯の
非姫のみ

訒亞

漕わたる津島の渡りかすめどもすゑは雪の高松　藤原基俊

（名寄）伊勢人はひかこともしらつ津の甲斐川ふかは宗祇の原　鴨長明

（夫木集）津島なる梓しるしは甲斐川ふかて宇治の原　西行法師

（名所方角抄）七日市猪を立て津島の渡しと云所にて舟にてわたれハあめの方に森まさとさらりて侍るゐ路も立るれとも若のうさ木に浮ハかくまとしつれうき身ハさりく数へしと越も梓の宗社にかゝられ

きしてあとみすゝふられ梓みられぬ浮津ハぬらしつ

さらうもうとは隙津の西まうつる　ぬゑえ

正一位津島牛頭天王社

（因村向津小法庭木國帳に正一位津島牛頭天王と見え元亀二年書写の本府宮本に正一位上と載すり）

當社ハ人皇七代　孝靈天皇四十五年　素戔鳴尊の和魂韓郷の島（書紀集解ニ韓郷の島ハ新羅国をいふなり）より帰りまして先西海對馬に留り此所に年を経給ひ其後　欽明天皇元己未年此神當国に光臨し給ふ（或説に社記を引て嵯峨帝の御宇社を建られ志とも弘仁年中の造営なるべしと云せりさとどこハ修造とのべるなるべし對馬とは異して古より用ゐきたる名なりし）故に舊名の藤波里を改て津島と号せり　然始ハ居守の地に鎮座ありしが（浪合記に欽明天皇の御宇海部郡中島に来ると記せしとあれとも拠柳竹に）白幣あり神託に我ハ素盞嗚尊なり此処に生して日本の惣鎮守となるべしと此地にちく社を建て崇奉る始とく柳竹に現じて鎮座ましし所と居守とも号るべし　村上天皇の天暦二戊申年　勅使ありて柏表の地に社を建られ　後村上院の建徳元庚戌年正月正一位の神階を授られ日本總社（素尊ハ則皇國の本主なり故に日本總社と崇られしなり）と称し奉る

又　亀山院の弘和元辛酉年の冬　勅を奉じて大橋三河守定省社を造進せり（社傳諸説多し今参考して略抄して爰に挙く）　然ありしより以来弥増の神威日々に著く永禄天正の頃織田信長公殊に當社を尊信ありて神領若干を附し宮殿を造営ありしより本社末社及び神門銅瓦に到るまで丹塗にて美を つくし荘麗なる年月を経たり（今天王社の神器に瓜の紋を付るハ其時當社よりゆるされしと云ぞ）元来尊神ハ文武兼備の始祖神にして其験多き中に疫癘を除き瘟疹をまぬかるゝ事普く世に知る所なれば其神徳を仰ぎ遠近のものより寒暑といはず渡来[illegible]

老稚参詣人常に絶ることなし　○**本社**（素戔烏尊と申奉る是なり神主家の説には今内陣）に十七座まします則素戔烏尊をはじめ大己貴命左に八王子右に七名の神いませりとてとりどりなど考ふれバおそらくハ式の神名帳にのせらるゝ國玉神社ならんか此神と一座と唱へ來しハ古き事にあらざるよし去ればむかしの神名ハ失て中世已後今のごとくとなへ來しにや　國玉神社ならんといへる説も暗推の論なれバ怪なる説といはんかし

瑞籬　祭供殿　拜殿　御供所　樓門　南門　神厩　文庫

繪馬所　神庫　篝臺（仁寿の年号あり）　鳥居　御井館　手水館

等あり

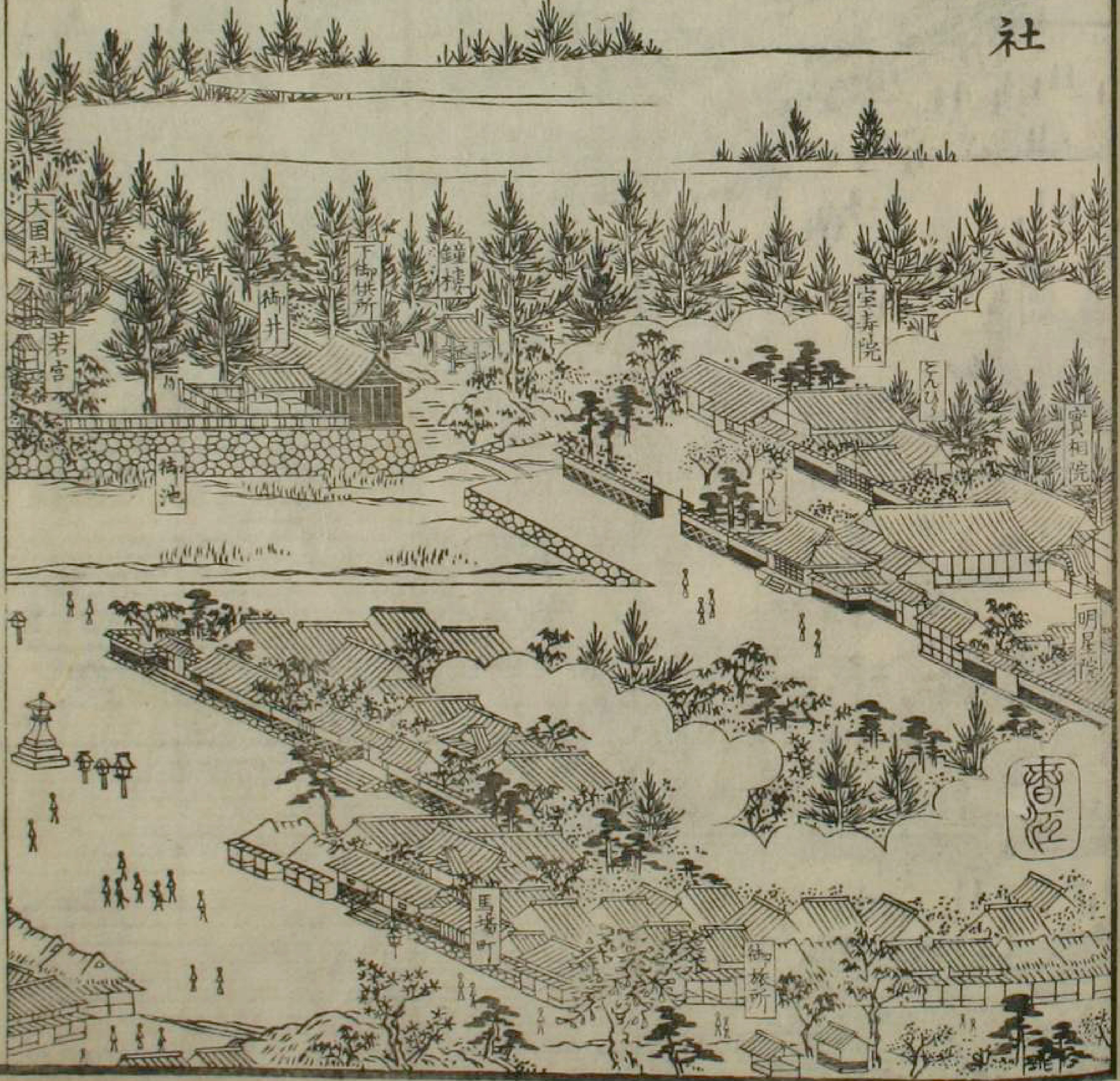
末社　**居守社**（本社の南一丁にあり祭神三座素戔烏尊の幸魂左ハ疫神右ハ大日霎貴命の幸魂なり天王始て來臨したまふときこの神社どころはの）湊の森に寄せまつるに蘇民が裔孫なりといへる老女靈夢の託によりて森の中に居まつれバ里民崇拝して森に居まつりといひける故今社号とするよし（社傍に[illegible]あり）

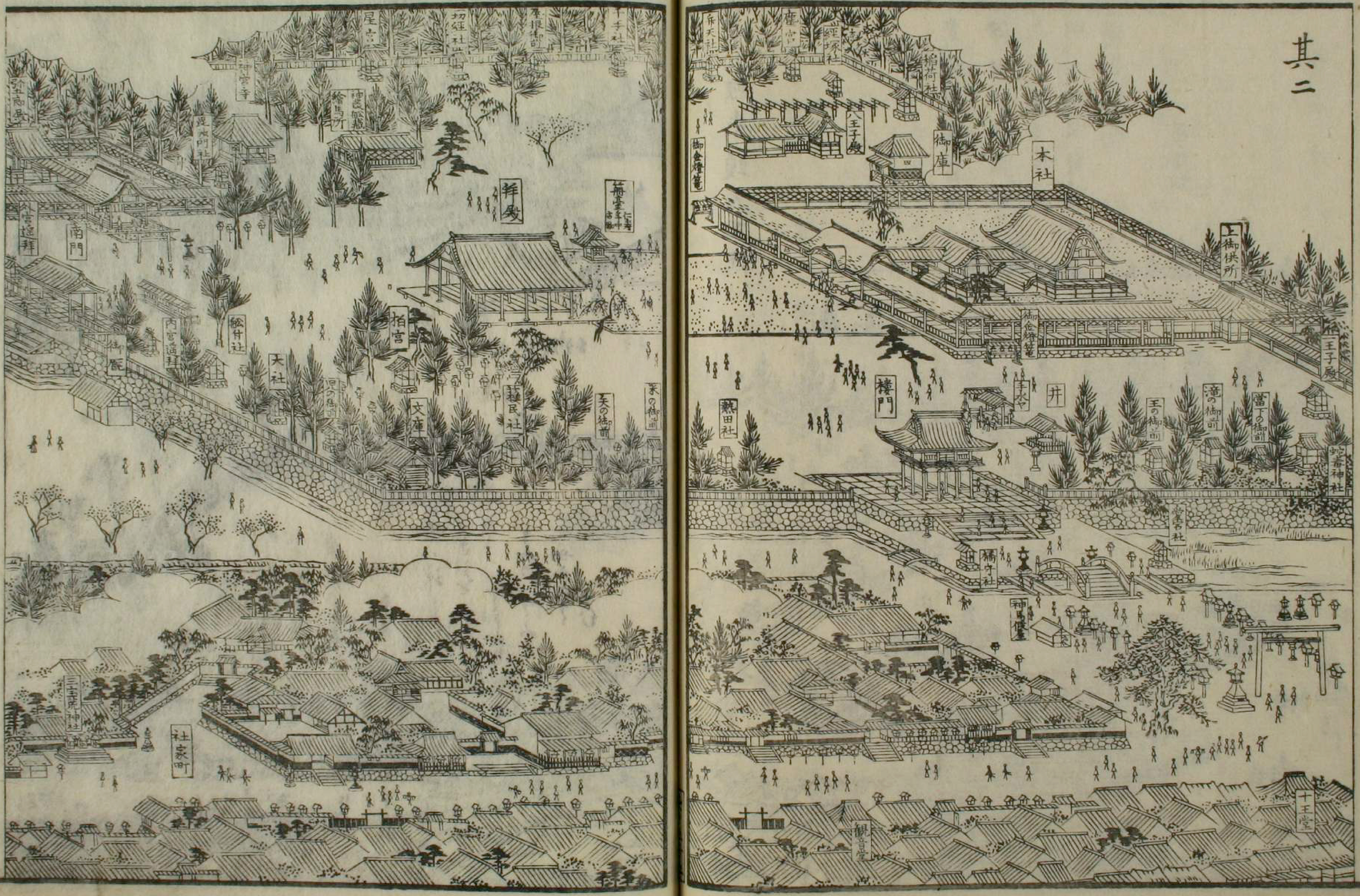
柏宮（本社の南にあり祭神素戔烏尊の奇魂なり天暦二年神託ありて居守の地より爰にうつし社のうしろに古柏樹一株あり故に社号とせり）　**一王子社**（本社の東にありて奇稲田姫命を祀る故にうつしての御名と称す）　**八王子社**（本社の西にあり五男三女の神をまつる）　**大國社**（本社の東にあり大國靈神を祀る）　**若宮御前社**（同所にあり事代主命をまつる）　**蛇毒神社**（同所にあり八岐大蛇の靈をまつる）　**當下御前社**（同所にあり五十猛神を祀る）　**滝御前社**（同所にあり弥豆麻岐神と申る）　**王御前社**（同所にあり秋比咩神を祀る）　**熱田社**（本社の東南にあり日本武尊と申る）　**米御前社**（同所にあり倉稲魂神を祀る）

津島牛頭天王社

朱殿高臨舊海
津祥雲千載瑞
光新萬里方知
神化及階前不
斷各州人

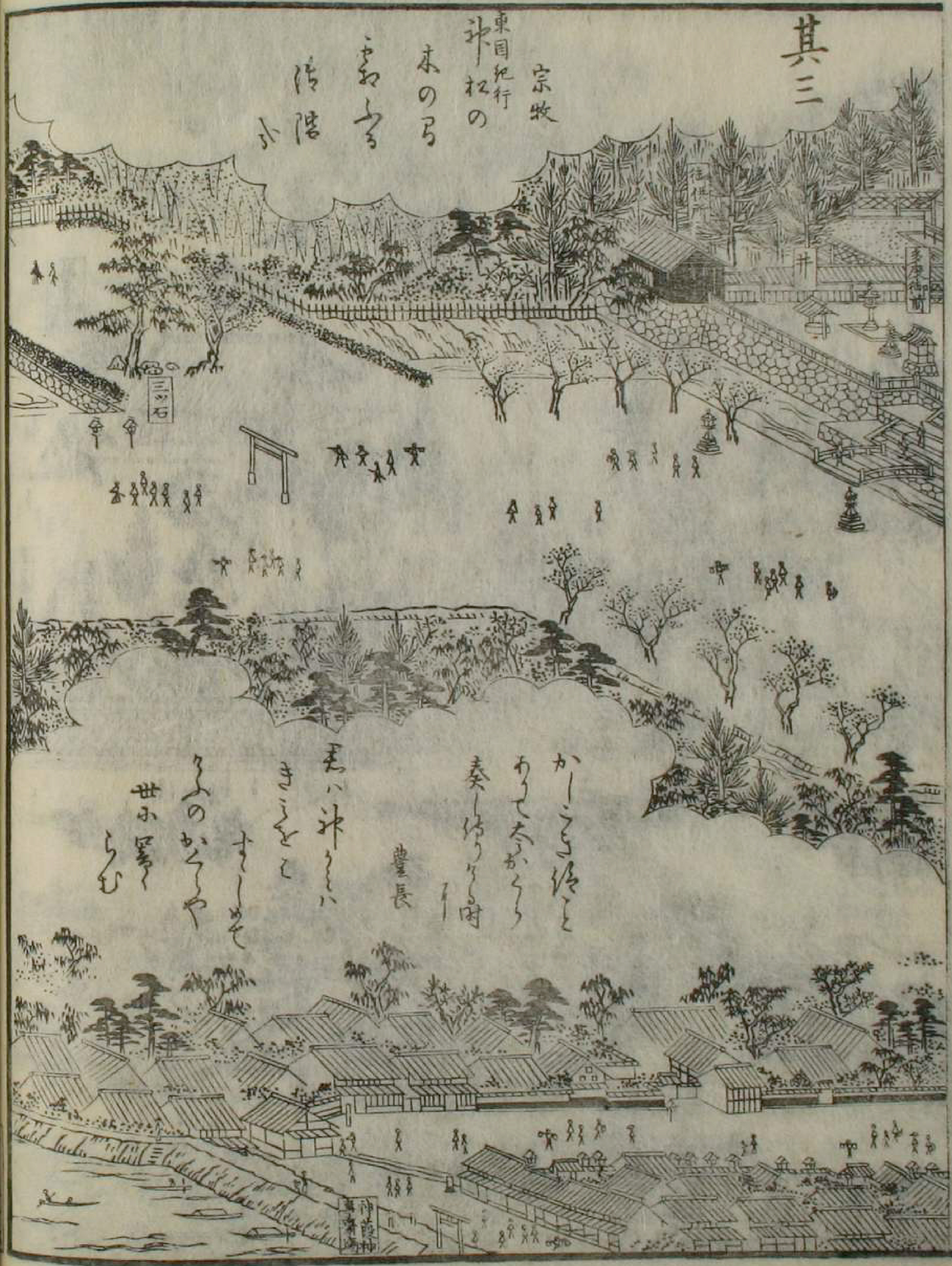
丹羽弘




其二
弁天社
龍宮
經塚社
稲荷社
八王子殿
御金燈籠
御庫
本社
上御供所
御金燈籠
王子殿
樓門
熱田社
手水や
井
王の御前
滝の御前
當下の御前
蛇毒神社
愛宕社
楠木社
神馬屋
観音堂
十王堂
千手社
座根御前
切徑社
星宮
神宮寺
神楽殿 絵馬所
清雪門社
弥五郎殿
拝殿
箭蔵
外宮遥拝
南門
内宮遥拝
御厩
鈴杵社
大社
別宮
文庫
日の御前
龍民社
天の御前
米の御前
三宝荒神社
社家町

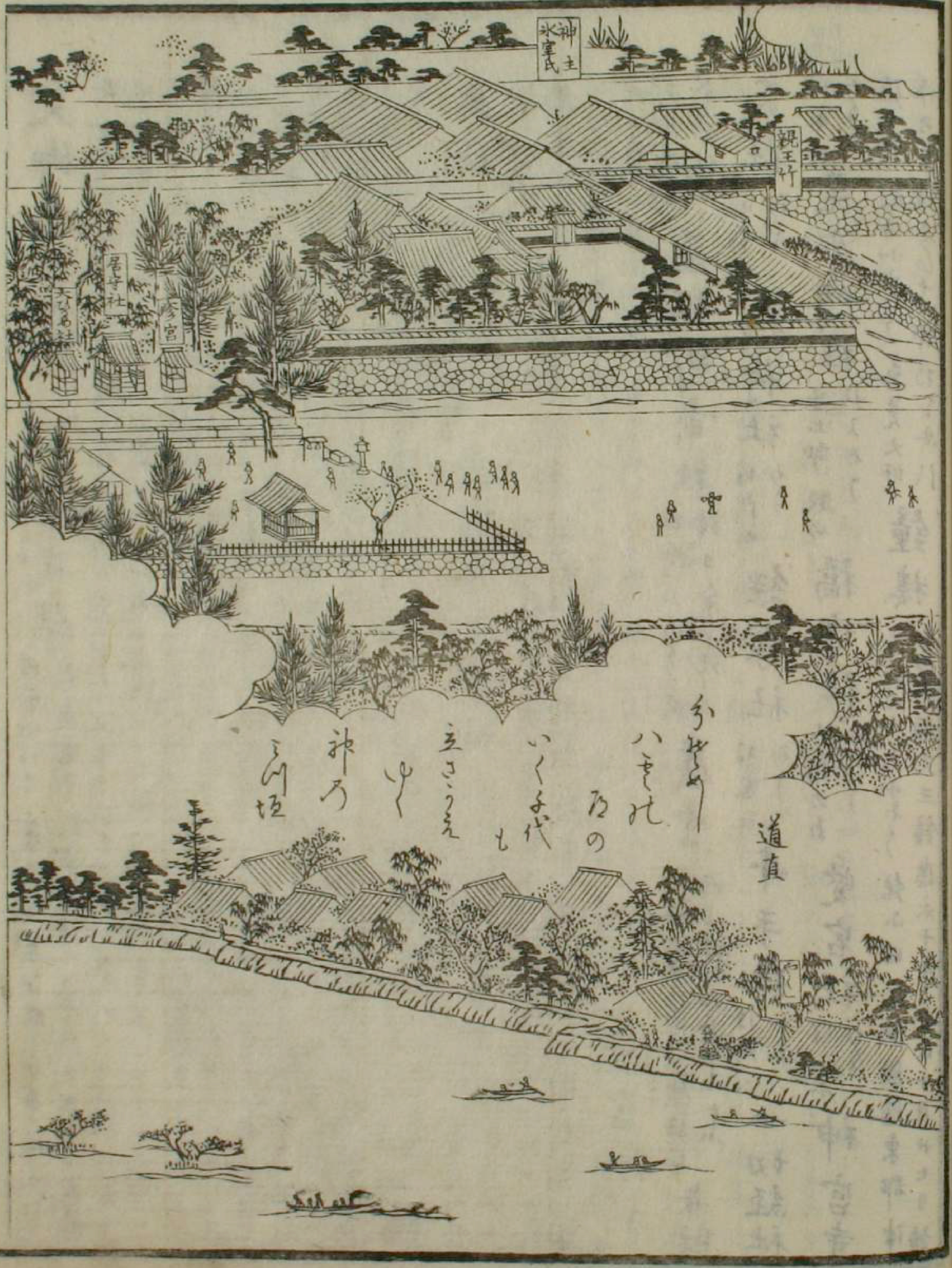
其三

宗牧
東国紀行
神松の
木の間
あまる
清陰
に



かしこき筋を
わけて大かくら
奏し給ひける時
豊長
昔ハ神さへ
きこえとし
すゝめそ
そのかくらや
世に聞くらむ

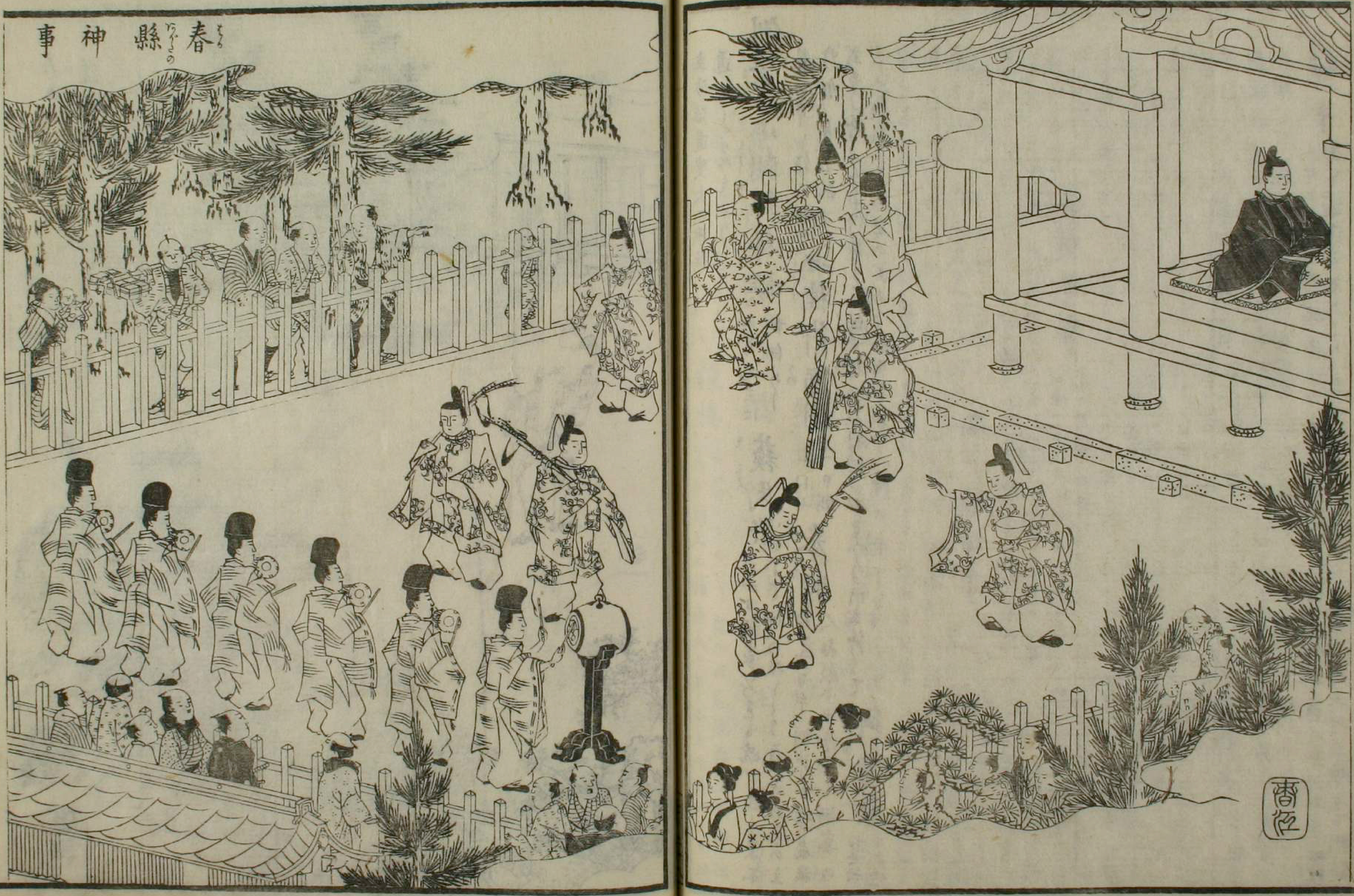
道真
かみかき
ハまれ
乃の
いくよ代
も
立さかえ
ゆく
神乃
み垣



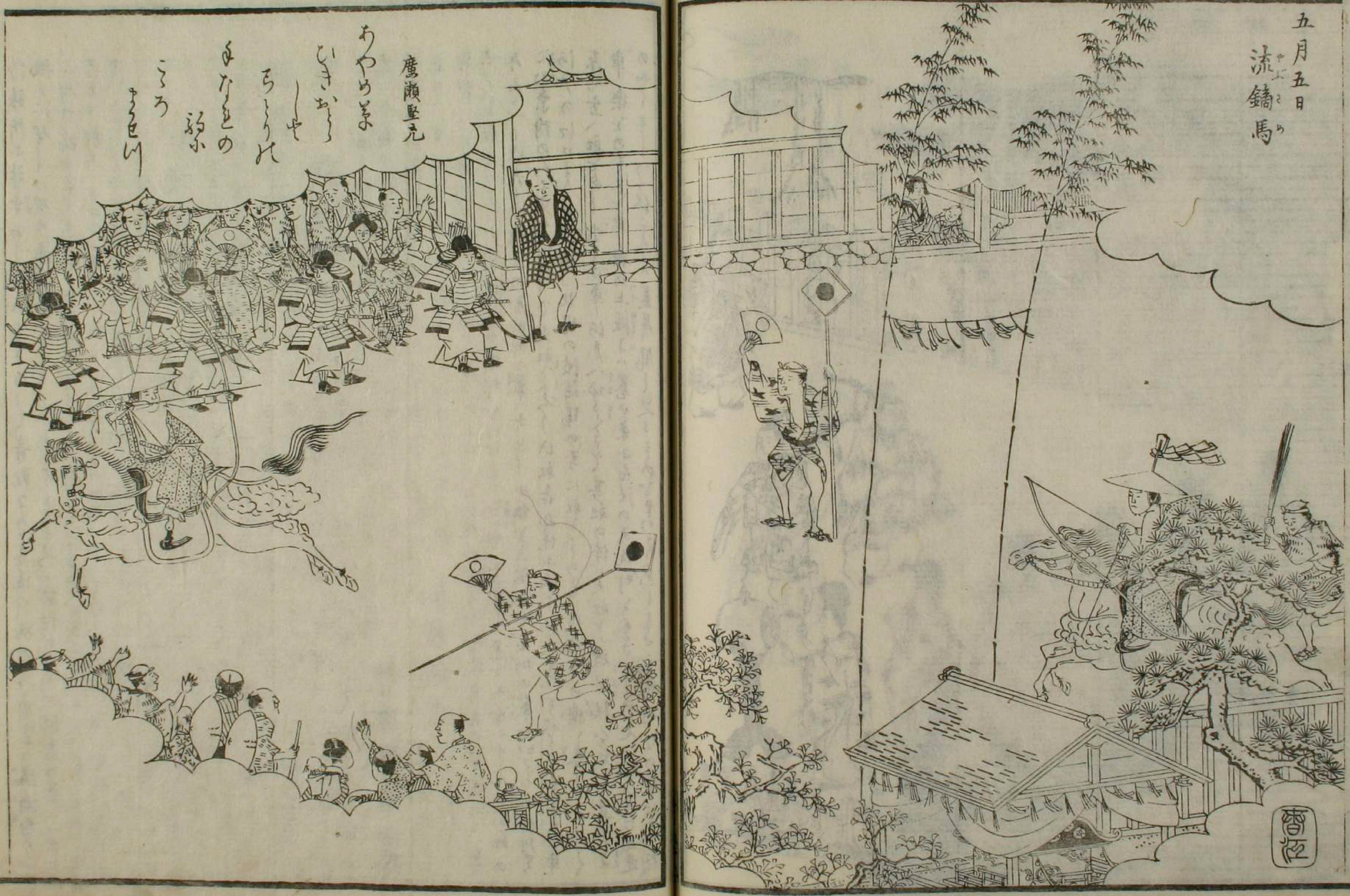
矢御前社（同所にあり　大歳神を祀る）**蘇民社**（同所にあり蘇民将来を祀る　公事根元に素盞烏尊これ童部として牛頭天王とも武塔天神とも申し　むかし武塔天神南海の女子をよばひにおはしけるに日くれて所の例に宿をかり給ふに彼所に蘇民将来巨旦将来といふ二人の者あり兄弟にてありしが兄ハ貧しく弟ハ富り家に天神宿を巨旦将来にかり給ふにゆるしまいらせず次兄の蘇民にかり給へば則かしまゐらす粟がらを座として粟の飯をまゐらせしに八年を経て武塔天神八はしらの御子を引具してかの兄の蘇民が家に到りたまひて一夜の宿をかしゝ事を報ぜんとて蘇民に茅の輪をつくらしめ其すべを教へらる　疫癘天下におこりて人民死する事数をしらず此時蘇民がうからのみのがれて後武塔天神我ハ速須佐雄神なりとのたまひ今よりは疫癘天下におこらん時ハ蘇民将来の子孫なりといひて茅の輪をかけバ此災難をのがれんとのたまひけりとみえたり）**児御前社**（同所にあり　若王神を祀る）**大社御前社**（同所にあり大山咋神を祀る）**船附御前社**（同所にあり庭高津日神を祀る）**内宮外宮遥拝**（南門の内東西にあり）**多度社**（南門の内西の方にあり天目一箇神を祀る）**弥五郎殿社**（本社の南西の方にあり武内宿祢を祀る浪合記に左太彦宮八ヶ所の弥五郎殿是を武内大臣と云平定経と二説之（定経北畠之）後村上院正平元年七月十三日着到して堀田弥五郎正泰これを祀る時の人これを崇まうでて世に弥五郎殿とよぶよしみえたり）**星宮**（本社の西南にあり天忍穂耳命を祀る）**屋根御前社**（同所にあり庭津日命を祀る）**塵宮**（本社の西にあり聖神と祀る俗に山神と云ふ）**弁財天社**（同所にあり）**稲荷社**（同所にあり）**経塚社**（同所にあり）**千手社**（同所にあり）**一切経社**（同所にあり）**毘沙門社**（弥五郎殿の北にあり）**橋守社**（石橋の南にあり）**愛宕社**（同所にあり）**神宮寺**（弥五郎殿の北にあり慈覚大師作の薬師及び十二神将を安ず）**鐘楼**（本社の北東にあり　銘に曰尾張國海東郡津嶋牛頭天王鐘應永十年癸未十月廿七日願主沙弥道叟大工沙弥道忍とみえたり）

例祭

小朝拝神饌（正月元三に執行ある）**蘇民祭**（同四日社家[illegible]まで柿の枝をとりて蘇民将来の守符の串を作る俗に焼餅祭と称す）**七種御粥調進**（同七日朝）**奉射**（同十六日午刻神主神官社人拝殿に出座して酒宴の式あり終りて南門におゐて的を射るなり射終て歳徳まゐり此式終りてまた拝殿にて酒宴の式あり此時社家一人鯉の庖丁をつとむ）**御贄祭**（同廿六日中嶋郡三宅村天王の神主神供として鯉一尾当社へ献ずるに彼神主里童二人を美しく装ひ児と称し神主も衣冠にて供人をともなひ児も駕籠にて行列し神主まもりて神前を奏し神拝さゝぐる式あり是を俗に一時上臈のかはり小神子といへり）**御戸開神事**（同晦日（小ノ月ハ廿九日）の夜[illegible]扉を開き[illegible]神正体を拝する[illegible]世にかくれたる神祭にして内陣にある幣帛を改め替納まゐらす社壇にハ[illegible]まゐり掛る孫社家出仕の左とて[illegible]せる大松明の大造なるをハ一束と大勢にて持運ぶ社の事にして実に壮観なり）**春縣神事**（同中ノ午の日也祈年祭にして拝殿の前にて此式あり神主ハ拝殿へ出座して当大夫ハさくらを採りて神主長但[illegible]る大夫ハ五穀の種をまき散しあげてアアコヨと稲の株をまうよとうたふ神官ハ各木造りの鍬を持て田をかへす真似をうたへする三度此式終りて右馬大夫先に立牛と名付し[illegible]る者牛（大夫の）首に牛ひっといへる大なる曲物をのせて路より乙若大夫是をおひて次に右る大夫先に立て路よりすゝめといへる古き飾を持ち又是にて終りしもぐさと云ふあと行司大夫おてふる式あり）**大般若転読**（二月十五日社僧実相院これをつとむ則涅槃会と名づくる）**闘雞神事**（三月三日早朝蓬餅供御調進午刻神主神子社僧神前においてまんくの式あり終りて広前の白洲にて雞合をなす是ハ良王君当所へ入せ給ひし頃より始るといへり）**神幸**（五月五日粽の御供等あり午刻に惣社家出仕社僧神輿の前において伽陀文を誦読すそれより東門へ神輿を移し奉り天王川の堤なる[illegible]）



春（はる）縣（あがたの）神事



五月五日
流鏑馬（やぶさめ）

廣瀬皇元

あやめ草
いきおふ
しや
ちらされ
またとの
綠ふ
ころ
まる川

香江

御旅所に神輿あり行粧（ぎやうさう）嚴重にして奇観なり其後御旅所の前にて流鏑馬（やぶさめ）あり据るにむかしハ児の流鏑馬にてありしとや千年をこえる叔松云の詞に津島の祭ハ一丁に三所の的を立てうつくしき児達がひくくと射て見る事余のきらいさまりの事なりしといふ言あり松云ハ元より礼に足らぬものなれども甚時代の事を作りしものなれバ足利時代を言ハ児をのせしとや又伴蒿蹊が津島祭の記に彼松云の言葉をとりて近年ハ祭のさま衰へかゝり古きつらへと思ひしあらぬべしといひしハ此五月の祭を記して六月の祭と思ひし大なるあやま（アラウカ）

船祭手斧始（ておのはじめ）

六月朔日より見るらん山車車楽（だんじり）に或ハ黒檀組木（くみき）あるところ江口の川湊（俗に車河戸といふ）に舁くるすし一座に持る事くやしられバ毎年此日より修補となせり

船祭綱打（つなうち）

同十日船祭のかざり立と仕組かけそこゝる孫と坊事く笛太鼓の囃子あるとして綴ハへり

神葭苅神事（みよしかりしんじ）

同十一日社家船に乗りて前ヶ須（まへがす）及び松名（まつな）迄至り葭を苅祭式あり神秘なれバ夜に曉せり

神葭揃神事（みよしそろひしんじ）

同十二日

車楽船割（だんじりふなわり）

同夜名古屋鳴海熱田今村塒に戸田佐屋等より来る船と祭にあつまる町の人々漕取りて車楽を早く来るとろうく勝しれまわるをひいて興ある奇観なり川中にハ立臼と浮べ大篝を焼く水面を照せるさうしきことなし

神輿飾并山揚

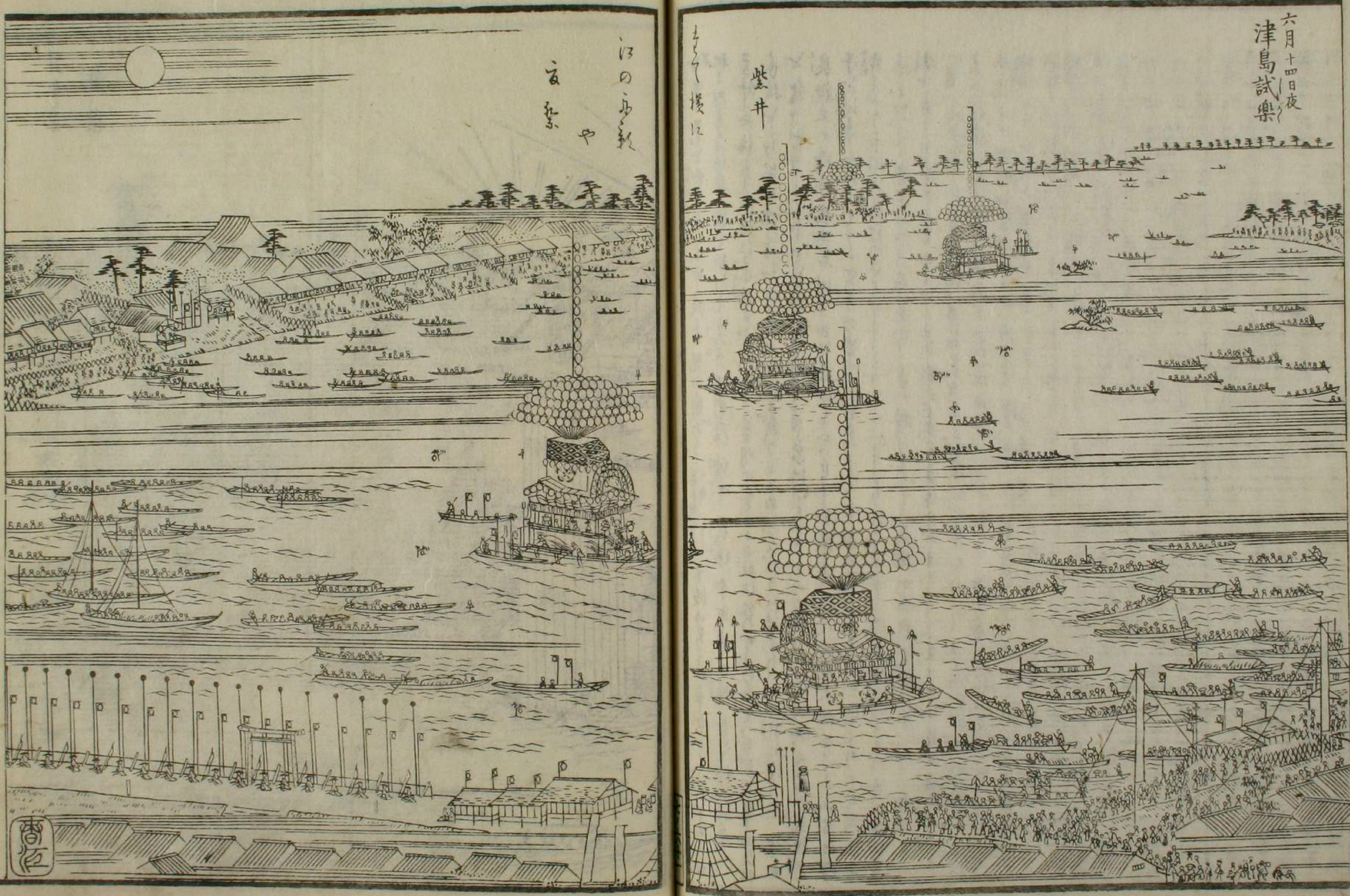
同十三日船祭とて町々の児此日若天王へ参詣して当日の安全をいのる又山車を仕組まゝるなり

船祭試楽

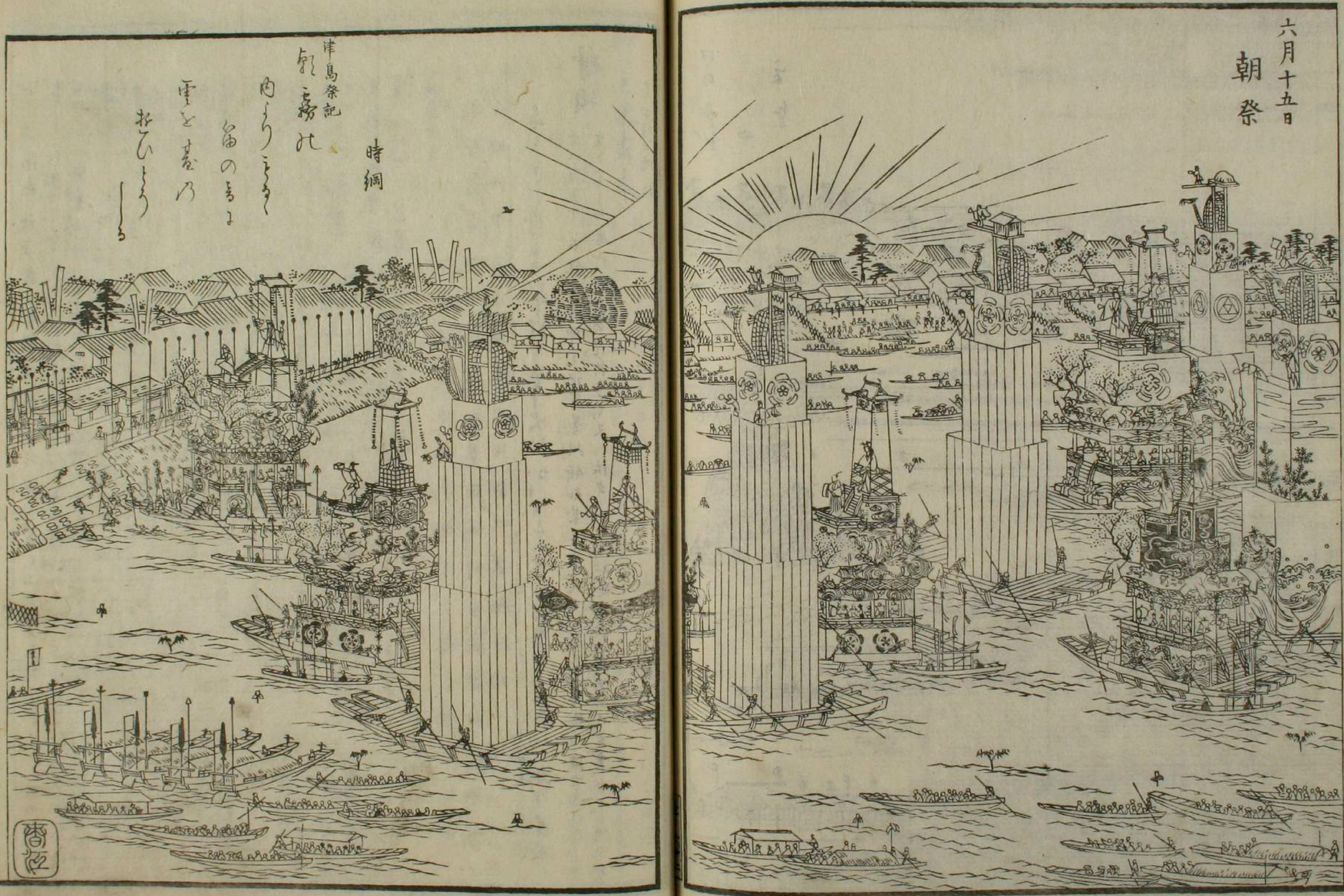
同十四日神前にての祭式ハなく前夜に神供調進あるのミなりさて天王川の北の堤に假屋をかまへ官吏（くわんり）の警固（けいご）あり暮六ツ比に至れバまつ小船を浮べて挑灯をつけたる藁苞を持来り見とゝ両面にさして祭船の両方へ水夫より数多の屋形船に幕打廻し小幟を立槍長刀をかざりて行列なりこれハ祭附の人々の乗込にして児船よりくより此船君到堤に添てひろく流れより祭の船ハ車河戸の江口より漕出し北堤の波濤場の前に船をとゝめて津島笛の楽を奏し鼓つく東の方へ船を寄し次に車河戸へ漕出して其船の体ハ大船を二艘つなぎて其上に車楽とのをなし車楽の上段にハ巻藁を建て白張の大挑灯をまて竿の先にむかひて馬連（ばれん）のかたくかしつらねまで下ハ蓑屏風をもてそのまわりを包みたる連挑灯の中に真柱と立り是を妙とよぶ中段にハ児の楽あり（笛太鼓の囃子く鉦ハ鳴し）下段の方ハ車屋二人袴を着し床机よりかゝまり此車楽をわしとするハ米の座 堤下 筏場（いかだば） 今市場 下構（しもがまへ）等也此神事ハ其昔西海より此地に来格（きかく）ありしに葦刈の者ども小船に篝（かゞり）をとつして竿の先に手拭をかけ笛を吹きる初年の遊び楽まゐらするを喜びたまひしより其形を作りて神慮を慰めまゐらせしより起る時保が津島祭記に見えたり一説にハ後醍醐天皇の皇孫尹良（よし）親王の御子良王君（りやうわうきみ）津島に忍びおハせしを佐屋の住人大尻大隅守といふ者彼御子を討奉らんとする官方の軍これをさゝへて今宵の船祭に事よせたばかりて大隅守を誘しよせ大尻討つさゝへりとひしより初りしと浪合記に見えたれども船祭事多しといへども當家のめでたき族葉正しきハ稀なるべし先挑灯の数ハ梢の十二張ハ一年の月の数をあらはし連の三百六十張ハ日の数に象（かたど）りて屋体の四方につらねたる三十箇の縮緬張も一月の日の数なりと年中行事故実考に凡祭礼の車と船とて浅さゝるのハ津島にうつさるゝもるて津島にかぎまして凡天下第一の壮観と志るし諸國年中行事寛永十八年の江口の印本徳元が俳諧初学抄にまで載せて他に比るもかくもなき大祭なり

同朝祭

翌十五日卯上刻祭の船若車河戸の江口においてて市江の車楽の来るを待ちて此市江ハ前に志るせる葦刈の者がありし所なるゆゑに市江の車楽と必一に渡す古例なり車の飾ハ大概津島の車楽と同じけれども多くの座実あって飾あり又ハ幕たる布代の古物あり（委しくハ海西郡西條村赤星名神の条に見えたり）又此車にハ帛緒（きぬを）の附たる鉾をおさる者十人並びて船の波濤場に動る此我先と水中へ飛込者に上りて天王へ参詣し其後社家（河村牛太夫）へ到る古例あり又小布江の車楽波濤場に来る時津島の車楽山車ともに漕帰れ車楽の飾りハ我先に更子が芸習ひて上段にハ宮殿ありの屋体のうちに能人形をもしへ中段の屋形のうちに小袖とかざきたるが唐織大和錦もあり皆例に従りこれハ小袖幕とて古風のまゝ也屋体のうへ又ハ梅の作り花をかざり後の方にハ若松とをかれあれ此水引下段の大幕などいづれも見事を尽くして壮観いふ斗なし又児の若き囃子あるがハ宵祭にかゝれるあり車楽あつく波濤場に着ていづれも楽を奏し畢ぬバ車屋及び児ともも拝する次天王へ参詣して拝殿まで来たり其式すべて宵祭供殿にて神楽と児と酒宴の式あり夫より舟を下向してそのまゝく以て列し車共に河戸へ漕居すへきて大山車ハ高さ十三間して上段にハ人形を飾るあつく七尺余あり人形ハ鉄炮


六月十四日夜 津島試楽

もとて 櫻江
紫井
江の面の[illegible]
や
夜祭



六月十五日

朝祭

津島祭記

時綱

朝霧れ
内よりこえて
笛の音に
雲と巻乃
おひよりしる

すり 湯花 神子舞 音羽 戸隠 稲荷 押く等ハ山の数ハ五輌なれども人形の数ハ甚
多し これ年〻くりかへしておの〳〵思ふ〳〵すべて笛太鼓鉦の音に合せてからくりを専とす
又山どもに奥手蛇形（じやぎやう）の作り物ありとかゝる二段目の前の方より男女の人形あり是ハ手摩乳足
摩乳なり 蛇形ハ八岐の大蛇なり 山車 車楽の十二輌（むかしハ年によりて山車とのミいひ中興後車楽を出すといへり）
ハ是一年の月の数またハ十二の末社に象どるとも或ハ薬師の十二神に象るともいへり
おのおの渡すの節ハ常陸の鹿島の神社へ渡とまいらせなんとて此日にこの家
の日ハ川水少なり大に渡り是を車楽式ハかく次になくり

神葭流神事

同十五日夜これを修す 前に
甚暑寒せし所そて是と島る事之れ式の如く神秘なれバ諸人の拝することを許さず社家と
ともも家々にいるハ絶て出ることなし されバ此夜津島中家ごとに門戸を閉く音もなく静り
居るなりけり もし吟味に出る者ありて門戸を突る家あれバ
白瓜を投入ることに必ずそを家凶事ありとて人々深く慎みて是を恐るとぞ

九月九日 **供御調進**

秋縣祭

十一月中ノ丑日これを執行す 新嘗祭にして県祭ともいふ 大国小異なれバ是に異なり

煤拂

十二月廿五日 祠官神主て神主家へ参り幣を作りて神主門前にこれを
建（祝詞神楽）竈拂の神楽を奏して退出す

陽園詩草　新川

両岸人家結ニ彩棚ヲ 長川映帯晩涼清シ 楼臺忽向ニ水中ニ出ツ 羅縠香従ニ水面ニ生ス 袖幕飄レテ風ニ何ゾ繋爛 燈毬得テ月ヲ自分明 往還多ハ是関東ノ客 短笛吹来テ暢ニ旅情ヲ

神主　氷室豊長

一とせの月日のかずれも火にかけてえてらんとやあらむ

神領

千二百九十三石余 其外神主祠官等れ領知甚多し 天文九年十二月織田弾正忠信秀ノの判
文をはじめ歴代武家の證状多く又仁治年中本社遷宮状の残編等の古書ありしが次々家
きとかうけてすべくこれを略す

神主氷室（ひむろ）氏

後醍醐天皇の皇孫尹良（ゆきよし）親王の御子正二位大納言良王君をさけて此所に
来り居住したまふ 其舎子良新（或ハ尹良親王の嫡子二男なりとも）神職となりたまふ 然までも
嗣子なきにより小田井大学助定常（大橋貞元が子）神主となりて其頃中将郎氷室村と領せしかバ
氏を氷室と称しけるとて連綿たり 浪合紀に永享七年十二月廿九日良王津島天王の神
主が家に渡御七名字の者共神楽を奏して吉例末代まで用ふべしとなり 同八年正月元旦
雑煮を良王に奉る 鬼かし伊勢路の素麺に汁物ハ尾張大根の膾切り菘ハ
小鯽の干物に大根の削りたるを入て
奉るとぞ 年々此流例となれるとぞ

神官

堀田氏 河村氏 真野氏 服部氏なり

神楽方

服部氏 林氏 平野氏 大矢部氏

氷室氏の

神子方

堀田氏 宇都宮氏 河田氏 服部氏 主膳の数家あるひは南朝
数家なり の遺臣又ハ本貴の地士にて皆由緒ある旧家なり

社僧

寶相院

本社の北東にあり 開基の年紀詳ならず 開山ハ定泉法印（建和元甲寅の住職なり） 本尊薬師如来 恵心作 ○ 霊宝 愛染明王 湛慶作
毘沙門天 運慶作 種子曼陀羅 興教大師筆 九會曼陀羅 弘法大師筆
其外数品これを略す 又信長公 信忠 信雄 其余諸家の證状数通あり

明星院

同所にあり
開基の年暦詳ならずといへども開山叡政ハ天長七年寂すと云 此院ハ其跡を
ふ尺なりハ其上創建なるべし ○本尊 薬師 定朝 安阿弥作
中興ハ○本尊 不動明王 智證大師作

寶壽院

同所にあり 開基の年紀詳ならず 文和二年僧真到
永正十二年快祝法印の中興し

観音坊

本社の西にあり 開基の年紀詳ならず 永正十二年 祝範法印の中興なり
こゝハ門前三興村にありて三興山廻向院観音坊といひしが慶長十三年祝範法印此地へ移し
社僧の列に加りしより衛上の通り ○ 本尊 不動明王 木仏 此臺座に銘あり其文ハ略 ○ 鎮守 白山社 境内にあり 慶長年中
に慶永六年巳丑正月日金剛佛師良祐と見えたり ○ 霊宝 薬師木仏 恵心僧都作 阿字
祝範法印謹識ありて 弘法大師筆なる 信秀 信
長公 信忠公の證状数通あり
社僧ハ四坊ともに牛玉山神宮寺と号し真言宗にして今府下大須真福寺末なり 社古ハ
坊ありしが中世より頽廃して今のごとくなれり

昨木齋

昨木續集

門真神殿發修營次第琢磨功既成白象列檣装氣色翠簾扁鏡仰鮮明及宵燭炬玉牆畔迎旦龍獻井水声清潔洗心前誓拜安全祈世致精誠道昌畏感八雲詠笛傳音知一曲名遙見境中林木聳遠来詣客不迷程

熊阪台洲

西遊紀行別録

張陽十里大江南遙見朱樓照碧潭百丈長橋徙北度千秋靈跡向西探牛頭廟貌知何守鶴背仙人未易談但道神威驅厲鬼先王祀典有誰諳

僧瑞華

禪餘偶詠 大古

神陵水上浮要津誰復繋龍舟南朝帝子移軍日北地公孫躍馬秋萬里風雲遺虎口千年社稷祭牛頭于今河畔張燈處猶想英魂月下遊

まもるてふ八雲の道のしるへせよいのちもしらぬそのゝ神　小沢蘆菴

つまこめしその神ならてその葉の世々に絶せぬおしへ八重垣　萩原宗固

八重垣の神代人のよみそめていやさかえゆくことの葉の道　本居大平

おさまれる治代のためしに云のこすそのみすゑいのる世ゝの八重垣　度會重養

新宮のあれましゝ日を聞かてや今もそのまゝの朱の玉垣　健男

津島八景 居森夜雨

あらゝかき所さくのゝけの跡さへ秋よめるおくさしゆかれたる哉　倚止水

彩色のあやかたまてめてもうち　寄川

随縁紀行

縁の橋添五郎殿を渡りける　亀翁

天王橋跡

天王川のありし頃橋詰丁の西に架せる板橋にして長六十八間巾三間也大橋とも云ふ宝暦九年卯の年天王川を埋して新田となせし時橋の跡に堤を築て町家立ならへり

宗長手記

津島へ立寄旅宿ハ平氏正覚院領主織田霜臺息九三郎礼とて来臨於我宿にて興行

堤行家路ハ志ける芦かうた

此所ありし堤を取流しす橋あり三町あまり替田の長橋より八ツ程まさるへしをちこちのまこ河落合きしの浦よりも見えし橋のむかうに人家数十余艘かさりて夜ハ法所灯りけれり添の鼓ふき笛鼓を放ちなとたへすして流灯りしとそ

宗長手記

名月ハはや一夜ふけるを中書宗牧とおなし入子息孝行の入道社にまいりして夜更りハ橋の上にして月をなかめて酔中に独吟

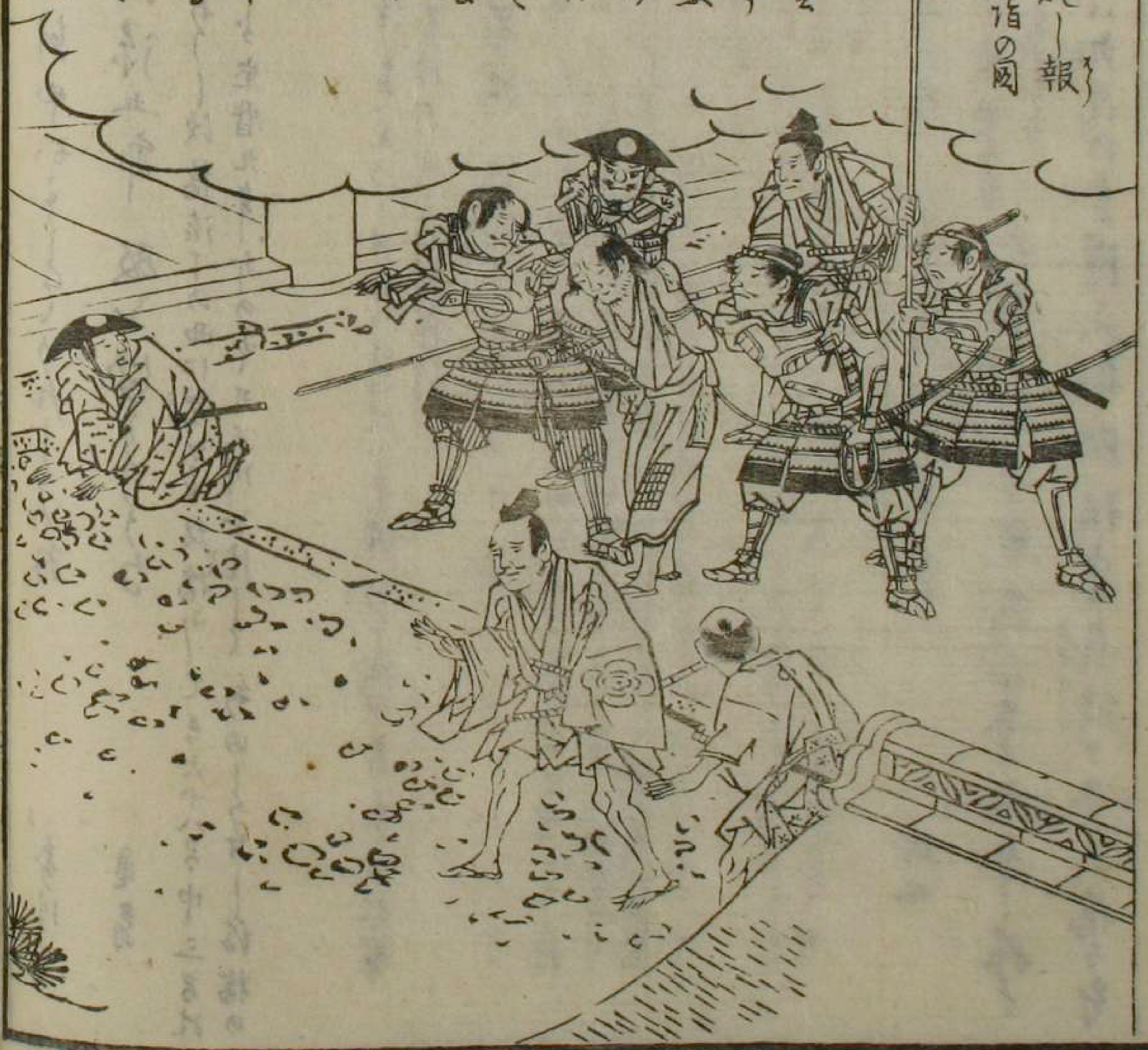
月とこそみやこさそなの今宵哉　紹巴

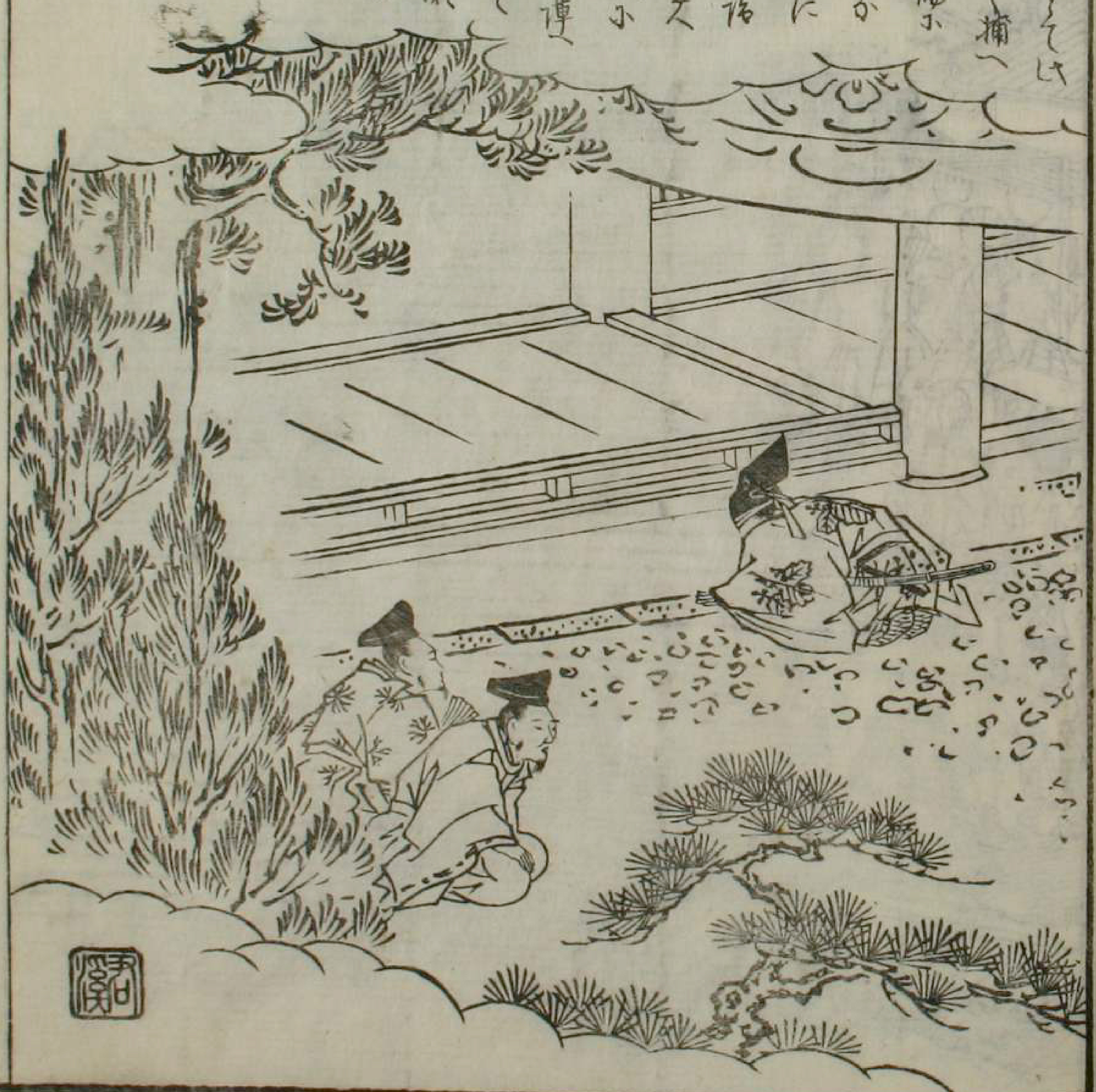
奴野城址

米の庄にあり今西方寺の境内となれり大橋三河守定高正慶元年始く築く所也定高ハ九代の裔護大橋肥後守貞能が子大橋を称

木下藤吉寃罪をのがれし報謝のため牛頭天王へ参詣の図

永禄六年の秋の末信長公西京流に到らんとて道すがら墨俣に陣を取りたまふに其夜福富平太郎が金の竜の面掛紛失しけるが誰彼はあらうへ疑ひかけて評議の日藤吉殿ときゝぬ斗りなりけれバ秀吉は大に怒りかの盗人を捕へて寃証をはらさんにハ志しとていそぎ洛へ攻り堀田孫七が肘を云身家へ立寄らんと忍びかゝみ果してくらんの面掛と質に出んとせし盗に来ると難なく捕へ寃罪の始りを晴らし牛頭天王の加護なりらんと其より直に天王の神宝前に詣て拝礼しもてなくとだ神宝の報賽に川せ西京流御陣帰りけるとぞ此委しくハ小瀬甫庵が太閤記に出づりぬ

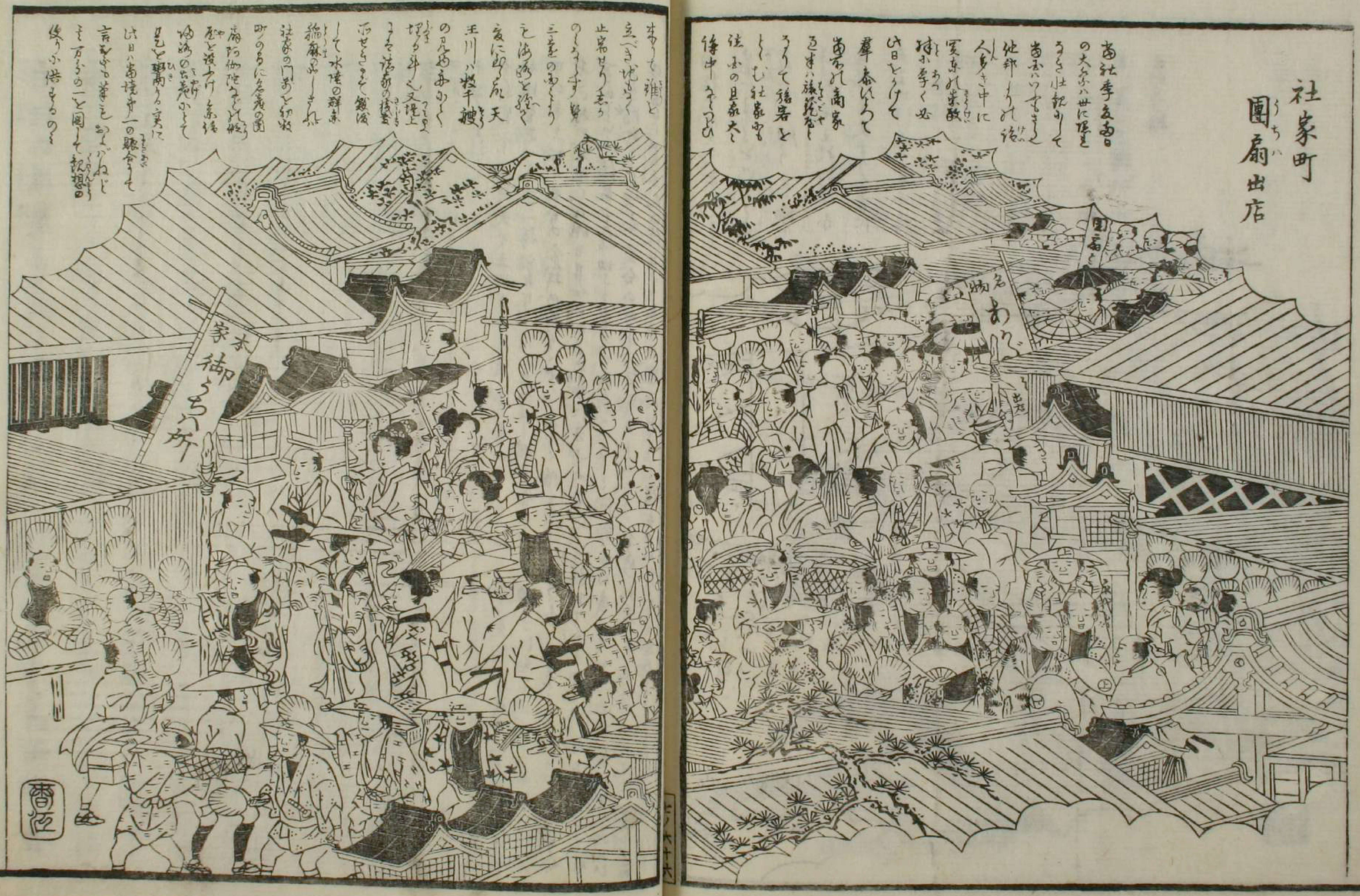




社家町
團扇(うちハ)出店

当社季夏晦日の大祭ハ世に隠もなき壮観にして当日ハいつもまさる他郷よりの詣人多き中に実京の業敵を持ふ事く此日をうけて群参によりて当所の商家茶店ハ旅籠屋ありて饗客をもてむ社家も往来の見物大と修中うちわひ

あまりて衢と立べき地もなく止宿せり夜ハのみならず紀三ヶの浦よりを海路を経て夜に乗る所天王川ハ数千艘の見物舟かく堺の湊に又陸上まで諸所の桟敷並せをきて銘酒して水陸の群集綿麻のふしきれ社家の門前を始町の内に名産の團扇阿伽陀うちわ屋を設け糸緒海路の出兼かとて見物と賑ふ実に此日ハ当境第一の賑会にて言葉にも筆にもおよばねども万分の一と圖して観想の便りに備ふるのみ


本家 御うちハ所
名物 あふ
團扇
香江

貞経の後裔にて代々尾張三河に潜居をこととし此城地は右大将頼朝公より貞能が隠退の所としてたまはりし所にして足利家天下を知りしのちといへども大橋氏の所知は相違なかりし文の如くなりし定高が孫定省が時此城に良王君を隠しまゐらせたれど何の子細もなかりしとぞ

浪合記に云良王君の御父は宮部卿尹良親王母は世良田右馬助政義の女なり上野国寺尾の城にて誕生あり正長元年四月寺尾より下野国三河村落合の城に入せたまふ永享五年上野国を出て信濃に赴き笛吹峠にて上杉が兵を逃れ良王君は木戸河内守が城に入りたまふ同日五月十三日木戸が城を出て本郷が所領全子の城に居給ふ千久五郎今子より我被へ逃れ同年一の宮世良田政義桃井伊豆守貞綱等良王を尾張国海部郡津島へ入奉んと議して四家七名字これらの兵士ともに同七年十二月朔日三河国を打越んとて並合に到りたまふに先年一の宮伊豫守が討死し飯田太郎が一族宗綱が討死し駒場小次郎が守り其外彼等が郎党も良宮方は親兄弟の敵なれば此所をば通しやらじと討かゝり孝喜にせまりやと大勢起り良王君を見るに桃井兵部世良田政親児玉兵庫以下並合の表の落より討てかゝり城後百三十餘人を討たる同二日酉の刻より亥の刻まで防ぎ戦ふところに良王君をば十一党の者共及び宇都宮守佐貞天世上田久世佐浪等合の山まで退け奉り矢綱兵庫と熊谷池田長次守加治筑前守以下二十一騎討死せり同三日桃井満昌合の山にて稚子に向て問ければ海部八郎太郎の甲の者ども此日並合の合戦の様何なりしやと稚子七八人のうち一人答へてけるは某は並合古き村の者なれば此日並合の町口の家に武士大勢込入り腹切てん大将も御腹召されけり敷アレをかしといふ満昌之を聞き切る者共の死骸はいづれぞと問稚子曰く武士は切腹の後家に火を掛けければ風烈しく吹て並合の町中皆焼失しけり今焼け行者とては一文字の笠印一霊の笠印竪木瓜の紋ある者共の焼跡とさし謹みて力の焼穴を拾ひたまふとて通りけらし義なる事ども知られける満昌是を聞て良王君に告げたりければやがて大橋修理亮定元を召て満昌に添られ並合より並合に到りし討死の者共を吊はしむ一文字の笠印は世良田政一家の笠印下は山川木瓜は桃田の笠印なりしも満昌定元に命じて共に清めしめさせ解釈辞世の習ひと武家の節に書おかれし定元討死の死骸と灰燼とを並合の西に寺ありければ此僧を請て葬る同日暮に定元は平谷の陣に戻り満昌は残る武士共が首を集め良王君政義の跡しかるべしとて沙汰を濃めふせおに おもひきや幾世の混と去のさ来て此浪合にかゝむへしとは 同国供の士卒にて小踊しせざりて天地も震ふず同五日三河国鳴尾村に至る里人此人々を疑て入ざりしかば満昌此文の所は坂井郷にして正行寺を頼む正行寺は満昌が親戚下妻が知人なり良王此所に四五日御逗留ありて尾張津島の大橋定省が奴野城へ入たまふとぞみえたり

四家七黨

妙法院宗良親王の御子兵部卿尹良親王と上せ玉小迚へ來る此君は寺尾城谷が館にての誕生ありて御母は飯谷井伊予守道政の女延元元年尹良の御父宗良親王と道政を君と崇め奉り遠江国小室へ旗を揚て京都の将軍と挑ぎ戦ふ尹良は大和国吉野におはして御元服の後正二位中納言一品征夷大将軍右大将兵部卿親王にならせたまふ元中三年八月八日源の姓を賜はせまふ然ると新田小田世良田桃井其外遠江三河の宮方与力の者共議して桃井和泉守源貞識とよ

て吉地より上地山へ近く移しまつる吉地より供奉の人々ハ

大橋隆紀大夫定元　岡本左近将監高家　山川民部少輔重祐

恒川左京大夫信矩（此四人を新田家の四家といふ）　堀田尾張守正重　平野主水正

業忠　服部伊賀守宗純　鈴木右京亮重政　真野式部少輔道

資　光賀大膳亮為長　河村右馬守秀信（此七人を七名字といふ）此十一家を

吉野十一党と云方の武士也（云々）（已上浪合記にあり）（按ずるに四家七党ハ宗良親王より御子尹良親王に仕へ奉りて忠義をつくし良王君に扈従して尾張に来り給ひ其支族甚多くして或ハ武門又ハ祠官農家となりて子孫今に残れりといふ）

鏡池山瑞泉寺

（船戸にあり浄土宗西山派京都光明寺深林寺末）開基ハ年紀詳ならず寺伝に

天王潟（今字を陽陽小路といふ）にありしが永正十四年中興日仙和尚今の

地に移せりそのゝち正二位大納言良王君当所奴野塚に入らせ

給ひしが寛正元年三月五日薨じ給ひし（御年七十八）をこの寺に葬まつり

彼君の諡号瑞泉寺殿と云るによりて寺号とせり（浪合記にあり）（寛政三年

三月五日天王の境内に社を建て御前大明神と称しまつりてあがめまつる）

本尊　丈六阿弥陀座像（仏工春日作）　**鎮守**　八幡宮　秋葉

霊宝　良王君影像古画一幅（并此君の位牌　瑞泉寺殿正二位亜相良王大居士明應元三月五日とあり）

紫雲山菩提院西福寺

同所にあり時宗近江国番場宿蓮華寺末そのかみ堀田尾張守正重の六男僧となりて一向上人の弟子となり法阿と号し貞和四年当寺を建立せしなれば堀田家の菩提寺なりし代々の位牌を納む

本尊　阿弥陀の立像　**鎮守**　神明社

塔頭　十王堂（先年焼失して廃せり）

津島山妙延寺

今市場にあり日蓮宗甲州身延山久遠寺末もと真言宗にて津島山高宗坊といひしが永正年中身延山十二世日意上人に帰依し今の宗に改め寺号も今のごとくせり

本尊　法華三宝并に堂内に清正の像を安置し毎年参詣多く繁昌せり図に云清正八歳より同村上河原の祢宜

五郎助といへる者の家にて読書を習ひなどせしが或年六月中旬の事なりしが盗

賊四五人押入しを清正幼くして是をさとり赤髪の鬼面をかぶり衣服の入たる葛籠の中に

忍び居りしを彼賊是を知らずして担ぎ行しが一里程行て賊立寄つゞらを開んとするに

中より大声あげて飛出ければ賊等驚きさわぐ所を清正一刀に切殺したりしと伝ふ

以て此時の鬼面今ハ此に伝へて上河原の鬼祭にこれを用ゆ

霊宝　清正真筆詩短冊

一去故園幾有年
切振海内盡三邊
昔義金王今如塙
掛念君恩深似淵

慶長十五己酉
偶居山家賦懐

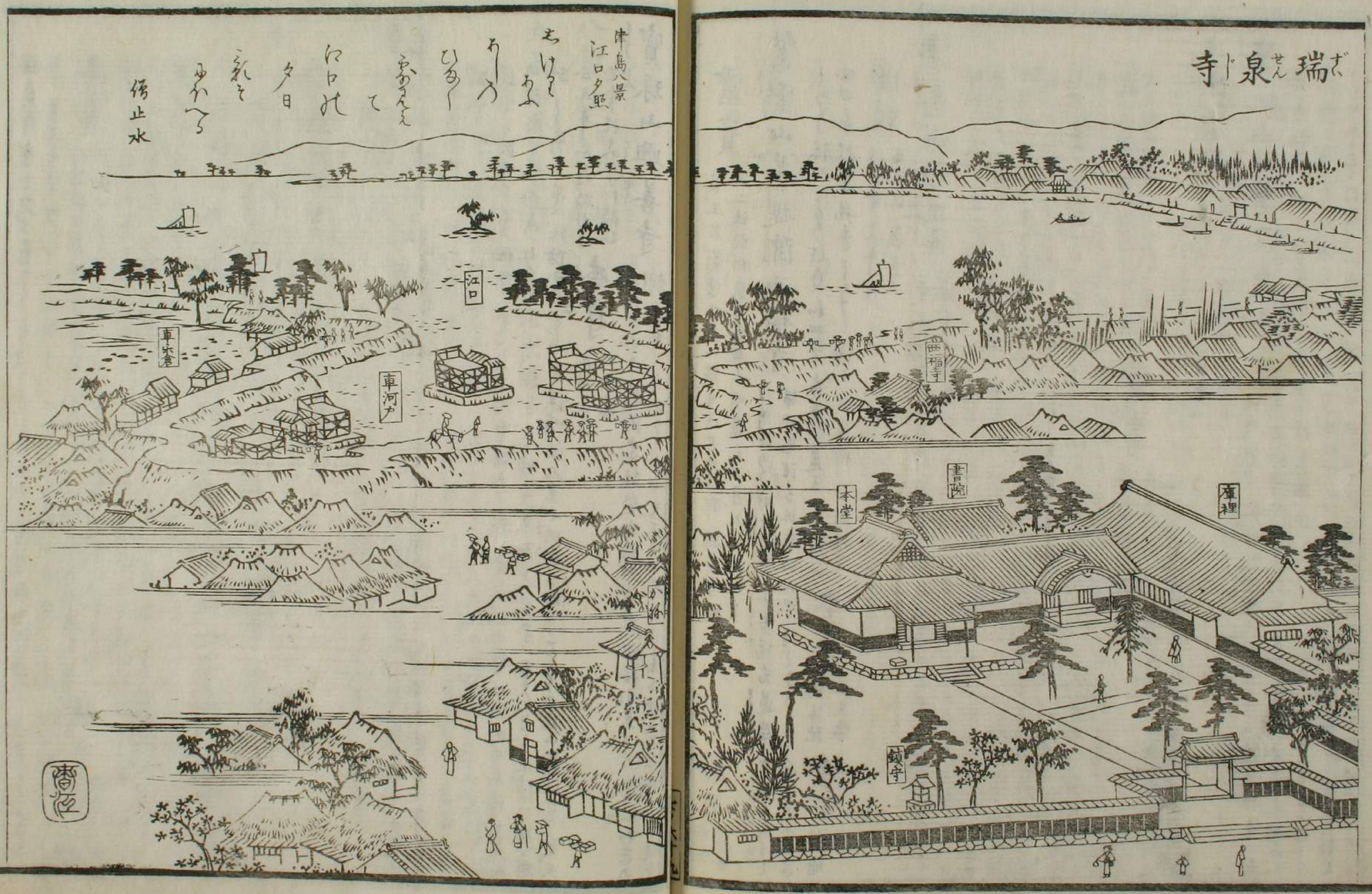
天王御前社

同所にあり天王末社の其一なり天王御祖神をまつる

寶池山休蓮院貞寿寺

同所にあり尼僧比丘尼にて尼寺なり浄土律中一色村常成寺末延享元年甲子秋の創建にして開山ハ関通和尚之師の行業記に云尾張国津島郷伴氏又子といふ甚師に帰依する事深く沢師に投じて剃髪せる尼元と一寺を安住せしめ往生極楽の教行堅固なる事を得せしめんとて同所に一寺を開創にそこにおいて師の母妙教及び侍尼等を移住させしめる

瑞泉寺（ずいせんじ）


江口
車河戸
車水倉
西福寺
書院
本堂
庫裡
鎮守

津島八景
江口夕照

むけてもなを
あかりの
ひるし
家あふんえて
江口れ
夕日
気を
あかへる

傍止水

後貞寿寺といへる是なり貞寿寺建立の始縁ハ随聞往生記に出づれど年ともさだかならず云ふ しかれどもやゝもすると百躰堂といひしと伴猪兵衛施主として今の如くになせり

本尊（阿弥陀の座像恵心僧都の作施主ハ宥智院殿圓鑑専益大居士なり又近きに前立に阿弥陀の立像を来せり）**鎮守**（熊野山証誠殿と称）

請しまつる当山の開山閑通和尚みづから土をもて石壇をつき弥陀林中にもそれ松一株を植らる石壇と同じくつきし松一株を一得松と名づけらる委しくハ寺蔵の記文にあげれバ爰に畧す

玉縁のはるかに松を植る松の一本まつの弥やさかえん　芝山重豊卿

植えし松をまちしに阿弥陀仏の法名ひろまれと思ふ斗ま　仝

琴静女の筆塚

（境内にあり碑面の詞書こゝに略す）

名のこせにとゞめておのれもしとハ筆の命になるとなりけん　黄中

藤浪山教津坊

（同所にあり高田本願寺末開基ハ越後の国の産にて山田左エ門尉道顕といふ人遁世して比叡山に入り阿闍梨の弟子となり）しが慶元のはじめ当所に来り舟戸に庵を結び往生ハ天台宗なりしが建暦二年親鸞聖人この下向の節此寺にて一宿ありしより聖人の教化に帰依し今の宗に改め道顕と改め教信坊と号す聖徳太子作の南無仏の像阿弥陀の画像菩提樹の珠数等を附属ありて末世へ残さむとの給ふ又当寺へ来りし聖人自ら水鏡の像を彫刻し是も教信坊に与へ給ふ後明徳二年回禄にかゝりて今の地に易地せり又天正三年正月始より今の文字に改む

本尊（阿弥陀の立像）

寶珠山興善寺

（同所にあり曹洞宗能登国惣持寺末永徳元年万山寿一和尚の創建なり大地なりしが天正十三年の地震に諸堂破壊して後今）

のごとくなりけれど今ハ当郡のうちに末寺十ヶ寺ありて**本尊**（薬師座像）**鎮守**（天満宮）

山門の額に海東古禅林と志るし頗る珍法の梵刹なり

八劔社

（橋詰下構にあり 諸の年紀詳ならず）

九品山蓮臺寺

（外小沼にあり津島東の御堂といふ時宗江州番場蓮華寺末貞和年中弥阿上人の建立にして大檀那ハ堀田尾張守なり浪合）記に云摂州浪速の甲子良王の御供して尾州津島に居住せり依て是處ちと建立せしとぞ

本尊（阿弥陀の立像春日作といふ）

不動毘沙門の二像あり同作なり

靈宝（開山弥阿上人の木像また信長公信忠公の證状数通あり）

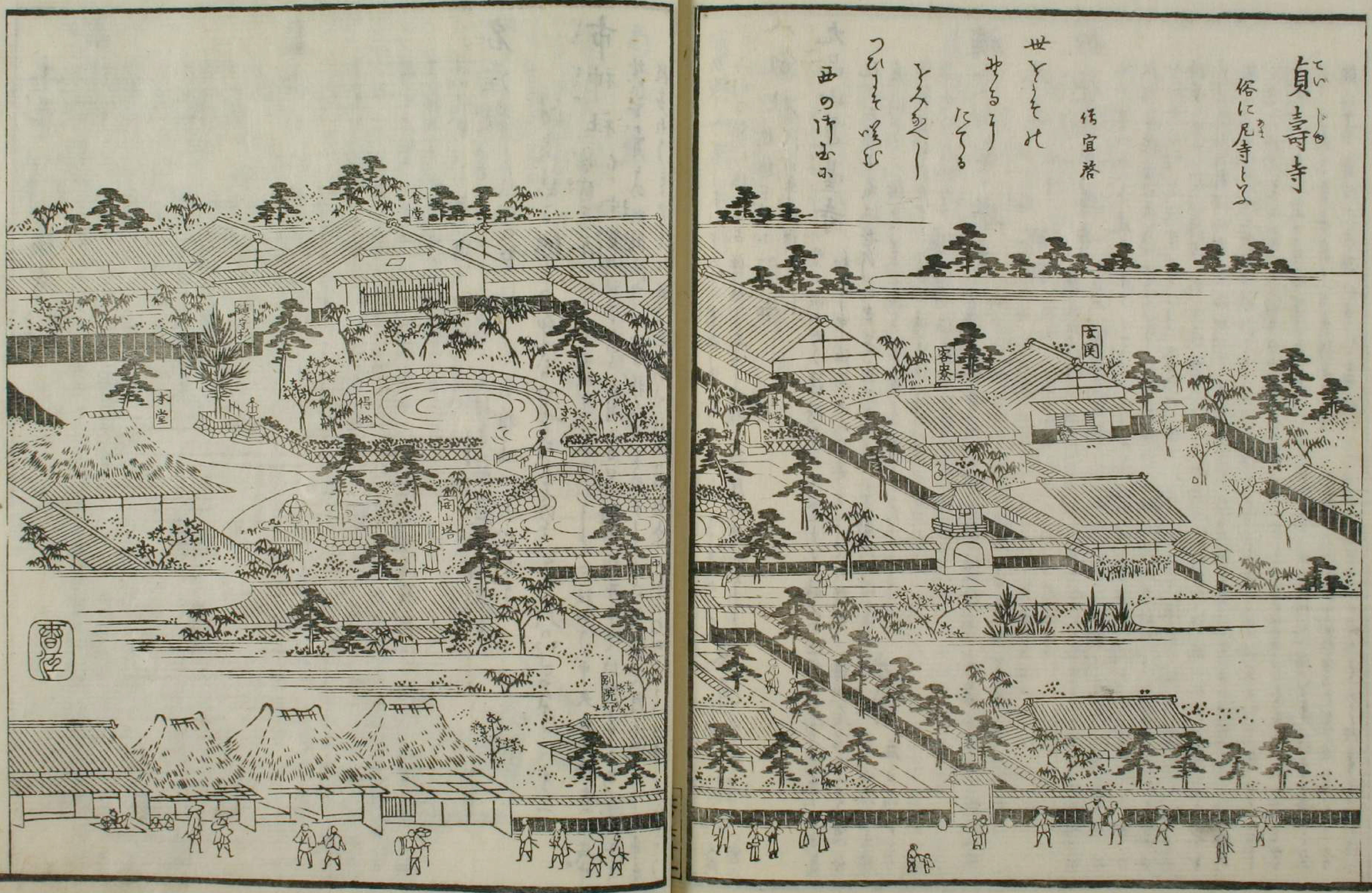
補陀山常樂寺

（小沼にあり曹洞宗能登国總持寺末應永年中悦巌和尚の開基にして神主永宝氏の菩提所なり）

本尊（如意輪観音）**塔頭**（瑞雲山高正寺なり千手観音ハ恵心の作にして当所三十三所の札所なり）

妙榮山本蓮寺

（赦免町にあり日蓮宗越後国本成寺末 大橋太郎左衛門尉通貞文治二年北条の為に囚人となりて鎌倉に在）此の牢に入られ建久八年まで十二年の間日夜法華経読誦おこたらずありし妻子ハ本国に在り諸谷の夫日が女なりしが通貞鎌倉に縁の時旧里にかへり在日かなりそて男子をまうけ利貞と号す十二歳の時鎌倉にいそぎ八幡宮に詣二六時中父の為に法華経を読誦しけれバ頼朝公にゆるされ通貞の罪と免じ本領尾張の中島海部の二郡を賜ひて後建保七年七月左馬頭勅の罪ありしに父に北条の家郡三宗斬らるべかりしと忽大流星あらはれて鬼神の光をも曳されば旧里にかへりて爰におゐて中根村に一宇を建法華寺と名づく正嘉元年十月十日父通貞七十二才にして卒し法名本蓮寺と号せらる往三年貞経が末孫此寺を当地にうつし法号によりて今の寺号とせ


食堂
鎮守
本堂
得松
開山塔
別院
玄関
客寮

貞(てい)壽(じゆ)寺

俗に尼(あま)寺とよふ

信宜眷

世をそれ
出るより
にてる
ときえし
つひまて住む
西の御寺に

本尊（法華三宝）　鎮守（三十番神）

成信坊（じやうしんばう）学座より有しかど中古まで末寺として近年本山の惣所と称し大に繁昌せり 開基は天台宗にして其草創の年暦詳ならず七世紫雲院日乾聖人の門弟に依して今は此宗に改め寺号を其後寺中に画像となりし其裏に明徳二年辛未四月吉日と記せり 此画像は阿弥陀の像とあり

霊宝 綿帽子（中世此綿帽子に阿弥陀木像一躰をつゝみ老女拝ありて後の世を願ひし） 子安の尊ありてやすきことを祈れる事ありしと若波老女は消息ぬ所に本山にもはうして

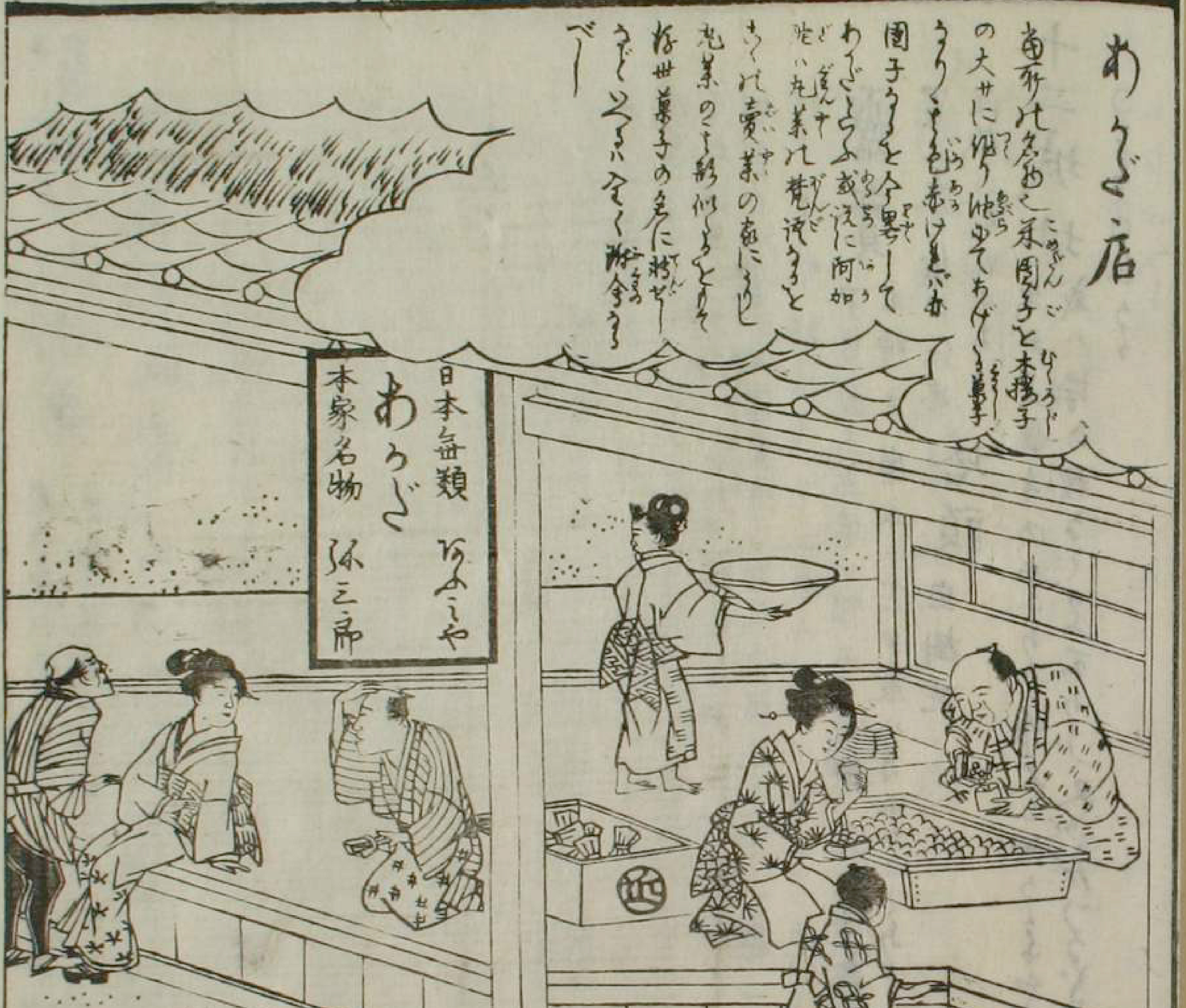
本尊 阿弥陀の尊像（宝暦）

塔頭 寺　金光

名産白雪粔（はくせつおこし）上切町にあり内藤某年治の製にて近年より世に名高く是も洲本興来より粔の一種也上品なりと世に称し又御所にて押切町の美濃屋三右衛門が家にて製するを御ゆるしありて名産として製するものを客粔と称しけれ古くは此川口屋にも製す 三右衛門から製しけるは名産と称して製するといふ 又新撰楽記に諸国の名産を是にあり 然るに倭俗呼て粔籹といふ 按るに京の名産とせる 新撰楽記に諸方名物を挙て粔籹と号す 和名類聚鈔に粔籹を於古之古女と訓す 是宮中の御饗に用ひられしものなるべし 宇多帝京景物略に粔籹は菓子の名也 其製は冝考 帝京景物略 契田之市に賣之謂之宮起 米花なり 又粔籹 和名於古之 名産の一品とすべし

名産麩 此土の町にて製するを洲本麩と称して名産 洲本麩に似たる布袋のふくろそのそれより粔籹と称し 他の製に勝りて風雅味の上品なり 是なり

市神社（いちがみのやしろ）橘戎（たちばなえびす）社ありて天王末社の其一にして三社あり中央大市姫 左は大歳神 右は宇賀魂神を祀る 正月十日早朝に初市として此所にて祭あり 風流にして古雅なることも多し 例祭は八月十五日にして車楽などもありて 六月祇園祭とおなじく町々より出車なども出る 其外


わらび店
当所は名物の米團子と本蕨子の大さに作り他もてあそびける事なりしも近年はいろあつ團子ともいふて今は製して わらびもち成泥に阿加泥は尤も茶に流るゝと これ異業の名によりし先人のつゞき然るとそれ於世菓子の名に称しうどん其外食を盛りるべし
日本無類 わらびや
本家名物 孫三郎

亀伯山大龍寺（先の庭にあり浄土宗西山派京都光明寺の末）征夷大将軍正二位中納言尹良親王のおん子良王君の創建したまふ所にして則彼君の御法号大龍寺殿と申すを寺号とせり（永享八年六月十五日十一党の者社を建てまつる天王の境内若宮社是なりし浪合記に見えたり）其後天文年中大巌和尚中興せり（信濃宮伝ニ云応永三十一年八月宮ハ三河国足助へ移らせ給ふべしとして諏訪より伊奈郡へかゝりおはせしに飯田太郎駒場小次郎伊奈ニ四郎たち等二百餘騎にて待受まゐらせ浪合の山の麓大河原にて数くに支へとゞめまゐらする御方にも八十餘騎命をとしまゐらせ戦ひ飯田伊奈ふと路十二三人打れけるされども敵大勢なりければ世良田大炊介義秋をはじめ桃河安藝守景庸熊谷孫三郎直近等以下廿五人討まゐれバ宮ハとてもかくてものがれさせたまハぬ御運と志ろしめし御子良王君を二心なき武士等に託して三河国へつゝがなく送り入まゐらせよとてひおりて大河原の辻堂へ入せたまひて火を放て御自害ありし哀ほどく義に殉ひ奉りし者又多かりし明の日聖光寺の僧法死骸を尋ね出し葬めまゐらせけるとや御法号を大竜寺殿と称をとし見えたり）**本尊**（阿弥陀座像 慈覚大師作）**霊寳**（尹良親王画像一幅并位牌 大龍寺殿征夷大将軍正二位中納言尹良親王神主 応永三十一甲辰八月十五日とあり浪合記古写一巻信濃宮伝古写一巻 織田信忠信雄の制札あり）**塔頭**（宝樹院）

十二城址（先の庭大竜寺の西にあり誰人の城なるや今詳ならず此辺の字に御殿或ハ城の腰などいふ所あり又ひざをつるぎ揃とて一揆ありしも此辺につきての称なるしいへり）

姥ケ森（大宮の北にあり自然石を祭て姥ノ社と称ゆおもし此所に岩窟あり穢民の神斎ひとつ中に住し今ハ見る窟なりといへども野俗云ふとして姥が懐ところと伝ふ素盞烏尊素盞嗚の時此所にて老嫗神ノ社に託と崇しゆゑ今の社と建しといへり）

馬津古駅 延喜兵部式に尾張国駅馬馬津新溝両村各十疋伝馬海部愛知郡各五疋とあり此古駅今廃して其所定かならず真野時綱が門真私記に馬津の湊は森にありむかし此居森ハ是之馬津の跡も今ハ松川と里諺にいへりとぞ日本後紀に弘仁三年五月乙丑伊勢国言伝馬之設唯送新任之司自外無所乗用今自桑名郡榎撫駅達尾張国既是水路而徒置伝馬久成民労伏請一従停止永息煩労許之とあるハ赤染衛門集に尾張へ下りしにまつ川といふ所によるとまりなるにあそびども小船におのおのふなうたうたひけるこゑさるをと待まるをきゝへハひやうなるともめくらに沖へまうるとてまうし又永祚元年の尾張の解文に依無馬津渡船以所部小船并津辺人令渡煩事云々只津辺可置渡船等也海道第一之難処官使上下留連処也云々とあるも皆川也とさ諺なりし也

按るに津島の西北なる大松川を佐屋川の濫觴となり舩着の湊なれバ其地を古訳の跡と定てハやまちかるへらん志バらく時綱が説によりて松川に配し後考を俟つ

小舩漕る津の渡りも日またけ山おろし今吹来めり　中尾義稲

海西郡

當郡ハ南北長く東西狭くして東ハ海東郡に隣り北ハ中嶋郡に接し西ハ木曽川を隔て濃州の海西郡に對し南ハ海面伊勢に連なり天正年中秀吉公一郡を二つにわかちて川の西なるを海西郡と東を海東郡と定られしとぞ近年新田追々開發して今ハ大小凡百村に及べり當郡多くハ新築れ地にして豪富の農民甚多く殊に富饒の地なれバ神社佛閣名所古蹟の擧しるすべきことのいと稀なり

普陀山圓通寺　上東川村にあり曹洞宗落伏村一心寺末　寛永十一年僧玄鼎の創建なり　**本尊**　十一面觀音にして灵驗あらたなり　甚目寺に傳へいふ甚目寺の縁起と赤見村より出現し玉ふ所と當所村の西北に當りて海底土中に讀經の如き聲あり村民これをあやしみ日を經てそこをほれバ數十仭のあらはれ出たりあり鋤もて掘りけれバ果して内より此尊像を得たりしるしにとてより凡工の作る所にもあらざれバ當時ハ世人と崇ぎせしに南ち尾山の玄昌和尚これを乞ひ受て則本尊に安置せしとかや

宇太志神社　宇多須村にあり今白鬚大明神と稱す延喜式神名式に宇多志神社本國帳に従三位宇太志天神又元慶二年に書写の國府宮本に正四位上宇多須天神とあり民部省図帳に國津宇多志明神神田三十八束有餘　天武天皇元年壬申十二月始建宮殿爾来及寛治二年戊辰加再復給と

例祭　八月十五日（獻上馬の式）　**祠官**　杉原氏

石塚　同村にあり田畠の中に巨石數多あり按るに上古巖窟に穴居せしあとなるをいかにか石塚とよべども墳塋塚墓の類にハあらざらん

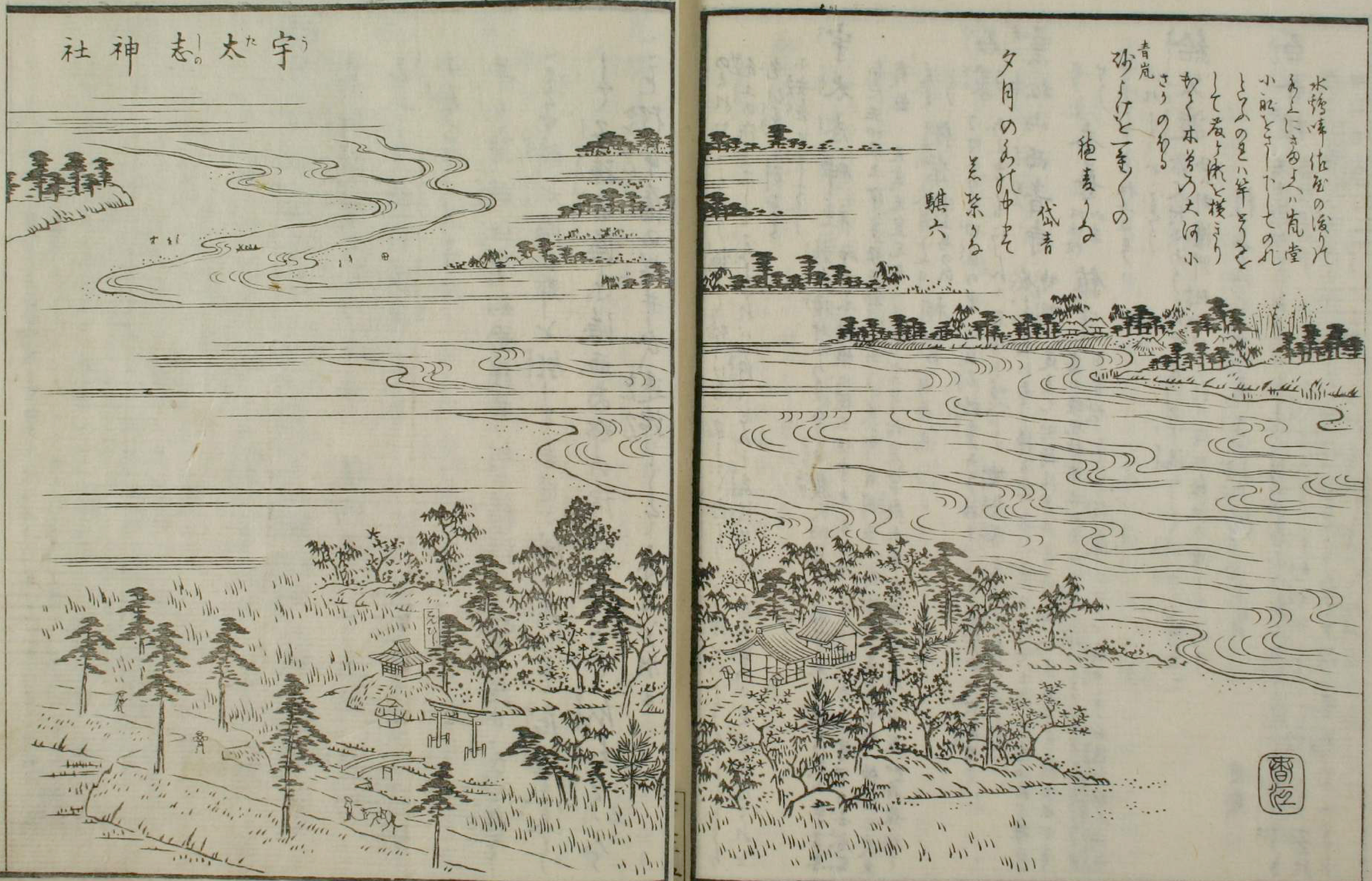
靈松山西音寺　茂ヶ瀬村にあり淨土宗京都粟生光明寺末永祿四年桜井時朝の建立し附納法名西音寺義兵宗忠と号せし由寺号とせり　**本尊**　阿弥陀如来　**鎮守**　富士權現社　神木の靈松ハ其丈數丈に及て四方へさしはびこり昔斧をもて枝を拂ひけれバ伐口より血流れ出しとて杣人同絶せしとぞ靈松山の号ハこれよりおこれり

給父渡　給父村にありこハ木曽川の下流にて川中三町余也　西ハ則濃州秋江村なれバ俗に秋江の渡ともいへり

桂ふんて南風さへ秋ハ渡しける　月底

百合根　佐ヶ瀬村より出る所の名産にして當國の產上品たりといへどもとりわき當村のもの一品として形甚大きく色雪白にして味甘美なり蜜丸おほく東都に運送して搢紳家にても珍とし賞翫し玉ふよし世に玉食といへるハ誠にこれ等れるものといふあるべし

宇太志神社



水鶏啼佐屋の渡りハあとになしハ青堂小船とさしたしてのれともの主ハ竿とりさをして最も流を横ぎりわたく木曽乃大河小さうのわる

青嵐
吹よけと一筋〳〵の
　穂麦かな
　　岱青

夕月のあれ中まで
　美茶かな
　　麒六

一とせとそれ玉葉の世のさしにほくりたるうちて八ちまたはなれちる花
つゝありまて いまも大いなる中の松と下小田井の里人道ゆきより亀尾
君こそて おくりけるやこふそめつしさた　竹葉ま都しまうけり
そのうしを作へきて作りてやしこころをまう又のとしにくそいけき
と二とひおこせうりけり ちうくれよしとかしてさらにけん局まそてぞせ
都し作りぬさてそのまゝとおにゝみてしとおくへきされなまとかゝる
まふいとほころうてんまゝいとうされとぞとおつきさうさうしと
こそしうゝおもふまゝ

いまもそのさくうつれねし九ちまに八千代のゆかり松とさしけつれ　陸夏大尾

横井掃部助時永　赤目村の人也　其先ハ北條相摸次郎時行ハ相摸守
高時の二男也 元弘年中 後醍醐天皇高時を誅罰し
玉ふより時行流浪してありしが ここに赦免せられ 官軍
に属せり 其子平太郎時満尾州蟻江村に蟄居しける子
平太郎時任愛知郡横井村に移住し始て横井氏と称せり
其子時永海西郡と併て赤目に城を築きて居住せり 夫より
して子孫各海東海西両郡の諸邑をうちて領知せり 今
これ本藩の横井氏連綿として赤目と称すと

光耀寺　落伏村にあり 本宗寺派 知多郡大野光明寺末 明應三年僧光
正坊の創建なり 光正坊ハ本甚左衛門と称して邑士たりしが 教如上
人清須を通りし時その化度に遇ひ深くその法を信じ遂に上人に帰し雑髪
して光正坊と号す されバ上人より信如上人の画像及び紫絹の袈裟並に刀鞍を賜ふ
上人を擁護して今に至るまで門主参りの時ハ
諸と刀をさして送迎をなせり　**本尊**　阿弥陀如来

國音山一心寺　同村にあり 曹洞宗三淵正眼寺末 明應九年横井時永海西
海東の二郡を領せし時創建して万福寺といひしが其後荒
廃せしを寛永十七年横井時安再興す 時安薙髪の後
自ら一心飛華居士と号しける故に今の寺号に改む

早尾渡　早尾村にあり 木曽川の下流にして佐屋の渡しの下より津島へ
渡る 便船三艘に樟郎の給米若干を附属す これハ横井時永法師
ありしてを経状村に存せり 伊永法師ハ
南年ばまたと称せし人なり

葛城古渡　葛木村にあり　いにしへハ古佐屋の渡しとて勢州の桑名より
此葛城に至り夫より清須に至るとぞ 今ハ面影さへ
なくてただに名のみ残れり

閑通上人傳　大成村の産にして父ハ横井氏母ハ小泉氏也
初の名ハ元教 後自ら閑通と改む 字ハ無礙 一蓮社向誉と号す　元禄九年の仏誕日をもて出生せしと
し 又別に雲介子と号す 上人十三才にして出家し明和七年

八幡村

二月二日寿七十五才にして寂す其の生前自行の堅固化他の廣大なる凡そ上人に帰して日課念佛の行を受るもの十百万人に満てりとぞ遂に浄土の正宗開通派と開肇し永く末世を化益し又数基の寺院をも創建せり碩徳の餘光枚挙に遑あらねバ都て上人の行業記に譲りてこゝに略しぬ

石田里 尾張の名所にして行基の年譜にのすれど詳ならず或ハ愛知郡又ハ知多郡なりといへども当郡石田村ハ其名にかなひ今濃州に属せる八神の内石田村と地つゞきて古ハ津海の浪より高木へ迄ありまゐへおけれバ流れにちかき里なるにより歌に詠ぜしものなるべくかゝる因もあれバ今当郡に属してこゝに出しぬ

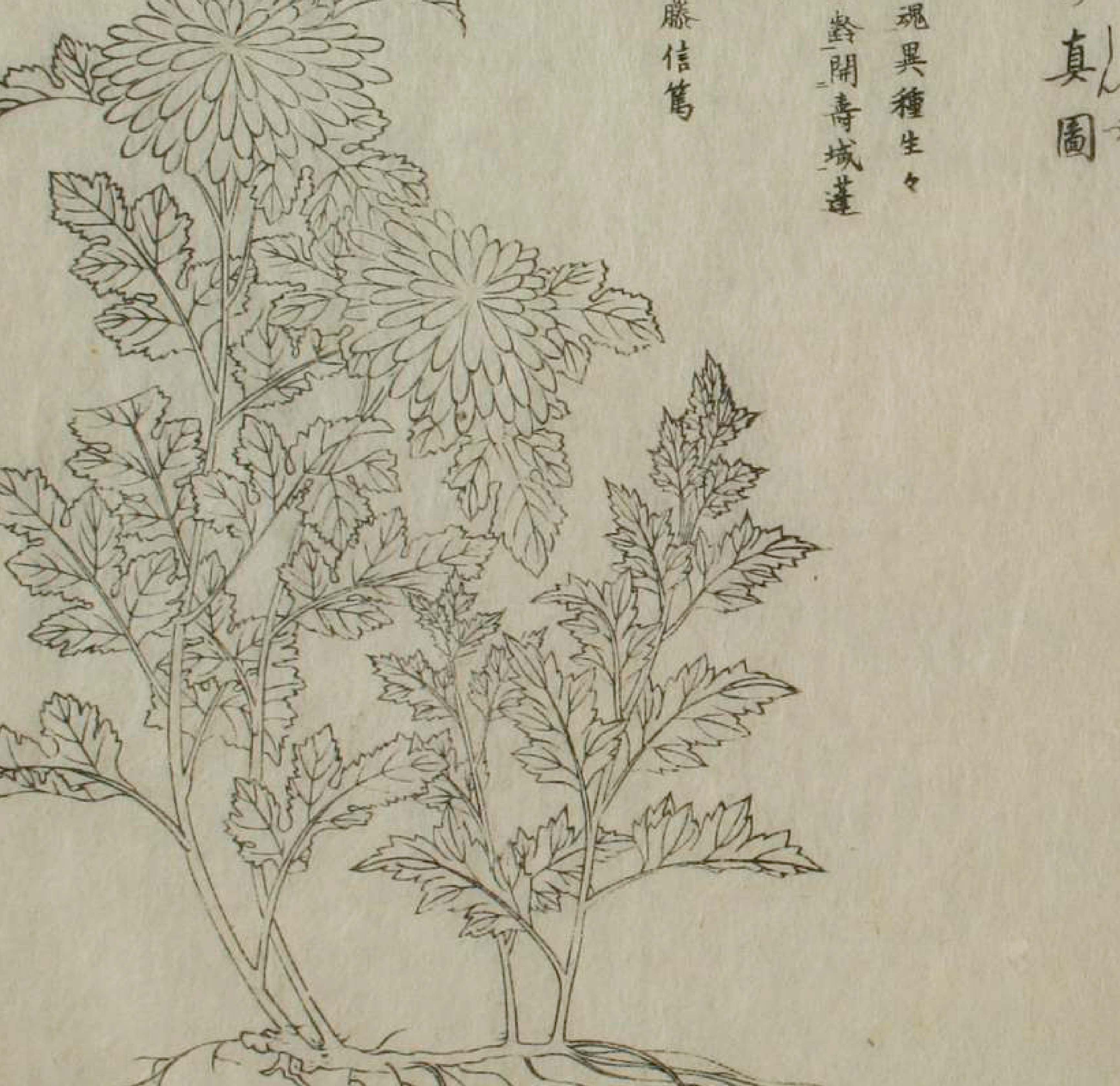
夫木 いかなりやいし田の里の秋風に衣かしに夜ハ寒けらん　民部卿家衡

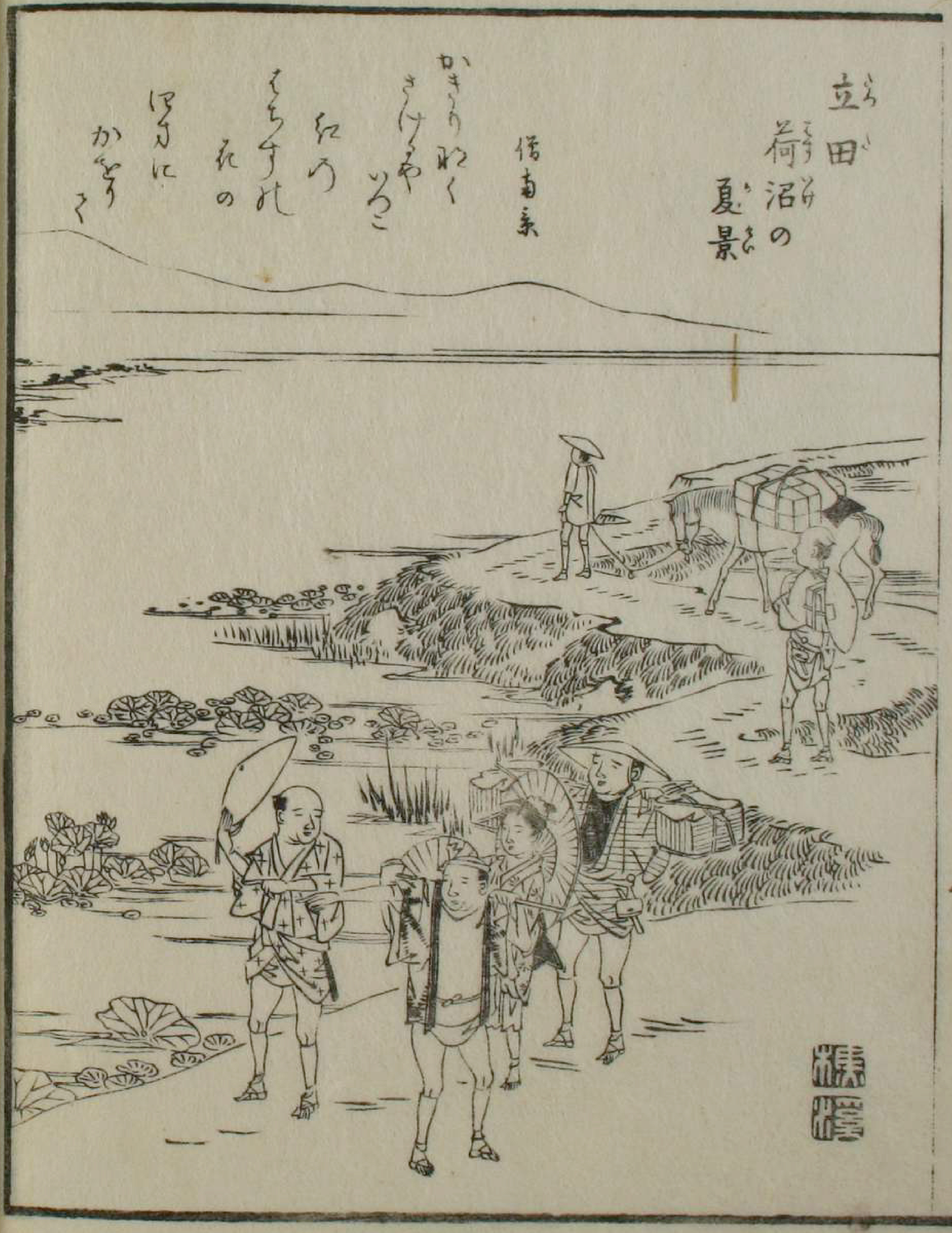
小杜天神社 小茂井村にあり本國帳に従三位小杜天神 同集説に富安庄小茂井村称天神社といへり

連理菊 同村の農家岩田氏の老夫菊を好みて年久しく培栽せしにある時同根異草小菊一枝を双生せしが庄人みな是を怪しく老夫が甚喜びて瑞祥なりとして甚愛しけるが或ハ是が形を図して貴に献じ又ハ是を讃ふも携ふる中に林学士の頌を得て名く七言の小詩と投贈ありしを今も花咲出の家に蔵置せりされバ是を詩と図上に書して世に傳ふす又或る人の詠歌にも載せて昔 陽成院即位の元慶元年丁酉二月尾張に連理生じ又 光孝天皇受禅の元慶八年甲辰四月尾張に連理生じ其ほか三代実録に見えしが又今茲こそ新帝受禅の年にて連理生じけるもいとめでたしとて

連理菊の真圖

前園為菊記吟魂異種生々
雨露恩花制積齢開寿域蓬
莱仙薬偶同根
林学士藤信篤



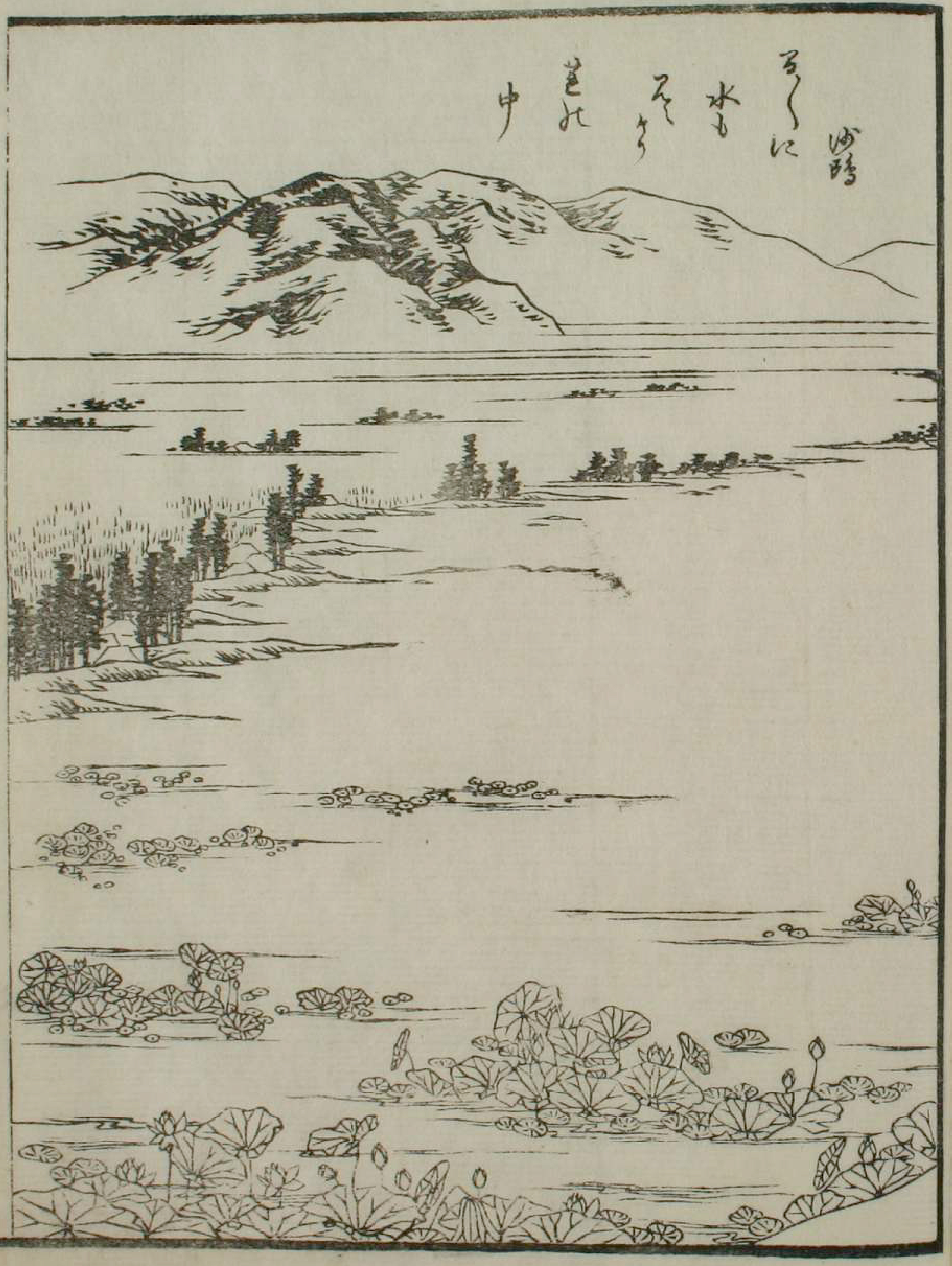


立田（たつだ）荷沼（こうしやう）の夏景（かけい）

信甫亭

かきりなく
さけるや
いろこ
紅の
もちすれ
花の
ほりに
かをりく

楳嶺



沙路

ろくに
水も
みえず
蓮れ
中

蓮根 上田輪中の名産なり此辺沼池廣大にしてやゝ湖水にひとしきに産する蓮根風味形状ともに絶品なり就中戸倉村のを最上とし一年に此村より[illegible]價ひ千両余といへり由名ある[illegible]の際蓮花さきをりし清晨の風景まつたく八功徳水の金蓮もかくやとおもふ斗りなれバ遠境の人ハ蓮根の價にて蓮花のさかんなるを想像すべし 又岡田挺之の秉穂録に尾州にて水郷の村落を輪中と云廣東新語に番禺諸村皆在海島之中大村曰大箍圍小村曰小箍圍言四環皆江水也と似たる

古川城址（上古川村にあり） 土人傳へ云當年小野田彦七居城の址なりと信長記を按るに織田彦七ハ則信長公の舍弟にして古木江の城にありしが元亀元年十一月長嶋の本願寺門徒兵を起して彦七の居城を囲しかバ彦七土民の手に死なんことを慙て同月廿一日櫓に登りて自殺せしとぞ 古木江ハ今大彦村の支邑にして子消と書けり則古川村の隣村なりされバ此古川の城ハ彦七が住せし城にして土人の小野田彦七といひ傳ふるハ織田と小野田と誤るなるべし

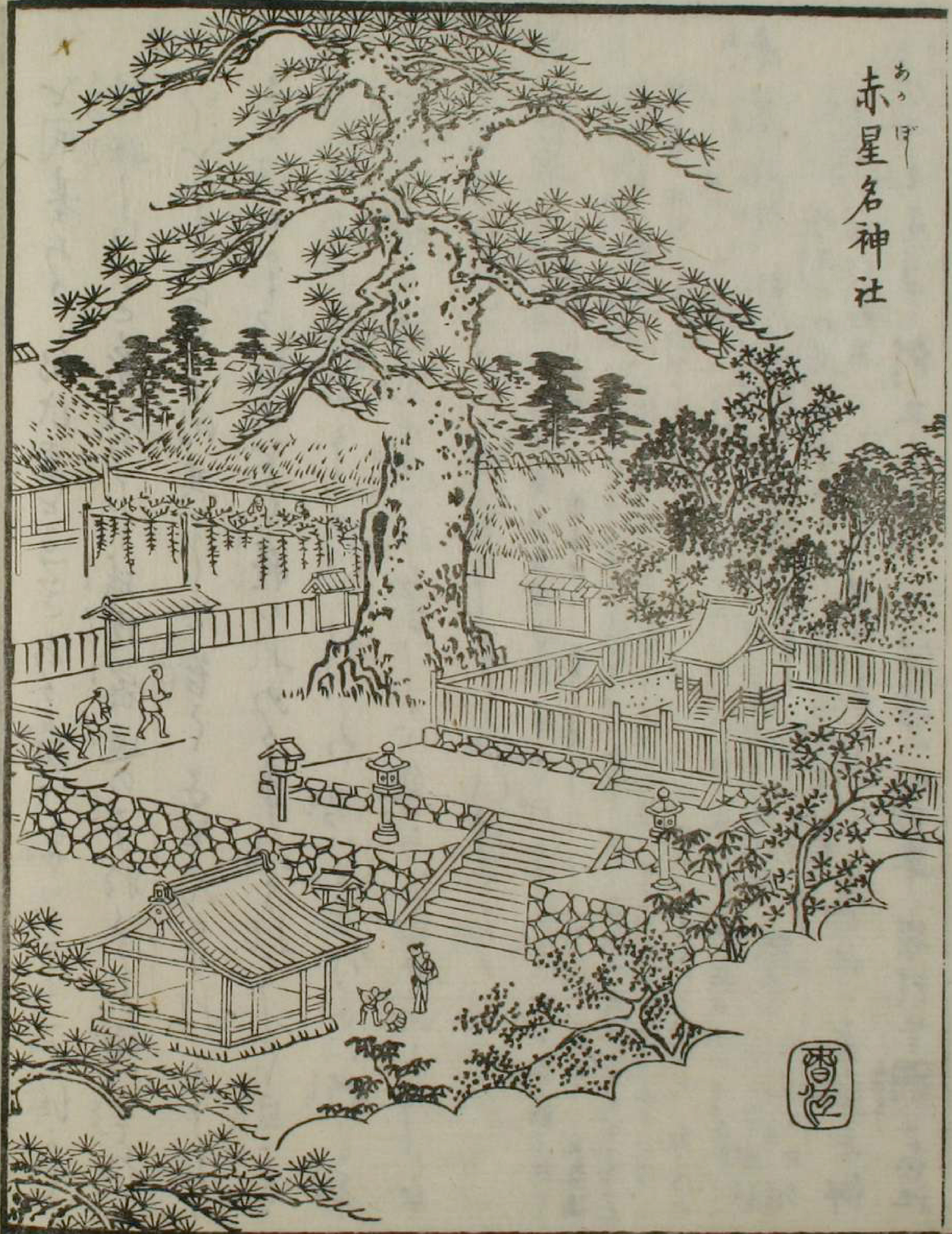
子消里（大彦村の枝邑なり） 弘仁年中弘法大師當國蜂須賀の蓮華寺を開基ありし時此里をすぎさせ給ふある家に宿らせしがこの家の女懐妊しけるを家のあるじ旅僧密通の子なりと疑ひかねてたとへ[illegible]其よしを告て子と[illegible]なれバいぶかりさるいやしき穢れ[illegible]めるうれたしとも且よくいひかくるも彼がうらみにとの[illegible]思ハまさんまに持る茶を口に含み彼兒に吹けらバ忽ち子消うせしとぞ さて村の名ともなくよびそめしよしいひ傳へり

市腋嶋（荷上 鯏浦 西保 東保 西條 東條 本部田 五ノ三 已上八村を市腋と称して當郡の旧地なり 浪合記に一會とあるもこれなり今ハ市江と書けり 貞應海道記に夜陰に市腋といふ所にとまる前にハ海さし入て河伯の民[illegible]うしろハ峯峙ちて山祇の髪風に振る[illegible]秋の浪ハ千光の火をおし来たる[illegible]ハ孤枕の夢を驚かし[illegible]揺りてもゆかりハ友にひかれねバ[illegible]のいらしく波のうへ枕にしうれてやゝ神にかくらんとこゝ是よりて市腋の名のおこりと知るべし）

赤星名神社（西保村にあり星の宮と称して當所の本土神なり 本國帳に従二位赤星名神とあり） **例祭**（八月十八日湯立神楽等の儀）

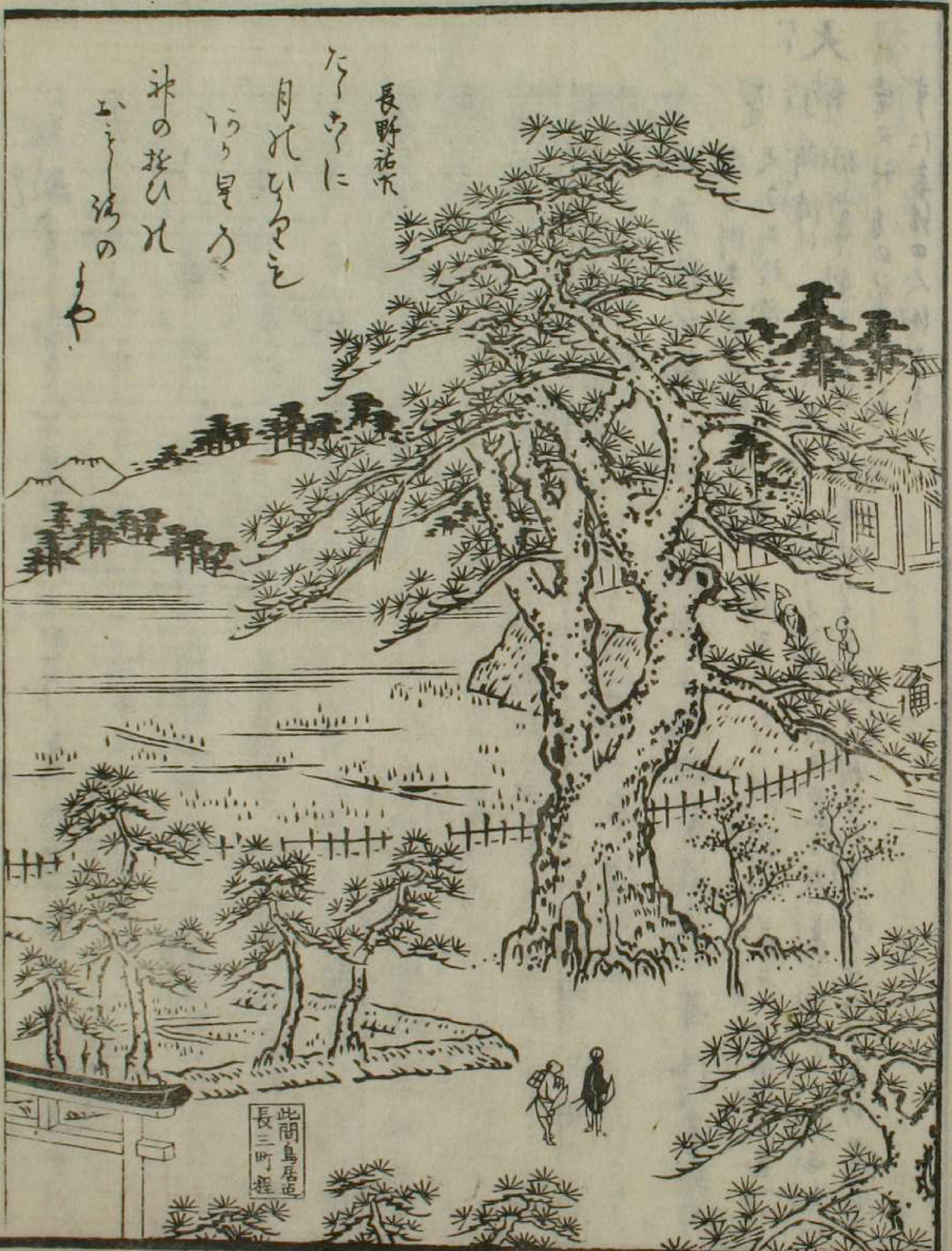
社僧（竹王山松蔭寺曹洞宗にして[illegible]寺末 祖門和尚をもつて開山とせり） 當社ハ市腋七郷のうちにして例年當所より津嶋へも此車楽を下調と當社

赤星（あかぼし）名神社



長野祐穴

たゝきに
目れひろさを
かり星の
沐の拝ひれ
よそし活の
まや



此間鳥居迄
長三町程

の拝殿にかざる事舊例となりぬ六月朔日市腹橋中の（能人形うちしく内外の二百余）よりまつりにあづかる者集会し同七日に人形を作り是を作らる車楽に乗る児笛太鼓及び囃子の稽古をなせば十四日午刻当社へ引寄て試楽あり此日児どもへ柏の葉に肴を盛りて飯を贈る古例あり市江祭礼の車楽ハ天王社祭礼の始まる天正元年織田信長公長嶋合戦の御中絶せしを服部氏宇佐美氏等の浪人ひそかに再興して（此服部氏の子孫市江嶋の内荷上村に居住し其家ハ天正年中に焼失しけれどもその古蹟を存せりされバ旧家にして毎年六月の祭禮ごとにさじきを構へ家紋いと多ければ家にめしつかふ）由緒ある車楽なれバ　神君より金襴唐織の御小袖金襴楽の胴掛金襴大口等御寄附あり（今も例年車に飾りて大なる規模となり）又　國君より試楽田若干を寄附し玉へり

大楠

鯏浦村にあり世に稀なる大樹にして里民此木のやま或ハ葉を取きりて病者に用ひるに忽平愈すれ奇特ありとて樹下に聖徳太子作の薬師如来の小堂又社有の社もありて常に参詣の人絶えず

筏川

佐屋川の下流五明にて二流となる西を淺川といひ東を筏川とよぶこれハ木曽の山中より伐出せる材木を筏として木曽川より流し佐屋川を越えてさくゆかり荒浦新田奥田新田に添ひて流れ廣下して鍋川に入る此川南ハ松山といひて多くの松樹繁りたる中に其の末桃花咲る其騒人の遊賞大方ならざる處にして小武陵ともいふべし

龍華山弥勒寺

蓮ケ地新田にあり曹洞宗桂村廣済寺末もと海東郡蟹江川辺の村にありて開基の年月詳ならず天正十二年蟹江合戦の時破壊せしをまた元禄四年辛未春此地に移しト外和尚といふ中興となり

本尊 弥勒菩薩木像背銘に云尾州海東郡芝山郷宗次願主高野山一心院實阿弥明應九年八月廿九日とぞんるけり

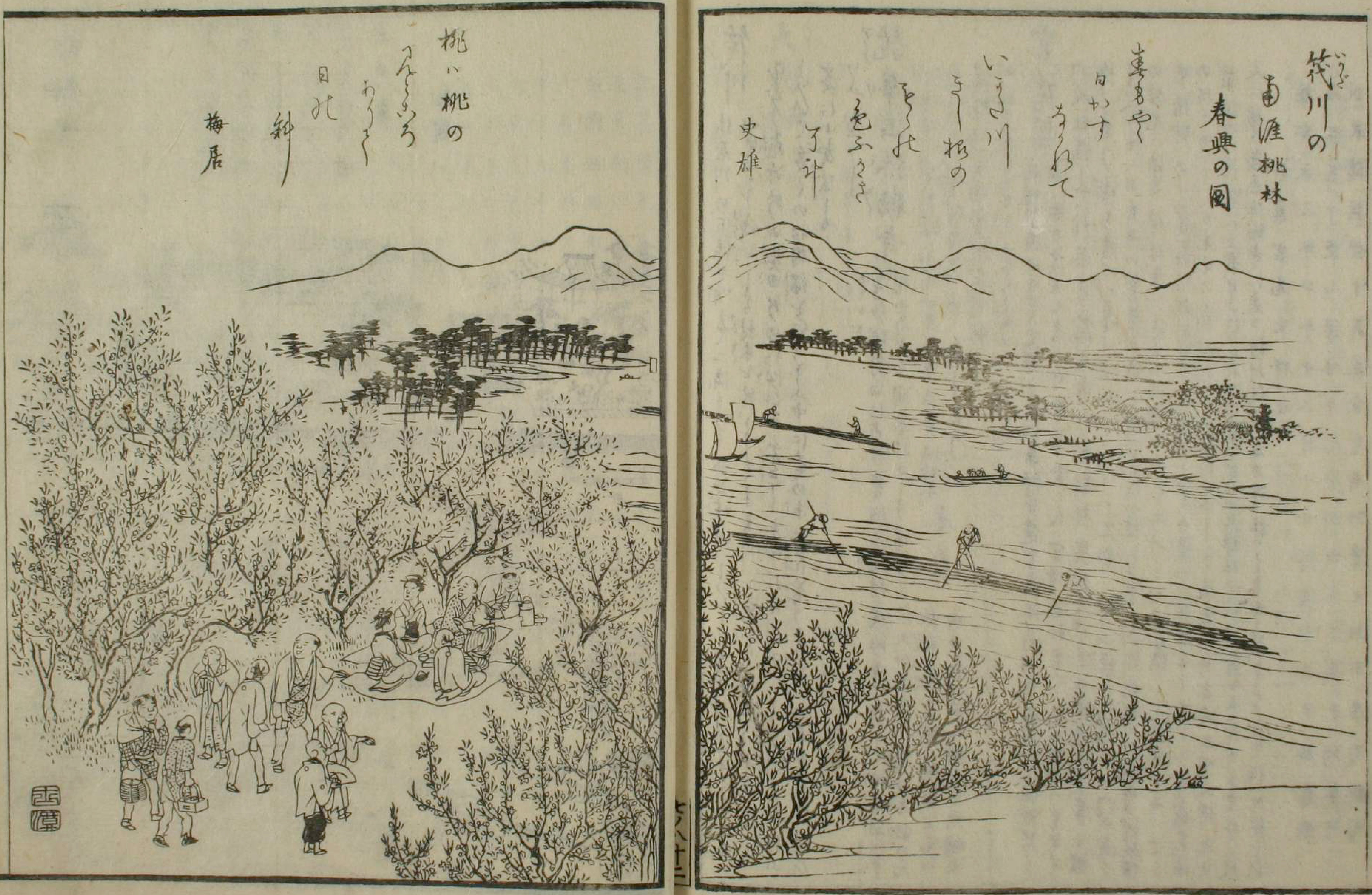
宮筠圃

同村の産にして父母とともに京師に遷て東涯蘭嵎の二先生に従学し布衣の学士也名ハ奇字ハ子常氏ハ宮崎通称ハ常之進筠圃ハ其号也門人私謚して行恭といふ性至孝にして躬行実践とほぼ君子儒の重学と標準とせり兼ねて書及び墨竹に妙を得たれバ名都鄙に溢れ請求日に門に盈てりしかれども一日慈母の警戒に感じ絶て又此小伎をとらざりしの其枚挙に遑あらざる徒輩の帰光ハ洛東禅林寺に建られ碑と云くしるべしかゝる至徳至孝なる儒生にして搢紳のうちに寵遇礼待せらるゝ天の貴へる罪報にして空しく孝感実徳の恬くあらんかるに先生の事蹟群書に世れ知らずして諸家人物志近世畸人傳近世叢話等の諸書にも載せられハすべてこれを略し只禅林寺の碑銘を左に記してさて好るの人に贈る當邑弥勒寺に建る河村乾堂翁の碑説ハこを文や簡なるをもて併せ掲げ

行恭宮先生碑銘

維安永三年甲午十二月十日筠圃宮先生終焉越二五日一葬二于東山禅林寺先塋側一既而其義子弼奉二行状一来請レ誌二銘于其墓一余曾有二師資之親一不レ忍二固辞一因

是之安永中の文字書画にあり〇人宮地村



筏（いかだ）川の
南涯桃林
春興の圖

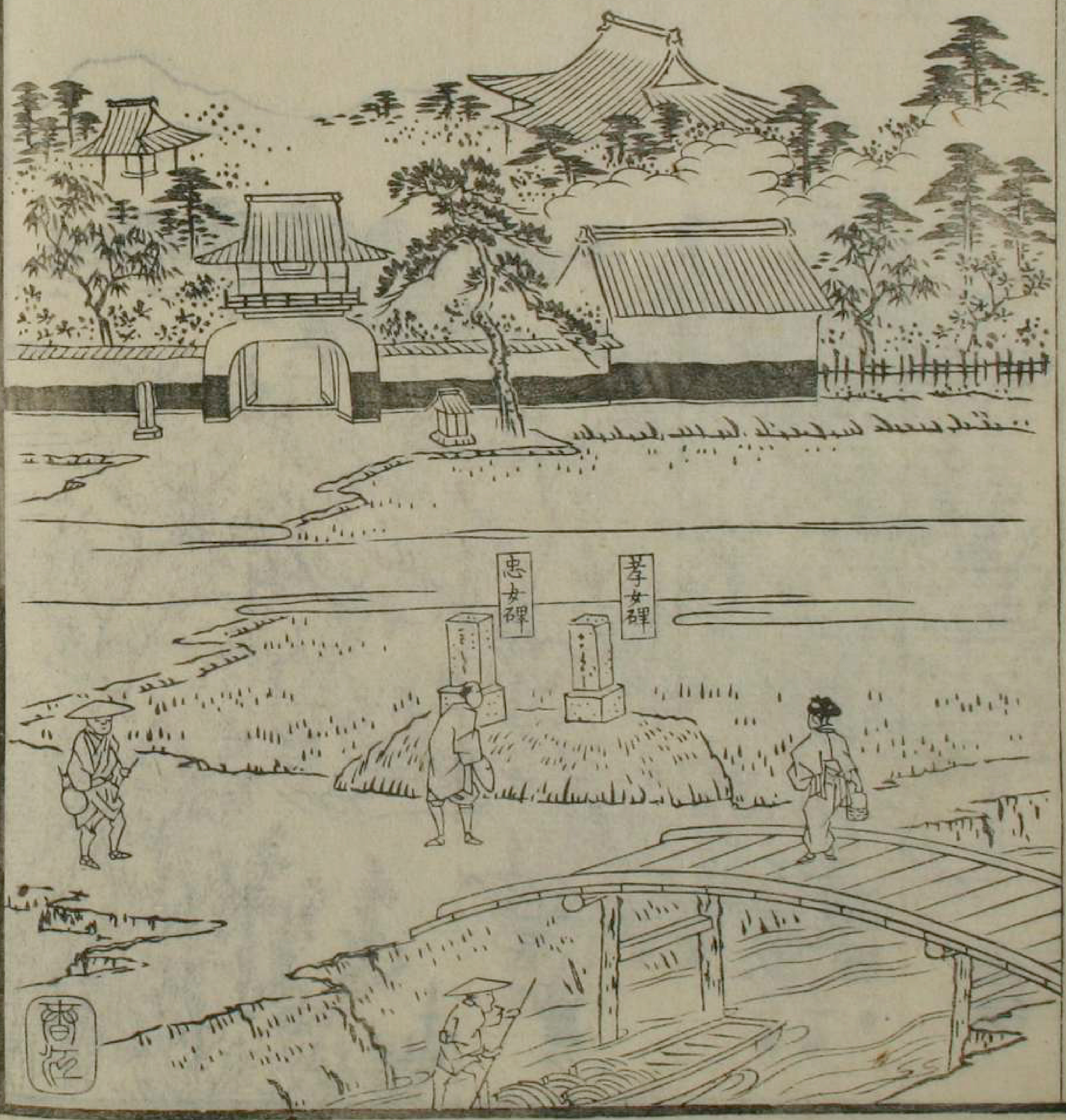
春雨や
日かす
あふれて
いかた川
さし柾の
花に
色ふかき
了計
史雄

桃ハ桃の
つれまへる
ありく
日和
哉
梅居

弥勒（みろく）寺

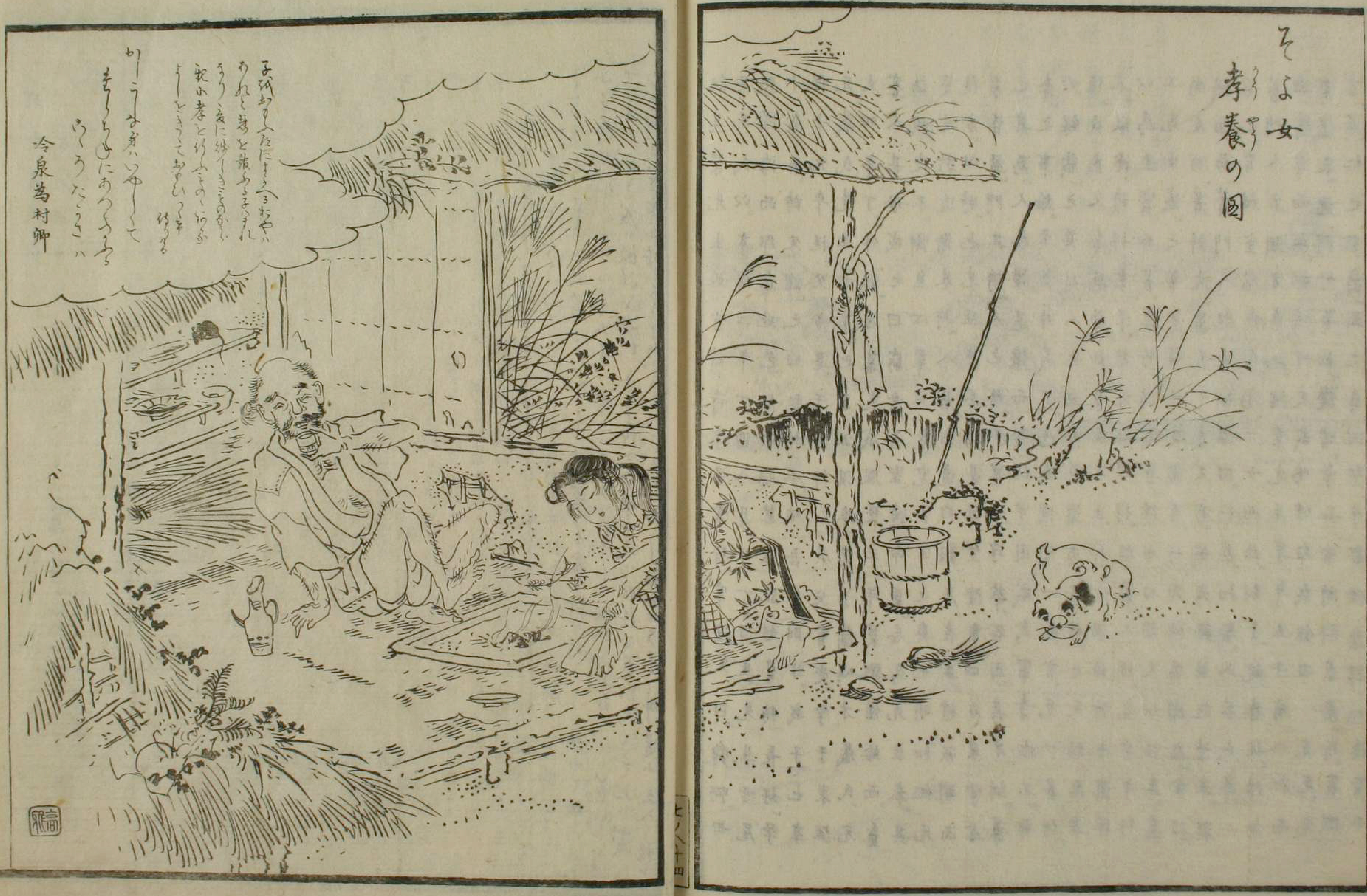
事主養親共
盡歡深林誰
種並頭蘭芬
芳應待多年
發莫作尋常
花卉看

松園



記其槩先生姓宮諱奇字子常称常進父曰舜弼母長尾氏以享保二年丁酉八月廿一日生先生于尾張國海西郡鳥地邑幼而聰慧強記超羣稍長好学十歳善詩父謂之曰勉旃不継吾業則非我子也享保十九年従父母遷于京師以其父嘗受学于東涯元蔵氏先生亦事之東涯没卒業于蘭嵎才蔵氏元文四年丁外艱思慕哀戚服喪三年菜粥僅給而貧窶亦甚母戒之曰窮當益堅遺命莫忘焉先生奉其誨夙夜不懈焦心覃思遂究古学之奥也明和紀元買宅於近衛巷将入居俄遭内艱居喪盡禮服闋而徙方此時也先生声誉藉甚徳望隆重四方来学者晨昏盈門其誘人也務本實去浮華各因其才訓導之其為人恭謹退讓而志純守固威武富貴亦不能奪之事雖至小非義不為焉偶聞一善言見一善行必録蔵之其接人也無少長賢愚皆禮之天性至孝傷蚤喪父毎展祭如事生先生作文温雅詩亦真率不敢逐時好書学趙文敏深得規範人得隻字半行以為至實兼善墨竹請者尋踵毋日恐人以汝為畫工先生感之誓不復作矣園有竹因称筠園扁堂曰尚友所著詩文集若干春又有備考録経説皆未脱稿而易簀門人親友私謚曰行恭初娶入谷氏挙一男不育継室飛森氏産一女而無嗣子親眷従治命養門人名溯者奉祀継業先生享年五十有八仁而無壽孝而無嗣鳴呼天哉鳴呼命哉銘曰　克光先業儀表儒門好善如饑嗜学如淪閑朗羣蒙折衷纖言居仁之宅爵天之尊囬耶牛耶倏忽歸根徳音不

てよ女　孝（かう）養（やう）の図



子供おやにたゝまつへるおやハ
あれと努と哉ある子ハまれ
なり哀に[illegible]しきことの[illegible]
親ニ孝と行ふそのこゝろを
よしときゝておもひつゝ年
詠ける

かしこき身ハいやしくて
まことのこゝろにあつくある
うへたとき[illegible]ハ

冷泉為村卿

朽
令名永存

安永四年乙未孟冬

正二位權大納言源朝臣信通撰并書

有栄篆題

男弼建

孝女そよの傳

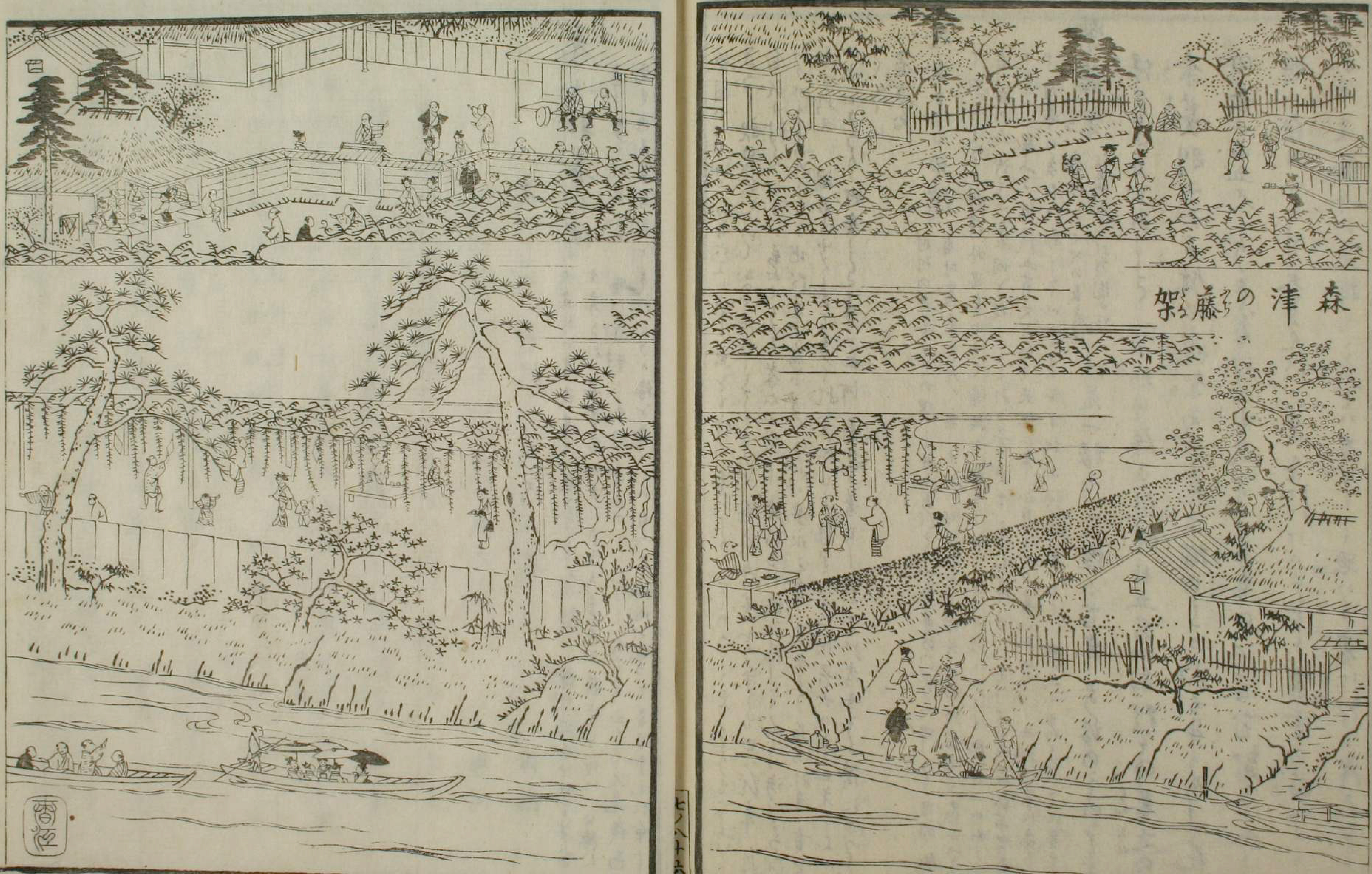
（同村孫勒寺の門前に碑あり）百姓喜六といへるものゝ家貧しく己が持てる田地とては一畝もなく耕作の營ともすべき縁がたゞ傭を業として世を渡りぬ妻は姑の心に叶はざりければ喜六が三十二才の時去りて二女を姑とともに家に殘してさりけるが其れより後の妻も求めず母と娘と三人のみ暮して日を送りしが母は喜六が五十三才の時身まかりぬ程なく娘そよは成長に隨ひ孝心深く身はなききものにして髮もとらず粧ふ事もなくたゞひとりわが身に男もなければ父に事へぬのを樂しみとなし針のしごとに衣服を繕ふまで萃をとり機を織などして公の貢をとゝのへ叔合作の六とせも此女のいさめにて親子二人ひそかに送りける所に父も在に我身を苦しむ事あれど親には未だ此さゝやかにせん又或時は喜六ひそかに米を出して新にてもあらがはれたゞ喜六がきげんのよきと我ものとせ而て喜六がすきなる酒を好みけるが日ごとに午の刻ばかりに酒十文の酒を飲み又申の刻にも十文の酒と求めけるが是を常なりし業なりかせぎおける代として一日も缺る事なかりしかある時金子へ行んとして例のごとく十文を喜六にあたへたれば父はゆきて代と有るぞといひしに身なりが子やう一度に廿文の酒飲みて悪かりなんと思ひて十錢と冬ちかく申の刻にも持ち行きけるに喜びし此娘の至孝を思ひやり娘の十文も我家の用にせよとてそれより親子打寄りて身をいたはりきぬ隣ちかく十錢の酒を傾け又娘の十文を飲りし此刻にも又寄ては喜しさしもの長きかんかへもてなしければかくて素り侘びて飯をかうもたべんとして樽の蓋ととりて見ればて内に十文ばかりありけるをもいかにも奥なる事におかしいひつぎ酒うりて拝ひ喜びしかくてありし喜六も性質まめやかにて世慾なる者なれば打ふしかねく飲みもしたにて終に碎例しものもまゝありてしばらく其身は是とくらしく思ひ西の餘がは葛籠を被てさしもなき或は故地と拵へきて婦に介抱し又は衣裁を貢ひわきて上と覆ひたし情ある兒に憐ひくやさしやかにつくりける娘そよ卅五六才より備ふ道に立入り精を出國にありけるが喜六は今は貧しき魚なども焼て煮つけてまめまめしく孝養しもいとよけしきものなく親の悦びとなりおのがためには少しも勤めて孝養をつくすべしと思ひて年月今にはたはけさぞ喜六もそのほか孝心の感ぜし老母は涙を流して人々に語りよろこびけるはいかにもめでたく地頭志水氏にも聞えければ安永之年の末より居宅の年貢を赦されて又。國君もきこしめして多くの金子を賜はりけるが此時喜六は七十五才そよは四十五才なりし程委しき事は西河菊莊が著せし刻なれ孝女そよの傳にゆづりてこゝに省きぬ

忠女さるの傳

（同村の孝女そよの碑と共に並びて孫勒寺の門前に碑あり同郡新浦村農家の老女年廿六の時同郡子地新田西河某助が家に入て乳母となる性淳朴忠貞にして哺育しき二十余年の後も之を忠義一の如し有志の人深く其褒詞を投じてこれを貴び享和年中に至りて芳名終に官府に達し錫ふに錢五貫文をもて天保二年正月十六日壽八十四才にて西河が家に於て終る其同年の冬石に勒して以て美を不朽に傳ふ委しくは碑文にありてこゝに略す）

紫藤架

（吉浜村の長者田沢氏が家にある庭園にあり）此藤一根にして僅に百年許の者なるが塩素に力を盡して架棚の廣さ縦横廿五間四面程その蕃延の余蔓別に六間餘の編架ありて是を棚のまはり手にして花の長さ四五尺もある程にも及べり暮春の頃盛なる時は白日にも寸天をみせず遙をあげればさながら紫雲の蔽へるが如く又織女の天機もこれには及ばじと思はるゝ程に廣大なる



森津の藤架

藤架ハ　皇國ハ素より海外にも又古今にも絶てなき壮観なり故に遠くより日ごとに来賞する人幾百千といふ事を知らずことに此家水にそひて泛舟に作りたれバ趣ありて詠そ来り遊ぶ人も多し粗図に載て万分の一を志るすべし

縦紫蔓藤翳日架縦横百歩一根ノ花有ニ此奇観一春夏際無ニ人不ニ訪ニ武田家一　精一

藤架萬條垂春風緑ニ紫絲一此是天機錦應下從ニ銀漢一移上　服部赤城

堀川や日並の舟もかよふらし表津の里は藤の花盛に　昭豊

年ぬるし藤のかき色添てむらさきの波を立けるに　道直

見はらせぬうちに夕日や藤の花　梅間

藤さくやもれところの一曇り　沙鴎

孝女和喜(わき)の傳

大宝村の農民甚三が娘なり主人に仕へて精忠(せいちう)父母と申もさらなり至孝なれバ其芳名四方にきこえ遂に公聴に達し多くの黄金を賜ひ褒美(ほうび)ありしかバ世のしるところなりかゝるに人見璣邑先生内藤東甫翁をしてわきが像を画かしめ自ら其讃詞を選りて夏目重元に命じを図上に筆せしめ多くの人に知らしめしハ其美名を末境に知らしめんがためなりしとぞ寄特なれバ讃詞ハこゝにもらしつ

むかし天長六年六月尾張國の孝女吉弥侯部(きみこべ)長子に位階を進ましめし事類聚國史にのせたるをはじめ近世海東郡八ッ屋村當郡島ヶ池(しまがいけ)村剣浦(うくわら)村の忠女孝女及び愛知郡菱野(ひしの)村の孝婦なり知多郡古見(こみ)村の忠女なとにいたるまで忠孝をもて称せらるゝもの挙(あげ)てかぞへがたし當国の人ハ婦人に忠孝多く男子に勇義を備(そな)へるもの少し是ハ素盞烏尊日本武尊の二尊武勇の魁首(くわいしゆ)其妃稲田(いなだ)姫宮酢(みやす)姫の両姫貞操(ていさう)の本源にましましけるがともに當国津島熱田にしづまり給へバかくまですぐれたる婦人どものあるなるべしとぞ覚ゆる

尾張名所圖會巻之七　終

春江小田切忠近圖畫
文園岡田啓
梅居野口道直 仝撰
瑞齋加藤貽豐儁書

天保十二年辛丑十一月 脱稿
同 十五年甲辰二月 發兌

尾張書肆 仝
名古屋本町九丁目 菱屋久兵衛
傳馬町五丁目 菱屋久八郎 合梓

發行書肆

名古屋本町壹丁目 風月堂孫助
同 本町三丁目 菱屋藤兵衛
同 本町七丁目 永樂屋東四郎
同 本町十丁目 松屋善兵衛
同 小牧町 美濃屋伊六
京都御幸町御池上ル 菱屋孫兵衛
同 寺町松原上ル 菱屋治兵衛
大坂心齋橋北久太郎町 河内屋喜兵衛
同 順慶町 柏原屋清右衛門
江戸芝神明前 岡田屋嘉七
同 日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛

な〆七両七十七
サロすもし

三不